



続・傘がない～下駄の男

めけめけ

午後の雨

「ふー、ひで一雨だなあ」

ラーメン店に入ってきたその男は、招かれざる客であった。人は見た目で判断してはいけないと、子供の頃に教えられた。しかしそれは、時と場合による。家に風呂がなかったワタシは、週に3回、近所の銭湯に通っていた。

大人は『見た目で人を判断するな』と子供に言う。それも時と場合によりけり。背中に絵の描いてある男の近くには、一定の空間ができていたし、『ねえ、どうして背中に絵が描いてあるの?』と竜や虎の絵に向かって指をさす子供の指は、保護者によって目立たないように無理やり下げられる。

人に指をさすんじゃない——問題がいつも簡単に挿げ替えられる。

我々の社会は常にダブル・スタンダードの中にある。それは決して忌むことではない。世界は一つではなく、幾多にも分裂し、分かれ、互いが干渉しあっているのだ。グローバル・スタンダードなどというものが必要とされること自体が、多種多様の規範が存在することを証明している。

招かれざる客は、明らかに我々——店員3名、カウンターの奥の席に座るワタシと、二つ席を置いてサラリーマンらしき2人組み、テーブル席の学生3人組みとは違う世界に生きていることがわかる。頭のとっぺんから足の先まで、刑事ドラマに出てくるようないわゆる『かたぎ』ではない人間だった。

「餃子定食とビールくれ」

店員が水を運ぶよりも早く、大きな声で自分の要求を相手に伝える。男の存在に気付いていなかった学生3人組は一瞬会話を止めた。だれもヴォリュームを揚げていないのに、テレビの音量が上がったような気がした。

「現在、東京地方に大雨洪水注意報が出されております」

夕方の情報番組では新宿や渋谷、品川の駅周辺の映像を流している。新宿はまだ降っていないらしいが、品川はかなりの雨だ。そしてついさっき、このあたりも強い雨が降り出した。

ワタシは外出先からの帰り、昼飯を食べ損ねたので遅い昼食をこの店でとることにした。

セットメニューは注文しない

近所の書店で衝動買いした——それを衝動買いというのかどうかはわからないが——スティー

ブン・キングの短編集を読みながら、背油の浮いたこってりした醤油ラーメンを食べていた。男が訪れた時点で麺は食べつくし、スープをすすっていた。ここからが長い。麺を食べながら本を読むと、どんなに慎重に食べてもこってりの油を含んだスープの汁が本に飛び散る。ワタシはそれが許せなかった。だから麺を食べ終わってから本を読み始める。無論、スープを最後まで飲みきるといふ、ワタシなりの作法、美味しいものを食べさせてもらったことに対する礼節は尽くさねばならない。

キングは短編がいい。それにワタシのライフサイクルには長編は向いていない。と、いうよりはこうして外で食事をしたり、移動の合間にしか本を読まないワタシにとって『ダーク・タワー』は長すぎる。

家では小説を読まない

学生の頃から本を読むことにはあまり関心はなかった——というより嫌いだった。社会人になり、移動時間の暇つぶしにたまたま買った本がキングの短編集だった。短編といってもキングの短編は映画の原作の宝庫だ。最近のものでは『ミスト』が良かった。ワタシは何度も繰り返してみた。実に興味深い作品だ。あのシチュエーションを妄想するのは実に楽しい。

たとえば今、この店に閉じ込められたらどうなるか……おそらくあの招かれざる客を中心に話は進むだろう。カウンターを仕切っているあの店員は結構当てになるかもしれない。よく店を切り盛りしている。多分……最初の犠牲者は先ほど注文を採りに来たバイト君だろう。君は真っ先に「様子を見て来い！」と招かれざる客に命令されて、異形のものの餌食になるだろう。

「うー、あちいなあ」

招かれざる客は、急な雨に降られて慌てたのだろう。この店に入ったのは、予定の行動でとはちがうのではないだろうか。腕時計——自己主張が過ぎる、ワタシの嫌いなタイプの腕時計を何度か見ながら「まあ、いいか」とつぶやくと、カウンターに置いてあったスポーツ新聞を広げて注文の品が届くのを待っている。

雨宿り……か。

予定変更だ。

まあ、いい、確立は……今日の降水確率ほどではないが、条件はそろっている。あとはあの男次第だ。決めるのは、ワタシじゃない。

雨宿り

先に席を立ったのはサラリーマン風の二人組みだった。おそらく外回り営業の上司と部下という関係だろうか。やや恰幅のいい中年男は、エネルギーがスーツを着て歩いているような印象だ。その部下と思しき細身でよく言えばスタイリッシュな青年は、入社して間もない新人という初々しさは感じられない。こなれた身のこなし——エリートか、エリート崩れか、鼻持ちならない自信家といったイメージだ。

「雨、まだ結構降ってますねえ」

「あー、このこのとこ、ずっとこんな感じの天気だよなあ。まったく、折りたたみじゃあ傘差してもスーツがびしょびしょだよ。ないよりかはましだけどな」

レジは出入り口のすぐそばにある。「会計は別々で」まあ、そうだろう。二人ともカバンから折りたたみの傘を取り出した。使い古されたシワシワの傘と、折り目のきっちりついた下ろしたての傘が二つ、まるで滝の中に飛び込むように雨の中に消えていった。

まあ、外回りのサラリーマンなら、この時期、折りたたみの傘は欠かせないだろう。しかしワタシはどうにも折りたたみ傘は好きにはなれない。無論その機能性は特筆すべきものがあるのだが、使った後、きれいにたたむのが面倒だ。少しでも気を抜くとシワになってしまうのが、どうにも許せない。しかしそれにも増してワタシが許せないのはビニール傘だ。

ビニール傘は使わない

まさしく大量生産、大量消費、道具に対する冒涇である。もちろん、ワタシも使うことはある。ビニール傘が嫌いだからといって、雨に濡れることをよしとはしない。選択肢がそれしかなければ、仕方がないと思う。だが、それでも許せない。あんなものが存在するから物を大事にしくなくなるのだ。

大事に思わないから……思わないから、人様の物でも勝手に……

学生3人組はすでに食べ終わってはいるが、この雨の中、外に出なければならぬほど、スケジュールに追われてはいないようだった。時間を持て余す——まさにそんな感じだ。まあ、学生の頃は時間は無限にあるように思えるものだ。しかし無駄に消費した時間は、いつか必ず自分に返ってくる。あの時もっと、時間を有効に使っていれば……それに気付くのは、早いほうがいい。

ところで、今読んでいるキングの短編集は本当に面白い。『もしも誰も人が寄り付かないようなところで仮設トイレに閉じ込められたら——』という発想はゾクゾクとする。確かにあのトイ

レに入って、ドア側に下にして横倒しになってしまったら、まず自力で脱出することは不可能に近いだろう。それに、かりに排泄物をためるタンクから外に出られると思っても、果たして自分にそれが実行できるかどうか。

狭い穴に入り込んで身動きできなくなる経験は、子供の頃誰もがすることではないだろうか？頭は入ったものの行くに行けない、引くに引けなくなったとき、もう一生このままここから動けないのでは？という恐怖に苛まれる。あれは確かに怖い。ましてそこが、トイレのタンクとなれば、なおさらだ。ワタシがもしも世の中にどうしても許すことのできないヤツがいたら、是非この方法を試してみたいものだ。人は誰でも意地悪されるのはいやだが、するのは好きだ。そして、その様子を遠くから眺めるのはもっと楽しいだろう。

まあ、いい、問題は今日の雨、そしてあの『招かれざる客』だ。

傘がない

確かに『集団』というのは個人のモラルを下げる機能があるのかもしれない。だが、ワタシが待ち望んでいる『状況に至る』ようなことは今のところ起きていない。

たとえば、あの学生の集団の場合、3人のうち、一人が傘を持っていなかったとすると、残る二人のどちらかの傘に入れてもらえばいい。また二人が持っていない場合は持っているやつが、持っていない二人の行動にあわせることが多い。そしてほとんどの場合、雨が弱くなるまで待つ。やみそうになれば、傘を売っている店——コンビニや気の利いたドラッグストアまで3人で傘に入れていい。

やはり、『事が起きるとき』は一人でいるとき、そして、『油断しているとき』なのだ。あの若者のように、そしてここにいる『招かれざる客』のように……

罪の意識を感じないのかと問われれば、答えに窮しただろう。だが、それをワタシに問える人間など存在しない——ただ一人をおいては……

最初のときは驚きと恐れと後悔だった。あの日、下駄の男によって持たさされた特別な力——傘を置き忘れてしまってもかならず持ち主のもとに戻るといふ信じがたい『魔法』は、ワタシに傘に対する愛着を更に深いものにした。何か特別のいわくがある傘ではなかったが、下駄の男——ひょうひょうとして、どこか捉えどころのない不思議な男が『まじない』をかけた日から、特別な傘になったのだが、それでもそれは『ないよりはまし』という程度のことでしかなかった。

ある日、ワタシの傘が盗まれた。その盗んだ男は過去に下駄の男の傘を盗んで、ちょっとした『御仕置き』をされたにもかかわらず、また同じ事をしたのだ。その男はワタシの傘を盗んで1分もしないうちにこの世を去った。車にはねられたのだ。道路を渡ろうとして駐車している車と車の中から飛び出したところを乗用車にはねられたのだ。打ち所が悪かった。

この事件がきっかけでワタシの傘は特別な傘になった。この傘が盗んだ者に対してあまりにも過剰な反応をすることに驚き、それを自分が所有していることに恐れ、そしてあの日、下駄の男に出会ったことを後悔した。

しかし3日後には、驚きはなくなり、恐れる必要はないのだと自分に言い聞かせた。だが、後悔はしている。それは『なぜ下駄の男に出会ってしまったのか』ではなく、私が『ワタシ』であることへの後悔である。つまり『ワタシ』という人間は、このような状況に置かれたとき、この傘を始末するわけでもなく、家の押入れにしまいこむのでもなく、以前となんら代わり映えのしない平凡な日常を過ごしている。

いや、平凡ではない。まるで狩をするハンターのように、或いは不正を正す番人のように冷たく世間を見つめるようになった。

今まで見て見ぬフリをしていたものに対して注視し、よりワタシが心地よく過ごせるように『努力』をするようになった。だから下駄の男には感謝している……ということになるのだが、はたしてそのことにはやはり自信がない。あの男が今のワタシの行いを知ったら、果たして……

「ちいっ！」

招かれざる客は、携帯のメールを見るや食べかけの料理には目もくれずに席を立った——間違いない。この男はきっとやる。

レジで勘定を済ます。

「毎度ありがとうございます」

店員がどんなに愛想よくつり銭を渡しても、まるで無反応だ……外の雨にしか関心がないようだ。招かれざる客は、居心地の悪いと事から、更に居心地の悪いところへ行かなければならないことに対する不快感を隠すことはしなかった。店のドアを開ける。傘置き場には似たような黒い傘が何本かさしてある……持ち主でなければ、ほぼ区別をすることは不可能だろう。男はその中から一本の傘を手に取り傘をさす。しばらくさした傘を眺めてから店の前を離れた。

ワタシは読んでいた小説を丁寧にかばんにいれ、席を立った。

「ご馳走様」

心のそこから感謝しているわけではない。親に教わったからでもなければ、学校で教わったからでもない。これは礼儀というよりは流儀の部類だ。すばやく勘定を済ませる。店の外に出る。ワタシの傘はそこにはない。でも大丈夫、ワタシの傘は必ず帰ってくるのだから……

キキィィィィ！

ドォォオン！

誰か、誰か救急車を！

激しく降りしきる雨の中、一本の傘が開いたまま、くるくると独楽のように回っている。

不可解

東京都江戸川区の笠井町地域を管轄する江戸川南警察署。近年急激に人口が増加し、暴力団による組織的な犯罪と思われる事件も増加。さらに中国系マフィアの活動範囲もこの街に広がり、後藤刑事は多忙な毎日を送っていた。ある雨の午後、かつての上司から一本の電話が後藤にかかってきた。

「後藤さーん、交通課の岡島警部補から3番です」

「あー、今出る……すまん、岡さんからだ。また、こっちからかけ直す」

後藤は雑多な机の上に置かれた書類に目を通しながら、『再TEL』と鉛筆でメモを入れる。こういうことはやはり鉛筆がいい。

「あー、岡さん、後藤です。珍しいですね署に電話なんて」

「携帯鳴らしてもでねーからよ。署に直接かけたよ。お前はなかなかつかまらんからなあ」

後藤は鉛筆を持った手で頭をかきながら思いついた言い訳をそのまま口にした。

「すいません、立て込んでいまして……」

「ふん、まあ、四課はこのところ忙しいみていだからなあ」

「そーなんですよー、あー、四課じゃないっすよ、組織犯罪対策課っていうたいそうな名前がついてますよ」

「うるせー、面倒くせー、俺らにとっては四課は四課だ」

車の音、無線、雨、笛の音——どうやら岡島は現場から電話をかけているようだ。

「で、なんです、なにか事件でも？」

「あー、手短かに用件だけ言う。さっきな、笠井駅近くのえーと、なんだ、最近オープンしたなんとかとかいう中華家の前あたりでな、事故があったんだが……」

「えーと、たしかあ……ラーメン一杯390円の店でしたっけ」

「あー、そうそう、その390円の店の前で死亡事故、道路を横断しようとして乗用車に引かれたんだが、そのガイシャっていうのがちょっと気になってな……」

後藤は財布の中に店のオープン記念の割引券が入っていることを思い出した。もう期限は切れているかもしれない。

「こっちの管轄ですか？」

「あー、加藤三治だ」

「加藤って、ちょっと待ってください岡さん！それは……」

「あー、これで3件目ってことになるか」

「で、どうです、見立ては？」

「まったく関係ない。ただの事故だ。道路を横断しようとして出会い頭にどーんってやつ、まあ雨で視界も悪かったって事になるんだが……」

「同じですね。これまでの2件と……」

後藤は頭から手を下ろし、さっきメモした紙の裏に文字を書き出した。

『加藤 8月』

『三河 6月』

『山本 』

「三河が6月、で加藤が8月、山本は・・・5月でしたっけ？」

「あー、そういうことになる。見立ては間違いねー。それは俺が保証する。現場はきれいなもんだ。なんの疑う余地もない」

後藤は『山本』の文字のあとに『5月』と書き足した。

「.....だが、こんなことは初めてだ」

「わかりました。今から現場に行きます。岡さんはまだ現場に？」

「あー、すまん、俺は次の現場に行かないとならん。今日みたいな雨の日はどうもな.....最近ドライバーが未熟なのか、歩行者が無謀なのか」

「わかりました。誰かに引き継いで置いてください。15分くらいで着きますから」

「あー。なあ、後藤.....こいつは何かな、天罰ってやつかな」

後藤は再び鉛筆を持った手を頭にやり、髪の毛をかきむしった。

「岡さん、もしも神様ってやつがいて、悪いやつに天誅を下したとしてです、そしたら俺は神様にワッパかけにいけますからね」

「ふん、相変わらずだな。だからお前、出世しないんだぜ」

「へいへい、この世界に入って鬼のような先輩にみっちり仕込まれましたからね。今更賢くまわれと言われても、俺はそんなに起用じゃないっすから」

「言うなよ、じゃ、あとは頼んだぞ」

小気味のいい会話ではあるが、なんとも不愉快な話だ。

「まったく、どうなっちゃってるんだ」

後藤刑事は江戸川南警察の組織犯罪対策課に所属している。いわゆるマル暴——かつて四課と呼ばれていた部署の刑事だ。岡島は交通課の警部補でかつての後藤の上司だ。二人は署内でも有能な刑事であったが、やや独断と専行がすぎ、周りとの強調を欠く事があった。それなりの実績も上げたが、同じようにそれなりの問題も起こしている。

「こりゃまた、いらんことをするなと、署長から言われるだろうが.....」

後藤は素早く身支度をして現場まで車を走らせた。

「まあ、言われる前にやっちまえば、どうということはないか」

後藤は車を走らせながら、『再TEL』と書いたメモのことを思い出したが、当面は忘れることにした。

「すみません。立て込んでいて……忘れちゃったってか」

現場

事故現場に着いた頃には雨は上がっていた。加藤は雨の中、道路を渡ろうとして、主婦が運転する乗用車にはねられた。法定速度であり、被害者が道路に駐車していた車と車の間から急に飛び出してきたため、ブレーキを踏む間もなくモロにぶつかったらしい。跳ね飛ばされた被害者は宙に舞って頭から落ち、反対車線に転がった。首は曲がり背中をむいていたという。ほぼ即死だ。

「目撃者は？」

「はい、数名の目撃者がいますが、事故の瞬間、ガイシャは傘で頭を低くするような格好で急にあそこの車と車の間から飛び出したようで、これといって不審な点はないようです」

「つまり、単なる事故というわけか」

「えー、ただ……」

「うん？なんだ、何かあるのか」

「ガイシャがさしていた傘が見当たりません」

「傘が……ない？」

「ガイシャが跳ねられた瞬間確かに近くで傘を見たという証言があるのですが、まあ、救命や通行の邪魔になるので誰かが避けたのだとは思いますが……」

「わかった。ご苦労。念のため近くの防犯カメラ当たってくれ」

「わかりました」

後藤は現場の警官の報告から、加藤が事故の前に立ち寄ったラーメン店に足を運んだ。

「あー、すまん、ちょっと話を聞きたいんだが」

後藤は警察手帳を店長に見せて店内を見回した。

「事故の前、加藤はどんな様子でしたか？」

店長は腕を組みながら怪訝そうな顔で後藤を見つめた。

「うーん、まあね、あーいう感じの人だから気にはなったけどね。刑事さんにお話しするようなことは何も……店に入ってきたときは、これといって急いでいたわけではなさそうでしたが、携帯ながめてて、多分メール見てたんでしょね。用事を思い出したって感じで、急いで外に出て行ったってところだね」

「ありがとう。あと一、他の客なんだが、加藤が食べているとき店内には何人いたかな」

「えーと、カウンターにその加藤ってひととサラリーマンの二人組みに、あー、あと一人たまに顔を見せるお客さん。オイ信二！テーブルはどんなお客さんだったっけ？」

アルバイトらしき若い男が天井を見上げながら思い出していた。

「えーと、学生の3人組と……あー、多分それだけですわね。」

「そうか。すまない。邪魔したな。あー、一応何か気がついた事があったらここに電話してくれ」

後藤は手帳から名刺を取り出し店長に渡した。

「まあ、それ以外でも、なんかもめごとがあったらいつでも電話してよ」

「毎度ー、刑事さん、たまにはメシ喰いに来てくださいよ」

「あー、そのかわりネギは抜いてくれよ」

店を出ると胸ポケットからタバコを取り出し、口にくわえる。

「ふー、まいったなあー、こりゃ……手がかりは……傘だけか」

検証

「後藤さん、現場の防犯カメラの映像入手しました」

現場では結局、めぼしいものは何一つ見つからなかった。部下の鳴門刑事に事故現場付近の飲食店やマンションの防犯カメラをチェックするように指示をして、後藤は現場を後にした。その二日後のことである。

「おー、どれ、なにかでるかな」

「残念ながら事故のあった場所を捉えた映像はなかったんですが、中華店に入る前の加藤の映像がありました」

後藤は右手で頭を書きながら顔をゆがめた。

「うーん、収穫なしか」

事故現場から少し離れたところにあるコンビニの防犯カメラに雨を避けるように小走りにコンビニの前を横切る後藤の姿が映っていた。

「うん、ちょっと待てよ」

後藤は身を乗り出し画面を巻き戻す。

「加藤のヤツ、傘、持ってねーな」

ビデオを持ってきたのは後藤の下で働く新米の鳴門刑事だ。

「鳴門ー！お前気づけよなあ」

「すいません。でも、加藤のヤツ、傘をどこで……」

「そんなもんいくらでも想像がつく。メシ喰うのが目的じゃなくて、傘をパクるのが目的でラーメン屋に雨宿りしたんじゃないか」

「じゃあ、事故直前に持ってたって言う傘は」

「まあ、普通に考えれば、あのときあの店にいた誰かのものってことになるが……」

「じゃあ、事故の後、自分の傘がないことに気付いた客の一人が、道路に放置されていた自分の傘を持って帰ったって事ですかね」

「うーん、どうもなあ」

後藤は再び頭を書きながら顔をゆがめながら天を仰いだ。

「ちがいますかね？」

鳴門は自分の推理に自信はあったが、後藤の表情からは明らかに同意を得られていない事がわかった。

「いや、ちがわんと思うぞー、それはいいんだー、それはいいんだがなあー」

鳴門は半年ばかり後藤の下で働いているが、こういうときにどうすればいいのか、大体察しが着くようになっていた。

「洗い直しますか？前の2件」

後藤は片方の目を瞑り、鳴門をチラッとみた。

「そうだな。鳴門、悪いがそうしてくれるか。忙しいところスマンな」

鳴門は素早く身支度をすませ、ドアを飛び出そうとした。

「あー、鳴門！」

「えっ、なんです？」

「あー、捜査の基本だ。真実は……」

「真実は——必ず痕跡を残すでしたっけ？」

「うん、よし、頼むぞ」

それはかつて後藤が岡島に叩き込まれた言葉だった。

「たどり着くよ。真実は、決して消えない、ただ隠れているだけだ」

目撃者

カラン、コロン、カラン、コロン

夜の笠井町、小気味よく、軽快なリズムで下駄の音が響く。下駄の主は、作務衣に身を包み、身のこなしは涼しげで優雅。頭髪はなく、見事に磨き上げたといった感じだ。一見仏門のようにも見えるが、その眼光は鋭く、肉欲に縁がないようには見えない。肉食獣というよりは猛禽類といった感じか。もちろん死肉食いではない。

下駄の男

「まったく不始末じゃわい」

下駄の男はひどく機嫌が悪いようだ。下駄の男がイライラしているのは夕方の雨。それは予報どおりの雨だったので自分は傘を用意していた。昼間の用事を済ませ、帰り道、駅から程なく歩いたところでそれは起きた。

「しかし、あれほどのものとはのおー」

下駄の男の目の前で一人の男が車に引かれ命を落とした。即死だった。下駄の男にとって人の生き死になどたいしたことではなかった。彼にとっては日常茶飯事であり、これまでに幾人もの人間が命を落とすところを目の当たりにしてきた。それは下駄の男の生業ゆえである。しかし、今回のような偶然は、それほど多いことではない。ただ、問題は死んだ人間ではなく、下駄の男の目に留まったひとりの男。

「戯れがすぎたではすまん。これは」

下駄の男が見たもの。それは事故で死んだ男が持っていた傘を別の男が持ち去るところ。その傘にも男にも見覚えがあった。

「まあ、狭い街じゃからのお。会うことはあってもなあ」

下駄の男は以前、ビデオレンタルショップで傘を盗まれた事がある。しかし、その傘にはある特殊な呪術が施されており、盗んだ若者は傘を盗んでから数百メートルのところで車に引かれて足を怪我した。下駄の男にはそのような能力があるのだ。それはいい。下駄の男はそういったことを生業としているのだから。

「余計な事をしたとは思わんが……」

その際、傘を盗まれたところをたまたま通りかかった男が目撃していた。雨に濡れるのが面倒だった下駄の男は、傘を盗んだ男を捜すのに、この男を手伝わせたのだった。そしてその礼に、その男の傘にも同じような呪術を施した。

「厄介ごとは、早めに手を打たないとお」

自分の大事にしているものを置き忘れたり、持ち去られたりしたときにそれを持ち主に知らせ、紛失しないようにするための呪術であり、物に対する執着が強ければ強いほど、それは効果を表す。雨の日に傘がないのは困る。しかしそうでないときには、普通傘を大事に思ったりはしない。執着がそれほど強くは働かない。つまり効果もかなり限定的なはずである。

「しかし、よほどの拘りがあるのか、それとも……」

普通は傘にこの呪術を使っても、それを奪おうとしたものを殺すほどの力はない。下駄の男のお気に入りの傘を盗んでもせいぜい軽い怪我程度で済むのだから、普通の人間であれば、そこまで強い効果は期待できない。思い入れのある人からの贈り物、形見、思い出の品……一般的にそれは傘に当てはまることは稀有であろう。しかし人間のなかには極端に強い「こだわり」を持っているものもいる。その場合、拘りが強ければ強いほど、呪術の効果は上がるのである。

「まあ、本来、拘るということは、いいことなんじゃがお」

これは下駄の男がまいた種である。男はそれを回収しなければならないが、今はそれどころではないのだった。

「まったく、忙しいときに……ふん！厄介じゃ」

下駄の男は、ある仕事の依頼を受けており、今日はその大事な日であった。

「早いところ済ませないとなあ。また今日みたいな天気の日には、人一人死ぬかもしれん。まあ、それによって多少はこの街も住みやすくなるかもしれんがお」

カラン、コロン、カロン、コルン、カルン、クルン……

下駄の音は闇の中に消えていった。

この部屋のルール

「邪魔だなあ」

この街に移り住んで8年になる。住み慣れていた街に比べれば、いくつか気に入らないところはあるが、それはたいした問題ではなかった。ワタシは通勤電車がきらいだった。人ごみ、マナー、雑音、匂い、視線——どれもワタシを不愉快にさせる。それが解消されるだけで、どれだけ平穏が保てるか、わからない。ただ、今はいささか困ったことになっている。いや、かなり困ったことになっている。ワタシの平穏な生活は一本の傘によって壊された。

「そこに立っていられると気になるのだが……」

ワタシの生活はきわめてシンプルだ。部屋の中のものすべてある一定のルールの下に置かれている。ワタシの部屋に入ることができるのはワタシのルールに従えるものだけだ。食品であろうが衣類であろうが、嗜好品であろうが消耗品であろうが関係ない。ここはワタシの部屋だ。

「だが、君たちは他人のルールなんかに従う気はないんだろうが……」

ワタシは借りてきたDVDを袋から取り出し、プレイヤーにセットした。コンビニで買ってきたビール——発泡酒は買わない——それがワタシの、この部屋のルールだ。借りてきたのは『シックス・センス』映画公開時は「この映画にはある秘密があります。まだ映画を見ていない人には、決して話さないで下さい」というメッセージが冒頭に流れることで話題になり、そういったあざとい商法を嫌うワタシは懐疑的だった。封切り後、しばらく経ってから見たこの作品には正直かなり驚かされた。「なるほど、確かにネタバレ厳禁だ」以後、この監督のその後の作品を何本か追いかけたのだが……

「キミたちに多少の冗談とか、そういう事がわかるのであれば、どうか、笑ってみてほしいがな」

ワタシは良く冷えた缶ビールをグラスに注ぎ込み、泡とビールの比率、7対3のビールを身体に流し込む。この瞬間がたまらない。

「できることであれば、この映画を観たらさっさと御引きとり願いたいのだが……わかるかい？これは冗談だよ？それもかなりたちの悪い」

酔っ払ってしまったのか、今日は饒舌だ。しかし、酔ってなんかいない。ワタシの目の前には確かに3人の男がいる。いや「ある」とか「見える」とかそういう表現が正しいのかどうかわからない。ただ、ワタシが酔うことによって、彼らの——或いは、『それら』の存在が希薄になっていくということは、逆説的に『それら』が目の前に存在しているのだということを証明している。

「この映画のオチ、先に言おうか？実はね、主人公、すでに死んでいたんだよ」

ビールグラスを口に、泡が口の周りに残らないよう、うまく流し込む。どこか存在が希薄な3人の男の影に向かって、グラスを掲げてみせる。

「キミたちと同じようにね」

どうやらいい、感じで酔いがまわってきたようだ。ヤツらのうちの一人がほくそえんでいるように見える。

「そんなことはどうでもいいさ。俺たちはここにいたいだけだ。生きていようが死んでいようが関係ない」

そんな目でワタシを見ている。だが、ここはワタシの部屋だ。ここに居ていいのかどうか、決めるのはワタシだ……いや、ちがうな。

「そうか、この部屋が、お前たちに居場所を提供したのなら、従うしかないのか」

この部屋のルールには全てのものが従わなければならない。それはワタシも同じことなのだ。

「わかったよ。しかし、どうでもいいが、そのグロテスクな容貌はなんとかならないのかな？」

最近この部屋に現れるようになった三人目の男の首は、見事に反対側に折れ曲がっていた。

この街のルール

「後藤さん、ありました」

鳴門刑事はビデオテープを片手に後藤のデスクに駆け寄ろうとしたが、躊躇した。後藤は誰かと電で話をしている。旗色が悪そうだ。

「あー、どーもすいません、はい、はい、立て込んでいたもので、えー、えー」

どうやら電話口の相手に攻め立てられているようだ。離れた場所からでも受話器から怒号が聞こえてくる。

「えー、ですからその件でしたら……はあ、はあ……えー、わかりました。必ず。はい、では失礼します」

後藤は右手で頭をかき、口には火をつけていないタバコをくわえ、所在無いといった感じでデスクの上の電話機を見つめていた。

「あー、後藤さん、どーしました？えらく旗色が悪そうですね……」

後藤は不機嫌そうに鳴門刑事を見ると胸ポケットやズボンのポケットを触りライターを探しながらため息をついた。

「ふー、お偉いさんは無理難題をおっしゃる……現場はそんなにホイホイと行かんのだがなあ」

そういうと後藤は目をつぶり、考え事をし始めた。鳴門刑事はしばらく後藤の次の言葉を待ったが、どうやらそれ以上は何も出てこないのだと悟るとビデオテープを後藤に差し出した。

「ありましたよ。後藤さん、例のもの」

後藤は方目だけを開けて鳴門刑事の差し出したビデオテープを見ると不敵な笑みを一瞬見せると再び目を閉じた。

「おー、なかなか仕事が速くなったなあ。俺もそろそろ引退かあ」

「何言ってるんですか、後藤さんに居なくなったら困ります」

鳴門刑事は少し慌てた。後藤が今の仕事に嫌気がさしているという噂は署内では既成事実のようなものだった。だが、その言葉を後藤の口から聞いたのはこれが初めてだった。

「それ、シャレになってないですよ」

後藤は意地の悪い目つきで鳴門刑事を見た。

「冗談はよしてください」

鳴門刑事には噂を噂で済ませられない理由があった。それはかつて後藤の上司だった岡島警部補がどういう経緯で交通課に異動したのかということに関わりのある話なのだが、それこそ当の本人から聞くわけにはいかなかった。

「よし、で、なんか出たか？」

「えーえ、出たというより、やはりなかったです」

「そうか」

「傘が……ありませんでした」

6月11日、午後4時35分、東京都江戸川区在住 三河剛 21歳 道路を横断しようとして、都内の運送会社の社員の運転する4tトラックに跳ねられ死亡。現場は当日夕方未明から雨が降り、視界が悪くなっていたこと、そして三河が急に飛び出したという目撃証言も多数ありました。それによれば、先日死亡した加藤の時と同じように視界が見えなくなりそうな傘のさし方をしていたと……しかし現場の遺留品に傘は見つかっていません。これは現場近くの書店の防犯カメラに写った事故直前の三河の映像です。入店時、傘は持っていません。

画面には書店に出入りする客の様子が映し出されていた。画面の右奥、入り口を出た横に傘置き場がある。入り口そばには週刊少年漫画雑誌が置いてあり、三河はそれを立ち読みしていた。

ここです。三河は5分ほど立ち読みをした後、三河は傘を持って行きました。

「やはりパクったな」

後藤の目は鋭さを増した。それは獲物を狙う獣のような目だった。

「こいつか」

後藤がそういうと鳴門刑事はビデオの一時停止ボタンを押した。

「こいつ、傘を取らずに三河を追いかけるように出て行ったな」

「残念ながら、この映像の人物と対象者リストを照合してみたのですが……」

「なにも出なかった？」

「はい、特にマエやこちらがマークしているリストとは……」

「山本の件はどうだ？」

「あー、山本のほうは残念ながら映像などは残っていないようです」

「調書のほうは？」

「傘に関する情報はないです。ただ事件当日の天候は他の2件と同じ——」

「午後からの雨、それも傘がないと困るような……」

「はい、ですから、山本が同じように傘をパクった可能性は高いかと……」

「人を見た目で判断しちゃー、いけねーな。そう、学校で習わなかったか？」

後藤はまた、あの意地の悪い表情で鳴門刑事を見つめた。

「はあ、ですが、こっちの世界では違うように教わりました」

「人を見たら泥棒と思え……か？」

後藤はいよいよ意地悪な顔をしながら天井を見つめた。

「そうだよ。それがこの街のルールだ」

その筋のルール

「最近、妙な事が起きている」

「はい、まさかあの加藤があんな死に方をするなんて、信じられません」

「まあ、あいつの事などどうでもいい。問題は——」

「誰が殺ったかってことですか？サツの方では事件性はないってことらしいですが」

「あー、こっちのルートからいろいろと探りは入れてみたが、不審な形跡はないそう」

「しかし、偶然にしちゃー」

「あー、できすぎている。今のところこっちに実害はない。しかし、流石にこうも続くとなあ」

「誰かの仕業に違いない……と言いがかりをつけるような輩が？」

「あー、そう。それに厄介なことに」

「他に心配事が？」

「後藤が動いている」

雑居ビルの一室で交わされているこの会話の主は、後藤が長年マークしているこの街の裏の事情に精通し、それはこの街にとどまらずもっと大きな範囲に影響を及ぼす闇の支配者。その力は政界、経済界、そして警察組織まで根を伸ばしている。

「じゃー、やはり、裏には何か事情が？」

「それはわからん。だが、あいつだけは油断できん」

「消してしまえば……よろしいのでは？」

「フン！貴様らはすぐ血を流したがる。ワシはそういうのは趣味ではない！」

「失礼しました。では、このまま放っておくので？」

「いや、それはまずい。まあ、江戸川南署には手を打ってあるが、それでやめるようなら、後藤はもっと出世しとるよ」

声の主はグラスにブランデーを注ぎ、窓の外を眺めた。

「ヤツを呼んである」

「ヤツといますと？」

「あー、この手の厄介ごとには、あの男、拝み屋が適任よ」

「拝み屋……ですか……信用できるのです？」

「できんな。一癖も二癖もある。裏で何を考えているのか、或いは企んでおるのか……」

「ではどうして、そのような輩を」

「7代目！お主も知るときがくる。この世にはな。あーいう者にしか解決できんような厄介ごとがあるということを」

「拝みや……がですか？私にはどうも、呪とか幽霊とかそういうのは」

「フン！浅いわ！まあいい。いいか7代目。ここはワシに任せるのじゃ。若いもんを抑えて置けよ。ワシの言いつけを守らんヤツがどういうことになるのか……7代目、先代がどうないうこ

とになったのか、よーく思い出すんだな」

7代目と呼ばれた男は額から汗を流していた。この老人がいかに強大な力を持っているのか。そしてこの老人の下で仕事ができることはこの上ないことではあるが、一歩間違えば、先代と同じ運命をたどることを誰よりもよく知っていた。

「はい、間違いがないよう。私がじきじきに指揮いたしますので、ご安心を」

「ルールは——守らんな」

声の主はそういと7代目と呼ばれた男に手で合図をした。7代目は部屋を後にした。

「まったく、怖えー、怖えー」

部屋の外では二人の男が待っていた。

「7代目、どうでしたか？やはり中国の——」

「お前ら、いいか、よく聞け。これは絶対の命令だ。手を出すな。あの方からの命令だ」

二人はお互いに見合ったが、早足で歩き去る7代目の後をすぐに追った。

「どうやらこれは、俺たちの領分ではなさそうだ。世の中にはそういうこともあるのかもしれないな……」

「はああ」

三人が建物を出たとき、耳慣れない音が聞こえてきた。

カラン、コロン、カラン、コロン

「フン、現れたか……いくぞ、ワシらのような家業でも、知らないほうがいいことがある」

そういと7代目は止めてあった車に乗り込んだ。

「しばらく待て」

7代目は下駄の男が建物の中に入るのを確認すると車を出すように命令した。

「世の中にはいろんな化けモンがいるんだな」

その道のルール

「はいるぞい」

「ほう、早かったな」

下駄の男は、しわがれた声の主の部屋に招きいれられた。

「なんじゃい、ワシは忙しい身でのお、ちいとばかり、厄介ごとがあつてのお」

「まあ、そういうな。どうだ一杯やらんか」

「フン！ブランデーなどと、ワシは焼酎しか飲まん」

「そうじゃったな。今用意させよう」

そういうとしわがれた声の主は内線電話で用事を言いつけた。程なくすると一人の男が焼酎を持って現れた。

「待たせたな。やってくれ」

「しかし、相変わらずじゃな」

「なにが？」

「お前さんの趣味だよ。さっきの男、いつからかこつておる」

下駄の男はいやしい目つきでしわがれた声の主を睨んだ。

「わかるか。まだ2週間くらいかのお」

「まったく、ワシには理解できん。欲を極めるとそういうもんかのお」

「欲などというものは、戯れよ。和食を食べた次の日は洋食、その次は中華。それと同じことよ」

「フン。食べ物に例えるなどと！ 虫唾が走るわい」

下駄の男は吐き捨てた。この男は7代目とはちがい、まったくしわがれた声の主を恐れる様子はない。

「で、今度はどんな厄介ごとじゃ。前回のはただ働きみたいなもんじゃったからな」

「報酬は十分にしたつもりじゃが、あれでは足りなかったか」

「フン。金額の問題じゃないわ。大体この手の仕事に対価などというものはない。こっちは毎回命懸じゃからのおー」

「まあ、そういうな。ワシも毎日命懸よ。今でもヒシヒシ感じるわ。ワシの命を狙う輩のおぞましい呪詛の気配が」

「どうじゃい。安い買い物じゃろう。この結界のおかげで、夜はぐっすり眠れるじゃろー」

「あー、おかげで楽しくやらせてもらっとる」

下駄の男は先ほど焼酎を持ってきた若い男が、声の主を抱かれている姿を想像して身震いをした。

「気持ちの悪いことを想像させるな」

「かっかっかっかっあ」

しわがれた声の主の笑い声は屈託がなかったが、それが帰って下駄の男に不快な思いをさせた。

「用件はな。最近わしが面倒を見ている組の若いモンが立て続けに交通事故で死んでのう……」

不意にしわがれた声の主が本題を話し始めた。

「ワシが思うに、どこぞから抗争を仕掛けられたというよりは、お主の領分じゃないかと思っ
ての」

下駄の男は始めて顔色を変えた。

「うん、どうした、何か心当たりでもあのか？」

下駄の男は一転、申し訳なげな顔をしてつるつるの頭を撫ぜた。

「いやー、面目ない。そういうことなら、今回は報酬はもらえんな」

「ほー、どうやら訳がありそうじゃなあ」

「あー、まー、いろいろと……この件、ワシに任せてくれれば、そう、3日もかからずに解決し
よう。ただし——」

下駄の男は焼酎をグラスに注ぎ、一揆に煽った。

「手出し無用じゃ。一人の男を探し出し、ワシが止める。これはワシの抱えていた厄介ごと。ワ
シがまいた種じゃ」

しわがれた声の主はじっと下駄の男を見つめている。まるで死者が暗闇からこちらの世界を伺
うような冷たい視線。普通の人間ならその無機質な迫力に言葉を失うであろう。だが下駄の男は
まるで話をやめない。

「ちと、その男には借りがあつてのお。礼にちょっとした施しをしてやったんじゃが、どうやら
それが効きすぎたらしい」

下駄の男は再び焼酎を煽る。そして声の主をじっと見つめた。

「お主でも、ぬかる事があるんじゃな」

声の主の表情がようやく動いた。

「まったく面目ない。じゃがな。これだけは言わせてもらうぞ」

下駄の男は、しわがれた声の主をものすごい気合を込めてにらみつけた。

「ワシはのお、まだ、もうろくはしとらんぞ！」

「かっかっかっかっあ」

しわがれた声の主は先ほどの声よりも大きな声で笑った。

「いやいや、愉快愉快。一晩でにこんなに笑えるとはなあ……わかった。好きなようにしろた
だし」

しわがれた声の主は再び無表情になった。

「後藤という刑事が動いておる。なかなか抜け目のない男じゃ。岡島の部下だった男といえば覚えがあるか？」

下駄の男は焼酎を飲む手を止めて天井を見つめた。

「後藤、後藤、さて……お一、あの青二才か」

「青二才、そう確かにあの頃は青二才だったがな、流石に岡島の下で鍛えられた事はある。やつがなにやら嗅ぎつけたようじゃ」

「フン。警察などと言っても所詮は地方公務員。お主が動けばどうということもないじゃろう」

「後藤という男は組織の人間ではない。組織を動かすのは簡単だが、一人の男を動かすのは——」

「骨が折れる——かあ？」

「そうじゃ。その後藤の動きも止めること。これが条件じゃ」

「むむう」

下駄の男はしばらく声の主を見つめた。声の主はまるで絵画のように動かない。

「まあいい。その後藤という男、面白そうじゃな」

「今回の件、できるだけ物騒なことはしたくない。血を流すのは簡単じゃが——」

「拭き取るのは面倒というわけじゃな」

「まあそういうことだ。最近の若いモンはすぐ血を流そうとする。まったく、あさましいことじゃ」

「フン。お主が言うか……まあ、お主だからいえるのか」

二人の会話はぱったりと途絶えた。それから5分もしないうちに下駄の男は建物の外に居た。静まりかえった闇の中、下駄の男はつぶやいた。

「まったく、何の因果か、何の応報かのお」

カラン、コロン、カラン、コロン

下駄の男は、どうにも不愉快でならなかった。しわがれた声の主とは、ただならぬ縁がある。ふと見上げると暗闇の空に、ひときわ目立つ大きな塔が見える。

「さて、団十郎にでも会いに行くかのお。そうじゃ、今日は団十郎とあの忌々しい闇の塔を眺めながら一杯やるか」

下駄の男の右手には、しわがれた声の主が土産にと渡した高価な焼酎が握られていた。

「どこかで、酒の肴でも買っていくかのお。団十郎の好物は、さて、なんじゃったかのお」

下駄の男は、再び闇の中へ消え行った。

最初の一人目を見た時は流石に腰が抜けた。

「な、なんで、お前がここに」

仕事から部屋に帰ってきたとき、一瞬、誰かが部屋の中にいるような感じがした——そんなはずがない。ワタシは部屋に上がり、明かりをつけた。部屋の隅に何かの気配——人の……影？

見覚えのある顔、そうヤツだ。下駄の男の傘を盗み、ワタシの傘を盗み、そして死んだ男。男はワタシに気付いた様子ではなかった。表情はうつろで視線はどこを見ているのかわからなかった。存在すること事態が不快であったが、ワタシを何よりも不快にさせたのは、男が事故にあったときのままの様子——つまり頭から血を大量に流し、見ているだけでも血なまぐさい匂いが漂ってきそうな姿で立っていることだった。

「これが、幽霊ってやつなのか……しかしなんでまた、こんなところに……」

なんで？それは単純なことだ。殺したのはワタシ、いやワタシの持っている『あの傘』なのである。あの事故からちょうど7日になるのか。もしかしたらこの男、あの事故の日からずっとここに居たのかもしれない。確かに何か気配は感じていたのだ。しかしワタシにはそのような存在を信じることはできなかった。しかし、今こうしてはっきりと見えている。

「なんだ、ワタシに恨み言でもあるのか……ワタシはなにも悪くない。悪いのは……悪いのはおまえ自身じゃないか」

はたしてワタシの言葉があの男に通じているのかはわからない。ワタシの強い語気に押されたのか、男の姿は見えなくなった。しかしそれからというもの、男はその部屋の隅にずっと居続けている。姿は見えなくとも気配でわかる——信じられないことにわかるのだ。だから見ようと思えば見えてしまう。見たくないと思えば見えなくなる。はたして、そういうものなのか、ワタシにはわからなかった。

だから二人目の時には驚かなかった。やはりそうかという感じだった。3人目の時は何も考えていなかった。それは夏の日に沸いて出てくる虫のようなものだった。最近ではいい話し相手になっている。もちろん相手は何もしゃべらない。視線すら合うことはない。今日のジョークは最高だと自分でも思っている。もしもこいつらにこの映画『シックス・センス』を理解する事ができるとしたら、もしかしたら一人くらいは成仏するのかと期待した。それはもはやユーモアの世界だった。

しかし、このままいくと、一体全体ここには何人の幽霊が集まることになるのか……

「近所に迷惑だけはかけるなよ」

最近はずっかりそれが口癖になってしまっている。

ワタシははたして、病んでいるのだろうか？ワタシは果たしてまともなのだろうか？

「何一つ変わっていないさ」

そう、ワタシは何一つ変わっていない。ワタシはワタシのルールに従い、今までどおりに暮らしてきている。少し騒がしくはなったが、それもワタシのせいではない。みんな……みんなあの男、下駄の男がしたことなのだから。

「あの男は今頃、どうしてるんだ、この街にいるのか、そもそもあの男はこの世に存在するのか」

ワタシはまるで念仏か呪文のようにその言葉を繰り返しながら眠りに着いた。あの下駄の音を思い起こしながら……

「あー、岡島さん、ちょっと話があるんですが、時間取れますか？」

後藤が交通課の岡島警部補に電話をかけたのは夜の8時を回っていた。

「どーした、へビでも出たか？」

「あー、まー、そんな感じです。今どちらですか？」

「そーだなあ。9時過ぎには時間が取れる。10時に例の店でいいか」

「すいません。御手間取らせて」

「何、構わんよ。話を聞くだけならなあ」

「ちいっ、まったく喰えないオッサンだ。人に振っておいて、話聴くだけかよ」

そうぶつぶつ言いながら、後藤は机に積みあがった書類の山と格闘を始めた。

駅近くの雑居ビル。人気のあまりないバーのカウンターに二人の中年の男が頭を低くしながらぼそぼそと話をしている。

「どーやら上のほうから圧力がかかっているようなんです。いったいなんだと思います？」

二人はバーボングラスの中の氷を回しながら話している。

「うーん、悪い予感ってヤツ？どーもこのヤマは普通じゃねーなあ」

「普通じゃないって、どういことです」

「なあ、この三つの事件なあ、オレの見立てじゃ間違いなく事故だ。お前が調べたっていう傘のことも気にはなるが、じゃあそいつが後ろから突き飛ばしたとか、そういうことはまずない」

「そうですねー、確かに現場から傘がなくなっているのは気がかりですが、大体、傘に何か仕掛けがあったとしても、ガイシャが傘を盗むなんていうこと予測できませんからね」

「あー、だから普通じゃないって言ってんだ」

「はあ、まあ、そりゃあそうなんです、今のところ傘の持ち主を探すしか手がかりがないもんで……」

「メンは割れてるのか？」

「いえ、今のところは……まあただ、事件が同じ管轄内で連続して起きていることを考えれば……」

「まあ、このあたりに勤めているか、住んでいるかだな」

「えー、こちらとしても次の事件は絶対に防ぎたい。ヤツら悪党で、まあ、死んだからって、そのほうが世の中のためって声もあるでしょうが、こっちとしては重要参考人ですからね。せっかくマークしてたのに、こんな風に次から次へと……」

「うん、どうした？」

「いやー、確かに最初はいわゆる縄張り争いとか、こっちの管轄のことかと思って事件を見てたんですがね」

「あー、捜査に先入観はいけねーなあ、まあ、もっともオレが怪しいなんて、そっちに振っておいて言うのもなんだがな」

そうって岡島は大きな声で笑うと、再び小さな声で話し始めた。

「最近ハマじめそんな連中が頭ぶちきれて、悪人を成敗するなんてことも起きるからな。少し対象を広く見たほうがいいかもしれん」

後藤はにやりとしながら、グラスの中の酒を一気に口に流し込んだ。

「まあ、そうなると、こちらの管轄じゃなくなるんですがね」

「そーだな。気になるのはなんでこんななんでもないヤマに圧力がかかったかってことだが」

「そっちのほう、うまく探り、入れられませんかね」

「オイオイこっから先は別料金だぞ。今日のおごりじゃ足らんからなあ」

「岡島さんが異動になってから、どうもこういうツテがなくて困ってるんですわ」

「頼りにしてくれるのは構わんが、いつまでもというわけにはいかんからな」

「えー、その辺はわかってますって。しかしどーも、オレは上にウケが悪くて……」

「まったく、悪いところばかりワシに似てもうれしくないぞ」

そういいながらも岡島の表情は満面の笑顔がこぼれていた。

「いいか後藤。ワシら正義のためでも、世の中のためでも、ましてや警察組織のために動いているんじゃない。この街の安全を守るために、この仕事をやってるんだ。それさえ間違わなけりや……」

「それさえ間違わなければ、道を失うことはない」

「そうだ。権力をもった人間が道を失えば、いいことはねー。それはお前が……」

「あー岡島さん、その先はやめましょう。その先は……」

「あー、そうだったな。少し飲みすぎたかもしれん。これで失礼するよ。まだ飲んでいくんだろう」

「はい、オレはもう少し、じゃあ、例の件、宜しく申し上げます。ご迷惑お掛けしますが……」

「何、気にするな。じゃーな」

岡島は席を立つとそのまま店を出た。後藤は岡島の後姿を見送るとマスターに酒を注文した。

「道を見失う……まったく、いやなことを思い出させる」

その夜後藤はあと3杯バーボンを注文した。

ハッキング

「えーと、どれどれ、どんなヤツかのお」

その部屋は書斎と言うにはあまりに雑多としたし、仕事場というにはあまりに整理がされていないようだった。壁には本棚がぎっしりと並び、様々な書籍が縦に横に積まれていた。机は大きく両袖に引き出しがついているが、その引き出しは開きっぱなしで、その上にいろんな書類が山積みになされ、とても引き出しを使うことはできそうもない。机の上には数台のPCが置いてあり、液晶のディスプレイが4面すべて違う画像が表示してある。

そのPCに向かって一人の男がブツブツといいながらキーを叩いている。

「うん、これでよし」

男が開いているのは警察のデータベース。男は警察のデータベース侵入している。俗に言うハッキングである。

「どれどれ、ほー、悪じゃのおー、まあ、だからといって死ななあならんことをしたわけでもないかのおー」

男が見ていたのは加藤三治、三河剛、山本茂という男のデータだった。

「おー、こやつ、ワシの傘を盗んだ……うーん、少しお灸が足りんかったかのお」

男は山本茂という若い男の写真を見ながらあの雨の日のこと、山本が男の傘を盗んだ日のことを思い出していた。

「何の因果かのお、何の応報かのお……」

次に男は警察職員のデータベースを検索し始めた。後藤という名前、江戸川南署で検索条件を絞る。

「ほー、いい面がまえじゃのおー。後藤忠則巡查部長 うーん、37歳か、わかいのおー」

しばらく後藤に関するデータを閲覧すると、画面を落とした。「長居は無用じゃ」

「さて、問題はあの男じゃが、さて、およそは見当がつくが、どうしたものかのおー」

男は——下駄の男は再びPCのキーを叩き始める。画面にはいくつかの項目が打ち込まれては、新しい画面が立ち上がる。どうやら次のハッキングを始めたようだ。それから30分ほどが経過し、一つの画面で下駄の男の手が止まった。

「よし、あとは、パスワードをあてるだけじゃのおー」

男はパスワードを解析するソフトを立上げ、しばらく画面の動きを待った。

「ふん、まったく、脆いわ」

あっという間にパスワードが解除され、新たなデータベースが画面上に開いた。

「ワシの名前、返却した時間、その後5分以内の返却データ。延滞なし、それから、あとなんかあったかのおー」

いくつかの条件でデータを絞り込み、下駄の男はついに一人の男にたどりついた。

「真壁直行……なんともまあ、硬そうな名前じゃわい」

下駄の男は真壁直行に関するデータを閲覧し、住所をメモした。

「最近借りたのは…『シックス・センス』ほおー、なるほど、なるほど、こいつはまた、少々厄介なことになっておるかも知れんのおー」

下駄の男は禿げ上がった頭をなぜながら、しばらく考え事をしていた。

「ワシも、見てみるかのお」

下駄の男はPCの電源の一部を落とし、部屋を出た。どうやら何台かのPCは常時電源を入れているようだった。

「おー、いかん、ワシとした事が！」

下駄の男はやや歩いてから立ち止まり、歩く方向を変えた。

「あっちの店じゃ、まだ貸し出し中じゃわい」

男はいつもとはちがうレンタルショップで『シックス・センス』を借りた。いつも下駄の男が通っているレンタル店でそのDVDは貸し出し中であった。

「旦那様、なにかご心配なされていることでも？」

闇の中に囁くというよりは、小さな声——それは見事に闇に調和し、ろうそくの火も揺らがないような静かな口調であった。美しく妖艶な美青年の声。

「いや、案ずることはない。こういうことは専門家に任せておくのが何よりだ。それにあの男に依頼して悪い結果が出た為しがない」

声の主は、少ししわがれた声——その声はどんなに静かに、小さく語ろうとも周辺の空気をすべて支配するような強い力が感じられる。闇に生き、闇を統べる者の声。

「あの7代目——榊原と言いましたか。あの男の子とが気がかりで？」

「フン。若さよの一。経験と実力がある。ある程度のことは対応できる。そう思っているうちはまだまだ若い。今回の件、もし手を出すようなことがあれば、それこそ大きな火傷をするやもしれんが、まあそれもいい勉強になるか。命を落とすようなことはあるまい」

2人の会話は極々狭い闇の中でかわされている。だれもその会話に入れないようなそんな空間に。

「人にはそれぞれ見えているものが違う。ほとんどの人間は表側、陽の当たる場所を歩き、7代目のように裏側、闇の社会に生きるものの数は多くはない。しかしその裏側と呼ばれる社会にもさらに表と裏があるのじゃ。それは視野を広げるとか発想の転換などとは桁の違う世界じゃ。それを見ることが出来る者は特別じゃ。いや、見て正気を保てるものはほとんどいない」

「古の支配者……」

妖艶な魅力を持つ美青年は自分が口にした言葉が、自らを震え上がらせるほどの恐ろしい言葉であることに気付いて言葉を切ろうとするよりも早く、『声の主』の右手が彼の口を押さえた。

「それ以上は……無用じゃ」

闇の深淵の中に時の流れが引きずり込まれたかのようにすべてが凍りついた。妖艶な美青年は息をする事ができなかった。

「知りすぎたもの、しゃべりすぎたものに明日が来たためしはない。よーく覚えておくんじやなあ。まだまだお前には、楽しませてもわねば、苦勞して手に入れた甲斐がないというのまだ」

そういつて『声の主』は男の唇から手を離した。まるで深い水のそこからようやく水面に顔を出したように激しく息を吸った。が、妖艶な美青年の呼吸は再び『声の主』の唇によって塞がれた。

夜の街を走る一台の車。7代目と呼ばれた男は、車の中から数名の部下に連絡を取っていた。
「あーオレだ、そうだ。例の件なあ——」

7代目と呼ばれた男は強い口調で簡潔に電話で指示を伝えた。

「——ということだ。これは命令だ。あー、あー、そうだ。絶対に手を出すなよ」

最後に電話をした先だけ、はっきりと口調が変わってた。

「あ、榊原です。どうも、お世話になります。はい。はい。実は例の事故の件なんですが——」

榊原はそれまでは『オレだ』で済ませていたが、最後の電話の相手は自ら名乗らなければならない相手のようだ。

「——えー、こちらとしては表だって動けませんので、はい。はい。すみません。お手間取らせます」

電話を終えると榊原はほくそえみながらつぶやいた。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか……それとも、もっとおっかねえかなあ」

一本の傘をめぐる様々な人間が動き出す。だが、それはすべて闇の中の出来事であった。

動き出した後藤刑事

「おーい、鳴門！」

翌朝、後藤は鳴門刑事を廊下の隅に手招きした。この場所で声をかけられるときは、厄介ごとと決まっていたので、鳴門刑事は首をすくめながら後藤の近くに寄った。後藤が鳴門刑事の肩に手をかけながら話す。後藤は大事な話をするときには相手の方に手を置いて話す癖があった。

「いーか、こっからはオレの単独だ。お前は例の傷害事件のほうに回ってくれ」

鳴門刑事は怪訝そうな顔ですかさず反論した。

「先輩、それはないっすよ。このヤマ、なんか出たんですか？」

後藤は声を押し殺しながら耳元で囁く。

「この件、どうやら上が絡んでるらしい。今、岡島さんにサグリ入れてもらってる。事情がわかるまで、表の動きはなしだ」

「最近そういうの、多くないですか、この前のひき逃げ事件のときも……」

後藤は鳴門刑事の肩をゆすり、強引に言葉を切った。

「あー、オレだって面白くねーと思ってるよ。これは散々上とやりあったオレの経験からくる忠告、いや命令だ。このヤマはやばい。若いヤツは足手まといだって言ってんだよ。それに——」

後藤は鳴門刑事の両肩に手を当て、ポン、ポンと二回両手で叩いた。

「背中を任せられるのは、署じゃ、お前と岡島さんだけなんだ。あとは誰も信じられねー。お前はオレが動いている間、署内の動きから目を離すな」

鳴門刑事は首を横に振りながらも、抵抗は無駄だと悟ったことを両手を挙げることで合図した。

「むしろ、そっちのほうがやばそうな仕事ですね。まったく、ボクもとんだ上司を持ったものです。命がいくつあっても——」

鳴門刑事はその後の言葉を詰まらせた。

「あー、すみません。変なこといっちゃって……」

「フン、構わねーよ。昔のことだ。心配するな。気にしちゃいないし、そんなこと一々気にしてたらこんな商売続かねーよ」

後藤はまわりに聞こえるような大きな声で笑い飛ばした。そのことによって、鳴門刑事は救われたと同時に、この話はこれで終わりだと言うことを悟った。

「じゃーなあ、あとはよろしく頼むぞ！」

後藤は傷害事件の聞き込みに戻ると言って署を出た。鳴門刑事は後藤を見送るとすぐに携帯を取り出した。

「あー、もしも、鳴門です。はい、えー、動き出しました。はい、はい。わかりました。動きがありましたらまた、ご連絡します」

鳴門刑事は電話を切ると、後藤の後を気づかれないように尾行し始めた。

その頃、岡島警部補は署長室を訪れていた。

「署長、実は妙なことが起きてまして、まあ、交通課としては、単なる事故として処理をしている件なんです——」

「どうした。何か問題でもあるのかね」

「いえー、問題というよりかはどちらかというと、いいことと言っては、まあそれも不謹慎なことなんです」

「回りくどいな。この前の加藤三治のことか」

「えー、加藤に限らず四課でマークしてた重要参考人がこのところ立て続けに事故で死亡しております」

「で、なにか不審な点でもあるのか？」

「いえ、わたしも隅々まで洗いましたが、事故を否定するような物証や証言はなにも……」

署長は岡島警部補との話を一刻も早く打ち切りたいというあからさまな態度——威圧的な口調で叱責した。

「岡島君！何もないということは何もなかったということだ。しょうじゃないかね」

岡島警部補は、態度をただし、規律正しく答えた。

「はい、何もありませんでしたので、何もなかった。おっしゃるとおりです。失礼しました」

署長は一瞬周りを伺い、岡島警部補を手招きした。

「後藤を抑えろ。ワシでもかばえることとそうでないことがある。この件はこれ以上のことは何も起きん。何もなく、何も起きないことに大事な部下を失うわけにはいかん。わかるな。これ以上言わせるなよ」

署長は席を立ち上がり、岡島警部補の肩に手をかけた。

「貧乏くじを引くのは、ワシらだけで十分だ。後藤はキレるが、後先を考えない。いつも誰かが背中を守ってくれると思っていたら大間違いだ」

岡島警部補は厳しい目で署長を見つめたが、やがて穏やかな表情になった。

「わかりました。これ以上なにも起きないということでしたら、これ以上深入りしないよう私から言い聞かせます」

署長と岡島の間には上司と部下という空気から、戦友という空気に変化していた。

「フン！止めさせるとは、流石のお前でもいいきれんか」

岡島は頭をかきながら照れくさそうにいった。

「あいつは、悪いところばかりワシに似てしまって……」

「うんんん！」

署長の咳払いで二人の関係はもとの上司と部下に戻った。

「これは命令だ。後藤を抑えろ。いいな」

「はい」

署長室を出た岡島警部補は大きくため息をついた。

「——と、おっしゃいますが、簡単には後藤を止められるとも思えんがなあ」

岡島警部補は携帯を取り出し、廊下の隅で電話をかけた。

「あー、ワシだ。そっちはどうだ……」

接触

後藤は事故があった現場近くの駅の改札に張り付き、『傘の男』の姿を探したが空振りに終わった。11時を過ぎてから加藤が最後に立ち寄ったラーメン店に立ち寄り、『傘の男』の写真を見せて店員の話聞いたが、あまり収穫がなかった。それほど顔が鮮明に映っている写真ではない。

それから後藤は事故があった通りを見ることが出来るコーヒーショップに立ち寄り、昼時の人の流れをじっと見つめた。執念である。後藤は『傘の男』のビデオを何べんも繰り返して見ていた。静止画ではわからない身のこなしやしぐさに合致する人影をずっと探し続けた。

2時を回った頃、一人の男の姿が後藤の目に留まった。後藤はその人影を追ってコーヒーショップを出ると、注意深くその男のあとをつけた。その男は第二の事故のときに防犯カメラで撮られた書店に立ち寄り、なにやら雑誌を購入していた。男は書店を出ると、そこから300メートルほど離れた、駅の反対側のビルに姿を消した。エレベータで降りた階を確認し、エレベーターホールの案内板で会社名を特定した。

「笠井情報システム……コンピュータ関連ってどこか」

「なんじゃい、もう、ここまで嗅ぎ付けたんかい？」

不意に後藤の背中越しに声がした。

「誰だ？」

後藤の後ろには一人の男が立っていた。帽子—黒のハンチング、黒のチョーカー、茶色の皮のジャケット、白のシャツ、薄茶色のスラックス、白の革靴。身長160センチ、中肉中背、肌はやや日焼けし健康的、眉毛に少し白髪が混じっている50歳~60歳くらい……後藤は瞬時にその男の特徴を捉えた。

「いきなり誰だとはごあいさつだな、お主」

その男はニコリと笑いながら帽子を取って挨拶をした。

「あー、すまない。だがいきなり後ろから声をかけられたら、誰だって驚くだろう？」

そうではない。声をかけられて驚いたのではなく、すぐ後ろまで近づいているにも関わらず気配を感じ取れなかった事が驚いた—いや、恐ろしかったのだ。

「まあ、なんだ、ここで目立つのはお互いに望むところではあるまい。少し歩かんか？」

後藤は警戒レベルを落とし、男の提案を受け入れることにした。たしかにここで目立つのは得策ではない。

「真壁直行、それがあの男の名前じゃ」

5メートルも歩かないうちに男は、チョーカーの男は思いがけないことを口にした。

「なんで、そんなことを……いや、あんたいったい？」

男の歩くスピードは後藤のそれよりも早く、後藤は小走りにチョーカーの男の後を追う格好になっていた。これは後藤にとって不本意だった。出会った瞬間からまるでペースを握られている——そういうあせりと不安があった。

「ちょっとあんた——」

「これ！初対面のそれも年上に向かってあんたとはなんじゃい！この小僧が！」

とてもペースを取り戻せるような相手ではない。後藤は抵抗を諦めた。

後藤が突き止めたビルから歩いて5分ほどのところに小さな公園があった。ベンチには時間を潰してスポーツ新聞を読んでいるサラリーマン、砂場には子供たちとその母親らしき4～5人の若い女性が楽しげに旦那の悪口を言い合っていた。

「さて、何から話そうかのおー、いや、お主、何が聞きたい？」

チョーカーの男は空いているベンチに腰掛け後藤を見上げながら言った。ひょうひょうとにこやかに、まるですべて見透かしたように。

気に入らねーな。やりにくいなあどーも。

後藤は考えた。多分聞く順番を間違わなければかなり多くの情報を聞けるかもしれない。そして話の結びも想像がついた。

口止めが目的か？しかしそれだけなのか？

後藤は勝負に出た。

「何でも知ってるって口ぶりだなあ。オレが誰なのか？知っているのか？」

ニヤリとしながらチョーカーの男は応えた。

「何でもは知らないさあ、知ってることだけじゃよ。後藤刑事」

後藤とチョーカーの男——下駄の男はこうして出会った。

「あの～真壁さん、どうか、しましたか？」

真壁直行、江戸川区内で大手金融機関の基幹システムの開発の一部を担当している古参のプログラマー。もちろんもともと古参だったわけではない。大学の経済学部を卒業し、今の会社に就職したのだが、当時はまだITなどという言葉はなかったし、コンピュータはまだまだ一般的なものではなかった。一部の学生が人気のゲームソフトをプレイする為に高額なパソコンを手に入れるのに食費を削り仕送りを浮かしたり、アルバイトを二つ掛け持ちしたりしていた。

「なんだか少し顔色が悪いですよ」

真壁は5人ほどの部下を持ち、彼等の作業進行を管理し、自らもプログラムを担当していた。同期に入社したものは、その後他の企業にヘッドハンティングされたもの、リストラされたもの、自分で小さな会社を立ち上げたもの、様々であるが、今では真壁一人になってしまった。

「もし、具合が悪いようでしたら、今日は大丈夫ですよ。スケジュールもだいぶ追いついてますし、ボクらでなんとかかなりますから」

この仕事がしたかったかといえば、そうではないかもしれない。しかし、ゲームソフトの開発などというものはその当時はまだまだ未成熟な業界だったし、趣味と仕事を一緒にするのは、どうにも真壁のまじめさが許さなかった。

「真壁さんって、本当、まじめっていうか、きっちりしているっていうか、まあ、悪く言えば融通が利かないといえるけど、プログラマーはそのくらいがちょうどいいですね。特にこういうお堅い分野では」

会社の同僚の評判は総じて信頼できる上司、尊敬できるプログラマーであったが、それ以上ではなかった。ただ、真壁の映画評は、同僚の中でも非常に人気があった。真壁の映画に対する分析力、監督、脚本、俳優に関する造詣の深さはみんなに一目を置かれていた。

「あー、この前、真壁さんがダメだししていた例の映画、DVDで見ましたけど、いやー、真壁さんの言う通りですねー。事前に聞いていた分、期待値が低かったから良かったですよ。あれは失敗作ですよー。」

昼食は近くの定食屋やラーメン店、ランチ営業をしている居酒屋で2～3人で食べる。話題は大体が映画の話か、或いは上司の悪口だった。

「部長は今、営業に出ていますから、僕らから説明しておきますよ。真壁さん、夏休みも結局とらなかつたでしょう。なんかあったときに連絡取れるようにして置いてください。えーと、あれ？真壁さんの携帯、知ってましたっけ？」

真壁はプライベートで同僚と連絡を取ることはほとんどない。真壁が会社にいる限り、どんなトラブルも大よそは解決するし、真壁のパートでトラブルになることはほとんどなかったし、あ

ったとしても解決にそれほど多くの時間を要することはなかった。真壁の仕事はほぼ完璧と
ていい。

「すまない。今日は引き上げさせてもらうことにするよ。そうだな。最近少し眠りが浅くてね。
少し寝不足なのかもしれない。悪いな。じゃあ、失礼するよ」

真壁は同僚の勧めで会社を早退することにした。同僚たちは真壁が退社すると噂話を始めた。

「真壁さん、最近やばいんじゃないのか？」

「あー、なんか最近、ブツブツ独り言増えたよなあ」

「顔色も悪いし、なんかさあ、オカルトな感じだよな」

「おいおい、あの真壁さんに対抗できる幽霊なんてこの世に存在しないと思うぜ」

「まったくだ。幽霊に向かっていろいろ理屈並べて、最終的には成仏させようだよな」

「まあ、オレだったら間違っても真壁さんに取り付いたりしないぞ」

「どうかな、意外と居心地良かったりして」

「えー、なんでさ？」

「そりゃー、世の中には真壁さんみたいにこだわりがあるからこそ、成仏できない幽霊だってい
るだろう。そんな幽霊はきっと、真壁さんと波長があって……」

「やべー、オレ、今すごいもの想像しちゃった。こえー」

「うわあー、ある意味地獄だなあ」

真壁は会社を出たものの、こんな時間に家に帰っても、果たして状況が良くなるとは思え
ない……むしろ悪くなるのが明白だった。

「困ったなあ。さて、どうしたものか……」

真壁は当てもなく街を歩き始めた。そこにはいつもと変わらない街の風景があり、いつもと変
わらない、そこに溶け込むことができない真壁があった。

「この街も、住みにくくなった」

真壁は青く澄み切ったわざとらしい青空に向かってつぶやいた。

「また、雨、降らないかなあー、そうすれば……」

そうすれば、また少しだけ街がきれいになるかもしれない。この白々しい青空にどんよりとし
た雨雲が現れ、雨が街の汚れを洗い流してくれる。

「しかし、そうすると、また一人客が増えるなあ」

もはや真壁は、何を後悔すべきか、わからなくなっていた。

チョーカーの男

意外——とは思わなかった。後藤はチョーカーの男から声をかけられた時点で自分の素性は相手にわかっていると想像していた。

「まいったなあ。やりにくいったらしょうがない」

後藤は頭を書きながら、渋い顔をしながらチョーカーの男を見つめた。こうもあっさりと向こうが手の内を明かしてくる——それはつまり、相手の余裕から来るものであり、おそらくは後藤自身が掴んでいない情報を——それもかなり確信に近い部分を、このチョーカーの男が持っている。しかも、後藤が警察組織、それもどういう素性の捜査をしているのかも知っていて、尚且つ...尚且つ実力で後藤を押さえつけるだけの切り札を持っている可能性を示している。

「じゃあ、まず、これは大前提なんだが、あんた敵か？味方か？」

その言葉を聞いたチョーカーの男は、目を丸くし、一瞬怒ったのかと思いきや、次の瞬間大きな声を上げて笑い出した。

「わー、はっ、はっ、はっ、ほー、お主もなかなかのもんじゃのおー、わー、はっ、はっ、はっ」

その笑い声はイヤミのない豪快なものだった。後藤は確信した——敵ではなさそうだ。

「いいじゃろう。うん、そうじゃなあ、今はまだ敵でもなければ、味方でもない。お主がこれから取る行動によってどちらにでもなる。そしてワシは味方になることを望んでおる。これは本当じゃよ」

今度は後藤が大笑いをした。

「いやいや、参りましたねどうも.....それって、言い方はともかく立派な恐喝みたいなもんなんですけどね」

チョーカーの男はひどく何かを納得したような表情で何度かうなづくと、やがて真剣な顔でもむろに語りだした。

「ワシらがこうして穏やかに会話をしている間にも、事態は刻々と悪いほうへ向かっておる。このままでは、あの男もそう長くは持つまい」

「それはあまり、穏やかな話じゃないですなあ。やはり被害者の身内の手が伸びていると？」

後藤もすっかり刑事の顔になっていた。

「それもある。が、それはワシの分野ではないんじゃ。そっちはむしろお主にいい感じにして欲しいと思っちょるのだがなあ」

チョーカーの男がめずらしく言葉を濁すような含みのある言い方をしたことに後藤は必ずしもこの男が全てをコントロールしているのではないことを見て取った。

「ワシのやらなければならんことは、まず、ワシしかできん分野であの男を救うこと、次にお前さんがそれを黙って見てくれるように頼むこと、そしてあの男の安全が社会的に確保されるように担保すること、この3つじゃ」

チョーカーの男は多分自分を信頼し、ある程度の手の内をカードを見せたのだと後藤は思った。しかし、この男にしかできない分野とはいったい何のことなのか？

「なるほど、話は大体わかりました。しかし、ワタシにも職務というものがあります。これは、まあ、この職務という奴は、一般の会社とは違って権限やら責務やら、いろいろとややこしいんです。黙ってみているといわれて、はい、そうですかでは、この職務は務まりません。なにより……」

「なによりお主が納得いかないことには……か？」

ここに来て、二人の呼吸は始めてとは思えないほどぴったり合っていた。

「まあ、そういうことになります。目の前で起きた事が、ワタシが黙って見てりられる部類のことならば、口出し、手出しはしません、しかし、そうでない時は——保証しかねますね」

チョーカーの男はニコニコしながら後藤をみながら言った。

「なーに、心配はいらん。ワシの分野はそれこそ専門中の専門じゃ。お主の手を煩わせるようなことはないわい」

後藤は腹を決めた。

「わかりました。あなたのおっしゃるとおりにしましょう。ただし、条件があります」

「なんじゃい？」

「あなたのその専門分野とやらがどんなものなのか、同行させてください。手は出しません。約束します」

チョーカーの男はまじまじと後藤の顔を覗き込むように見ると、また大きな声で笑い出した。

「まあ、それもよからろう。ただし、お主、このことは他言無用、まあ、報告書に書けるような分野の話ではないから、書こうと思ってもかけんだろうが、それにしてもお主もたいしたもんじやのおー」

「何がです？」

「ワシの名前や素性を一切聞こうとせん。なかなか結構な心がけじゃ」

「聞けば教えてもらえますか？」

「かあ、かっ、かっ、かっ 年寄りの扱いがうまいのおー」

チョーカーの男はベンチから立ち上がり、名を名乗った。

「ワシの名はのお 尾上弥太郎じゃ——お・が・み・や じゃ」

目を丸めて戸惑っている後藤を愉快そうに見つめているチョーカーの男——下駄の男は上機

嫌だった。

真壁という男

笠井駅近くのビルの出入り口を眺める二人の男。このビルには『笠井情報システム』という会社が入っている。二人はその会社に勤める真壁直行と言う男がビルから出てくるのを待っていた。一人は組織犯罪対策課——いわゆる『マル暴』の刑事、一人は自称『拝み屋』という謎の老人だ。

「その真壁という男は何をしでかしたんです？」

後藤は尾上弥太郎と名乗る老人から、自分がマークしている人物の名前を聞きだした。

「いやー、別に真壁はな、なにもしておらんぞ。むしろそう、お前さんたちの分野で言えば被害者じゃ」

後藤には一つ思い当たる節があった。

「傘ですか？」

尾上弥太郎と名乗る老人は目を細めてうなずいた。

「おー、おー、流石じゃのおー、そこまで突き止めていたとはたいしたモンじゃのおー」

「しかし、わかりませんなあ。傘が盗まれた。そして盗んだ人間が事故にあって死亡する。俺たちの分野じゃ立派な容疑者なんですけどねえ」

尾上弥太郎と名乗る老人は、目を閉じながら語り始めた。

「そうさのおー。お主たとえば雨が降っているときに自分の傘が盗まれたら、盗んだヤツのこと恨むか？」

「えー、まあ、そりゃー、困りますからね。畜生とは思うでしょうね」

「盗んだヤツなんか死んでしまえばいいのに……なんて思ったりはせんかのお？」

「いやー、流石にそこまでは、まあ、バチが当たれば位は思うかもしれませんが」

「じゃろう？しかし、最近ネットを見ててもすぐに死んでしまえばいいのにとか書き込むやからが多くてのおー」

「はあ……ネット、ですか？」

尾上弥太郎と名乗る老人は、おもむろに胸の内ポケットから何かを取り出した。携帯端末のようだった。男は人差し指で端末の画面を何度かタッチすると後藤にそれを差し出した。

「ほれ、こんな具合に」

後藤が受け取った携帯端末の画面には掲示板らしきサイトが表示されていたが、そこに書かれているのは、今話題になっているタレントに対する誹謗中傷の数々だった。

「ひどいなあ……いやー、しかし、これが何か？」

「その言葉に力があって、実際に相手を傷つける事ができたとして、それはお主らの分野かのおー？」

後藤は狐につままれたような顔をしながら老人の顔をまじまじと見た。信じられない。しかし

、この男の言うことには妙に説得力がある。

「つまり真壁という男は、そういう力を持っている……と？」

尾上弥太郎と名乗る老人は、初めて表情を曇らせた。

「まあ、そんなところじゃが、奴自身、最初からそんな力を持っていたわけではないし、奴は死んでしまえばいいのにと望んだわけではない」

尾上弥太郎と名乗る老人は、今までにない真剣な趣で語り始めた。

「もとはワシの戯れじゃ。誤算じゃったのは奴がとんでもなく拘りの強い人間じゃったこと。そして世の中がかくも乱れてしまったことかのお」

「拘り……ですか？」

「あー、そうじゃ。執着とっていい。大事なものを奪われたら取り返したい。それだけじゃ。何の罪もない。ただ少しばかり術が効き過ぎた。過剰に反応し、このような結果を生んだ。まあ、死んじまった奴らには申し訳ないが、運が悪かったということじゃが、まあ、それ以上に日ごろの行いが悪かった。そして盗んだ相手が悪かったということじゃ。しかし、このままではなあ、あの男の……真壁の命に関わる」

後藤には理解できなかった。しかしこの老人はどうやら自分自身の誤算のために一人の男の命を危険にさらしてしまい、それを助けようとしていることはなんとなく理解した。そしてそのこととは別に、真壁の命が危ないことは理解できた。後藤の分野、どんな方法にせよ、真壁が一連の事故に関係があるということが『あの連中』の知ることとなれば、黙って見ているはずがない。真壁の社会的な安全を担保するとは、すなわち秘密裏に事を運び、再発を防止すること、そして騒ぎを大きくしないことだろう。

それにしても、真壁はどうやって三人もの人間を死に至らしめたのだろうか？

しかしそれは、時間の問題だろう

この男についていればいずれそれはわかることだろうと後藤は腹を決めた。だがしかし、ここにも誤算があったのだった。

死角、失策、刺客

真壁を追う後藤と尾上弥太郎と名乗る男。そしてさらにその二人を物陰から見つめる男がいた。

「どうも僕にはこういう役は……」

鳴門刑事が後藤を尾行してから5時間が経過しようとしている。刑事の単独での捜査はご法度である。何かあったら責任問題は免れない。後藤はこれまでも単独捜査をたびたび行い、何度か上から注意を受けている。しかしそのたびに後藤は成果を上げ、辻褄を合わせるための処世術も心得ている。

「よき上司と物分りのいい部下……あれ？逆だっけな？」

鳴門刑事は間違っただけではなかった。後藤はその時々でその言葉を使い分けていた。だが、鳴門刑事にとってはどっちでもよかった。どんなに無茶な命令にも、後藤には常に正当な理由があった。最初のうち鳴門刑事も肝を冷やした。しかしすぐに、後藤の行動力、決断力、そしてなにより洞察力に敬服した。

「刑事って言うのは、法を守るのでもなく、国や秩序を守るのでもなく、自分の町を守る、まあ、保安官みたいなもんだと思ってた。笑うだろう？でも、こりゃ、俺が物心ついた頃の、いわば夢みたいなものさ、そんなものにお前をつき合わせて申し訳ないが、まあ、後任が決まるまでの間、よろしく頼むわ」

警察も組織である以上、いろんな理屈で動かなければならないということはよくわかっている。でも、中にはこういう人もいていいのではないか？決して後藤のようになりたいとは思わない鳴門刑事であったが、少なくとも敵にするべき人ではないと、最初はそんな風に考えていた。

「あの人ももう少し組織とか、部下の出世とか考えてくれればいいんだけどなあ」

鳴門刑事は後藤のもつ人間くさい魅力に引かれている自分を戒めるような独り言が多くなっていることを自覚していた。

「それにしても、いったいあれは誰なんだ？」

鳴門刑事は迷っていた。岡島警部補からの命令は、後藤を尾行し、もしトラブルになるようなら後藤を止めろという命令、もっと言えばそうなる前に後藤の動きを抑えろというものだった。

「この件から手を引けと、正面から行ったところで言うことを聞くようならわざわざ誰かに頼んだりせんよ。ワシも後藤の力になってやりたいが、切のいいところでお前さんがやばくなたから、呼び戻しに着たとか何とかいって、うまいこと事態を收拾してくれ。頼むぞ」

「よき上司と、物分りのいい……なんだっけ？」

鳴門刑事は岡島警部補に現在の状況、怪しげな老人と後藤がなにやら行動を共にしていると、報告すべきかどうか、決めかねていた。どうせなかったことにするなら、全部なかったことでいいのではないか？

「どうやら自分もだいぶ後藤さんのやり方がわかってきたというか、染まってきたというか……」

もう少し何か動きがあるまで待とう。順当な選択であったがしかし、それは、鳴門刑事の誤算であり、鳴門刑事に後藤を抑えられると踏んだ岡島警部補の失策であったかもしれない。

「どうも気にいらねえなあ……」

鳴門刑事のほかにもう一人、後藤を見つめる男がいた。そしてその男は、鳴門刑事の存在にも気づいていた。おそらくこの場で、一番状況を把握している男である。

「後藤と一緒にいるジジイ、あれが噂の拝み屋か」

男は正確な情報の元に動き、その事実を確認し、そして様子を窺っていた。或いはチャンスを待っていた。

「こう人ごみの中にいられちゃあなあ。やはり夜まで待つしかないだろうな……もっとも、そこまで事態が膠着しているとも思えないし、あっちこっちから情報が漏れてやがる。先に動くのはヤベエ仕事だな」

街に溶け込み、人ごみに溶け込む、それは暗く、冷たい視線。刺客の視線である。

「おー、榊原か。あー、手配した。心配するな。あー、腕は確かだ」

笠井町の繁華街を牛耳る小さな暴力団の7代目、榊原嘉昭。榊原はまだ20代のうちに7代目を継いだ。そのときはそれほど大きなシマを任されていたわけではないが、様々な抗争、計略、戦略を持って今では笠井町に大きな影響力を持つまでになった。

笠井町はもともとは工業地帯で、それほどの人口のある街ではなかったが再開発が進み、笠井駅の周辺は大いに賑わい、人口もこの10年はずっと右肩上がりである。中国、韓国、インド、フィリピンなど、アジア系の外国人が多く住むのも特徴である。特に中国人には犯罪に関わるものも多く、中国系マフィアに関わる人物が笠井町には多く住んでいた。

暗闘——榊原は中国系の組織と手を組み自分のシマを拡大して行った。飛ぶ鳥を落とす勢いの榊原だったが、もともと弱小の組織だけに有力な後ろ盾がなかった。中国系の組織とはあくまでビジネスであり、いつ後ろから刺されるかもしれない。そこで榊原は先代の遺言に従い、ある人物を頼ることにした。

「まったく、先代がこんなヤバイ方と繋がっていたなんてなあ。まあ、力がなくてはいこまるが、あり過ぎるのも考え物だ」

榊原が頼った人物とは、日本の中枢に顔が利き、しかもその存在は実に曖昧である。どういうわけで弱小组織の先代がこの人物と繋がっていたのかはわからない。しかし、その人物自ら、先代を死に至らしめたのは自分だといわれたときには、流石に困惑した。

「先代はな、情に厚い男じゃった。いい男よ。だがな、それだけではな……それだけでは生き残れないのがこの世界よ。わかるな」

榊原は初めて恐怖を感じた。この老人の言葉はまるで頭の中に直接話しかけてくるような、まるで全てを見通しているような感覚。ダメだ。この老人には勝てない。

「その先代がお前のことを高く評価しておった。器は先代より上、実力は十分にあるが、有力な後ろ盾も目付け役もない。どうか後のことをお願いしたいとな……よかったな7代目、いい先代を持って。感謝するんだな。そして決してワシの意に沿わないことをするんじゃないぞ。親も子も手をかけたとあってはなあ……ワシも流石に目覚めが悪い」

以来5年、老人から特に指示や命令を受けたこともなければ、老人の力を頼ったことはなかった。しかし榊原は感じていた。いまこのバランスを保っているのはこの老人の目が光っているからであり、笠井町の中の勢力争いはほとんどの場合、平和的に解決している。ところが今年になってから老人からいくつかの指示が出るようになった。その一つが今回の件である。

「どうも何かが動き出しているようだが、こちらもただ利用されるって訳にもいかねえしなあ。

見るなといわれたものを見るつもりはないが、見てはいけないものを他人の口から聞くなって言うのは、聞こえちまうものはしょうがねえもんなあ」

榊原は『後藤が3人の部下の不審な事故に関する容疑者をマークしているらしい。その男の持っている情報はヤバイかも知れない』と別の組織の幹部に情報の横流しをしたのである。榊原はどのような結果が出ようとも構わなかった。

「加藤の野郎、オレに隠れてオイタした報いだ。白鷺組の絡んで数字ごまかしやがて……ここは白鷺組に踊ってもらわなきゃなあ、それだけの出演料は加藤から受け取ってるんだろうからなあ」

三人目の犠牲者、加藤三治は榊原の目を盗んで白鷺組と共謀し、情報や決して小さくない金額の取引を横流しして小遣いを稼いでいたのだった。榊原はそれに気付いていたが、加藤を泳がせていた——いつか利用する機会がある。つまり加藤の死は榊原にとっても計算外であり、榊原を慌てさせた。しかし事の真相が榊原の領分でないとわかれば、あとは投資した分をいかに回収するかであった。

「白鷺組の連中、慌てて容疑者を消すか……あの方の意に背けば、ただでは済まないだろうに、かわいそうなことだ」

表向きにぎやかで華やいでいる笠井町の裏では、常に複数の策謀がめぐらされている。それに気付くものは少ない。

こんなこともあろうかと

「どうもいかなあ」

尾上弥太郎と名乗る老人はボソッとつぶやいた。

「なにか、気になることでも？」

後藤はチョーカーの男の顔をしげしげと見つめていた。

「やな感じがするぞい」

下駄の男、拝みやは視線を感じていた。それもねっとりとへばりつくような嫌な感覚だった。

「どうかのお、今日はこの辺で引き上げんか？」

突然の申し出に後藤は一瞬戸惑ったがしかし、尾上弥太郎と名乗る男のどこかイタズラを企んでいるような顔を見るとある程度の状況を察した。

「すみません。実は一人……俺の部下がずっとこちらを見張っています」

「おー、主も気付いておったか……じゃがなあ、まだ他にもおるぞい」

男はチョーカーを治す振りをしながら、目で後藤に方角を合図した。後藤はタバコに火をつける不利をしながら、その方角を確かめる。人影が一瞬不自然な動きで人ごみに消えていったように見えた。どうやらもう一人、客が居るようだ。

「どうでしょう？そういうことなら、また今度ということでもいいのですが……あまり悠長なことを言ってもらえない状況なんでしょう？」

「う～ん、そうじゃなあ」

尾上弥太郎と名乗る老人はiPhoneを取り出し、後藤に画面を見せた。そこには先ほど人影に消えていった男の姿が映っていた。

「いつの間に撮ったんですか？しかし、これじゃあ、よくわから……」

後藤はこの手の端末にはからっきし弱かった。尾上の指先が画面の上で動くたびに、男の画像は拡大されていく。

「おー、こりゃ白鷺組によく出入りしている男です。なるほど、こりゃあたまげた」

「このジャケットにはちょっとした仕掛けがしてあってのお、気になったときにちょちょこつとやるとこんな具合に写真が撮れるんじゃ」

男はなんとも楽しそうに笑いながら端末をいじっていた。

「ちゃんと装備してきてよかったぞい。背中が寒くちゃ仕事にならんからのお」

予めこういう事態を予想していた——ということなのだろうか？

「フン！主もワシも、身内からはあまり信用されていないようじゃな」

後藤は考えた。多分鳴門刑事の独断で動いたのではないだろう。大方岡島警部補の差し金か、

或いは署長あたりがかぎつけたかだろう。しかしこの老人はどうなのか？真壁という男は直接関係があるが、筋の悪い連中との関わりもあるということなのか

「真壁のことはワシと主しか知らん。が、それが他の連中に知られると守れるものも守れなくなる」

「真壁との接触は、誰にもわからない場所でやらなければならない——ということですね」
「うむう、ここはどうかのお、ワシに任せてはくれんかのお。主は写真の男の動きを止めてくれぬか。ワシが真壁を抑えたら、主に連絡をする。ワシも主が来るまでは真壁には手を出さない。どうかのお？」

「どうやらあなたの言うとおりにするしかないようです。わかりました。どうやって

連絡をとりあいますか？」

「逮捕するとか言うなよ。これを使って連絡をする」

そういうと尾上弥太郎と名乗る老人はジャケットのポケットから1台の携帯端末を取り出した。

「ワシとのホットラインじゃ。互いに通話記録なんぞ残したくないじゃろう？」

後藤は首を振りながら両手を上げた。

「まったく、あんたいったいなにものなんですか？」

チョーカーの男は笑いながら言った。

「ワシか？ワシは真田五郎じゃよ」

「もしもし、俺だ。鳴門、今どこだ？」

黒のハンチングを被り、黒のチョーカー、茶色の皮のジャケットの年齢50歳から60歳くらいの男と別れた後藤から鳴門刑事の携帯に電話がかかった。

「あ〜、今ですか、今ですね、えーと、ちょっと外に……」

「あー、それはちょうどよかった。急用だ！今すぐ笠井駅前に来い。3分以内にだ」

「さ、3分ですか、行くらなんでもちょっとそれは……」

「事態は急を要する。今すぐだ。手段は問わないし、なんで早く来れたかも問わん。早く出て来い！」

そういうと後藤は携帯を切った。

「参ったなあ。どうも。まったく、いつから気づかれてたんだか」

鳴門刑事は観念して物陰から姿を現した。一応息を切らしながら。

「仰せに従い物理法則を無視して鳴門刑事ただいま到着いたしました」

「おー、なかなか早いじゃないか、一体全体どうやって……おっと、それは聞かない約束だったかな。仕方ない。今回は勘弁してやろう。だが鳴門刑事！」

「はい！」

「もう少しましな尾行の仕方できんのか？」

「あー、どうも、すみませんです。修練します」

「この男、誰だかわかるか？」

後藤は尾上弥太郎と名乗る男から受け取った携帯を鳴門刑事に見せた。そこには先ほど尾上が撮影した後藤たちを尾行していた鳴門刑事以外の男の姿が映し出されていた。

「あー、この男……確か何度か捜査線上に上がった男ですね。えーと確か白鷺組みに出入りしている——」

「OKだ。そこまでわかれば十分だ」

「後藤さん、こいつがどうかしたんですか？それにこの携帯はいったい……」

「余計な詮索はするな……と言える立場でもないか。それじゃお前の協力を上げそうにないな」

鳴門刑事は思った。どうせ知ろうと知るまいと、やらせることは変わらないくせに、と。

「鳴門、いいか。どうやらこのヤマは俺たちの出る幕はないらしい。およそ上のほうも、どこぞやからそんな横槍、いや、槍どころじゃないかもしれないが、状況としては手を引かざるを得ないといったところだろう」

鳴門刑事は情けなく思った。自分がどんなに奔走しても後藤の足元に及ばない。自分は果たし

てこの人の役に立てるのだろうか？いや、足手まといになってはいないだろうか？

「しかし、『ハイ、そうですか』というわけにも行かないのが、まあ、『正義の味方』じゃない『ダークヒーロー』のつらいところだ」

なるほど、後藤がバットマンで自分はロビンってわけか。そう思うと気が楽になるくらいに後藤の存在はなんと刑事にとって大きなものとなっていた。

「そこでこの男だ。こいつは、まあ、俺たちの専門分野だ。ヤツは俺をマークしている。その線をたどれば、きっと俺たちの分野のヤマに当たる。そのリアクションによって、このヤマの真の姿が見えてくるに違いない。わかるか？」

鳴門刑事は戸惑った。

「いや、ちょっと待ってください。まだ、パズルのピースは全部そろっていいないですよ」

「言いたいことはわかる。だが、アレはなんだ。ジョーカーみたいなものだ」

「は？」

「ワイルドカードさ。俺が接触していた男は、このヤマにかかわってはいるが、俺にしろ、あの男にしろ、それからこの写真の男にしてもヤマの本筋じゃない。俺以外は誰かの指示や命令で動いている。いや、俺ですら最初は岡島さんの話がなきゃ、動いちゃいけないわけだしな」

後藤は頭をかきながら無理な頼みごとをするときのような顔をしながら言った。

「つまり……俺が降りればこのヤマは今後何も起きない。少なくとも俺たちの目の届く範囲では」

じゃあ手を引きましようと言いかけて、鳴門刑事は首を振った。

「つまりこちらのテリトリーにおびき寄せるために、なにか『しでかす』わけですか」

「そういうことだ。こちらから白鷺組に出向く。そこでのリアクションでやつらがどこまでこのヤマにかかわっているのかがわかる。そして、それによって後ろで糸を引いているやつがどう出るか。裏返って見えなかったパズルのピースにどんな絵が描かれているのか、わかるかもしれない」

確かに本筋から遠ければたいしたリアクションはないだろうし、そうでなければこちらにわかるような派手なリアクションがあるかもしれない。そこを突破口にすれば、事態を闇に葬ることもできないだろう。しかし、最悪そのリアクションが予想を超えるようなものであれば命の保障はないだろう。

「あまり無茶はいけませんよ。こうなったからには単独行動は厳禁です。それだけ約束してくれば、後は指示通り動きますから」

無駄だとは思いながら、それでも鳴門刑事は自分の果たすべき役割をこなすしかなかった。岡島警部補もこうなることは織り込み済みだったのだろうと、そしてそれは素直に喜ぶべきことにしておこうと思うのであった。

帰り道

真壁は混沌の中にいた。真壁が直面している問題もそうであるが、真壁のあずかり知らないところでさらに事態は混沌を極めていた。

「部屋に帰っても落ち着かないし、かといって他に行くあても思いつかない。考えることが面倒だ。面倒というのは違うな。多分イヤなだけだな」

真壁は冷静に自分の置かれている状況を分析していた。しかし分析すればするほどに、真壁は無数の不確定要素の中でループするしかなかった。

「解決できないエラーは無視するしかない。それによって何かが止まったり誤動作をするわけじゃない。不測のエラーがあるということがわかっているだけ、まだいい。大丈夫。まだ、容量をオーバーしているわけじゃない」

真壁は冷徹に、非情に、そして効率的に問題解決の結論を導き出そうとしていた。

「用は、無視をすればいい。解決できないエラーは無視をすればプログラムは流れる。なに、たいしたことではない。確率上から言えば存在を無視してかまわないエラーだ」

真壁は特に信心深いわけではなかったが、かといってそういったものの存在をすべて否定するほど関心もなかった。あったとしても、自分の生活に支障がない限り無視することは可能だ。真壁自信、人生においていくつかのエラーを無視してきた。自分ひとりが生きていくうえではそれはまったく問題がなかった。

「真壁さん、悪い人じゃないんだけど、どうも付き合いづらいというか、どこか人間離れしているというか、それこそ、アレはmakabeと言う名のプログラムじゃないかと思うくらい人間らしい『いい加減さ』がないよね」

同僚たちは真壁の仕事の能力は高く評価していたし、普段のコミュニケーションで不快感を覚えるようなことはなかった。だがしかし、真壁の人間関係や世間とのかかわり方を見ているとあまりにも割りきりが早くそしてはっきりとしていて、誰もが仕事の面では真壁のようになりたいと一度は考えはするものの、しかし、やはり、真壁にはなれない、なりたくはないと思うのであった。

真壁は会社のすぐ近くに住んでいた。普通に歩いたら10分もかからない。しかし真壁はやはり、最短の道を選んで会社に通う。途中100円駐車場の敷地内を対角線上に横切ること、僅かな距離をショートカットできる。しかし帰り道はこのルートを通らない。必ず寄り道をする。銀行、書店、コンビニ、飲食店、スーパー、ドラッグストア。レンタルショップ——どこでもよかった。それは仕事からプライベートへの気持ちの切り替えのスイッチのようなものだった。

「時間ができちゃったな。何かDVDでも借りて帰るか」

同僚からは顔色が悪いと言われているが、真壁自信、それほど体調の悪さを感じてはいなかった。ただ少し、疲れているだけ、ただ少し睡眠が浅いだけ。

「あんなものと一緒じゃ、家にいてもくつろげるはずはないのだが……」

真壁自信、自分が殺した——いや、彼らは自ら破滅の道を選んだのだ——3人の男の亡霊らしきものとの生活は異常であり、決してろくなことにはならないと考えていた。だが同時に、だからといってどうすることもできず、また、逃げ出すこともイヤだった。

レンタルショップへの道すがら、真壁はあの夜のことを思い出していた。あの夜——真壁の目の前で起きた光景。午後から振り出した雨の中、レンタルショップで一本の傘が盗まれた。それを目撃した真壁は、その傘の持ち主と共に、盗まれた傘の後を追ひ、そして真壁は見た。社会のルールを犯した人間の受けた罰。傘を盗んだ若い男は、そのことによって夜の雨の中、自動車にはねられ足を怪我したのだ。傘は無事に傘の持ち主——下駄の男の元に戻った。そしてその男は真壁に礼だといって真壁の傘になにやら術のようなものを施した。

「あれ以来傘をなくすことはなくなった。感謝している。そして、この街のゴミのような人間を掃除してくれた。本当にありがたいと、今は思っている」

真壁の傘は、下駄の男の施した術によって特殊な能力を帯びていた。真壁が傘を忘れそうになると、誰かがそれを知らせてくれた。まじないごとを信じるつもりはなかったが、それを疑うことすら必要を感じなかった。便利であれば、それはそれでいい。しかし、数日後、真壁をこの傘の本当の恐ろしさに気づく。

「人は多くても狭い街だ。同じ人間が傘を盗む場面を2度目撃することもあって不思議はない。その確率が高いか低いか、それはつまりあの若者の人間としての価値が高いか低いかということと等しい」

不幸なことに——もちろんその若者にとってではない、真壁にとってだ——真壁は下駄の男の傘を盗んだ若者が、もう一度傘を盗むとところ——つまり真壁の不思議な能力を帯びた傘が盗まれるところを見ることとなる。その若者は、傘を盗んで数分後に車にはねられこの世を去った。

「ワタシのせいなのか？しかしワタシの何が悪いというのだ。ワタシはただ、傘を持って店に入っただけなのだ。あの若者もワタシの傘でなく、他の人間の傘を盗んでいけば、いや、そもそも傘など盗まなければよかったのだ。あのような輩がいるから世の中おかしくなる。傘を盗まれた人間の中には、さらに他の人間の傘を盗むかもしれない。そうやって社会は乱れていくのだ。傘ひとつのことが、場合によっては命の奪い合いになることもあるかもしれない。だったら……だったらそんな輩は……」

いなくなればいいのに

氏ねばいいのに

死ねばいいのに

真壁の頭の中でコンピュータのモニターに映し出される誹謗中傷の言葉の羅列

「世の中が乱れている。それはそれでいい。だが、頼むからワタシを巻き込まないでくれ、巻き込まないでいてくれたら、ワタシはずっと無視し続けるのに……でも、あいつら、まったく、まったく不愉快だ」

真壁がぶつぶつとつぶやきながら通り過ぎていく。すれ違いざまにまるで呪詛のように「シネバイイノニ、シネバイイノニ、イナクナレバイイノニ」と聞こえてくる。だが、真壁を振り向くものはいない。なぜならそんな声は、この街の雑踏の中にすっかりと飲み込まれてしまうからだ。

らしくあること

真壁は傘の男と出会ったレンタルショップへと足を運んだ。そこはチェーン展開している大手レンタルショップではなく、この笠井地域で数店舗展開している個人経営のレンタルショップだ。個人経営ではあるが店は広く、物量はチェーン店に引けを取らない。また、古くから営業していることもあり、一部VHSのビデオテープや廃盤になった音楽CDなどもそろっている。

延滞はしない

真壁はその性格にふさわしく、この店に10年近く通いつめているが一度も延滞をしたことがない。真壁自身はそれを少しも特別なこととは思っていないが、店員によっては気分を害することがある。

「延長はございませんね」

「当たり前だ！」と心の中でつぶやく、時には叫ぶ。よくわかった店員であれば、チェックはするものの「お待たせしました」の一言で終わる。真壁からすれば延長をしていると疑われること自体が心外であり、延滞して返すなど、ありえないことだと思っていた。

「24時間営業している店に、期限内に返すことができないなど、どうしてそんなことになるのか？第一、そんなことをしたら、気分が悪いじゃないか」

真壁は決してまじめな人間ではない。ルールを守らないことが気持ちが悪いのだ。そこに善も悪もない。整っていないことが嫌いなのである。時々巻数の並びがバラバラになっている棚をみると直さずにはいられない。使ったものを元の場所に返す。

『真壁君はえらいはね。いつもきちんとしてるわ』

そうやって真壁を褒めてくれる担任の女性教師が一番嫌いだった。当たり前のことを当たり前に行ってほめられるなど、迷惑で仕方がなかった。整理整頓係など、もってのほかだ。整理整頓するのが得意なわけでも、好きなわけでもない。そうでないことが嫌いなだけなのだ。

社会人になりたての頃、同窓会に呼ばれて、断る理由もなかったので出席したことがある。

「へえ、そうか、真壁はプログラマーになったのか、らしいといえらしいな。俺なんかさ、コンピュータとかぜんぜんわかんないよ」

言っている意味がわからなかった。なんで『らしい』のか、なんでコンピュータがわからないのか。

「僕からしてみれば、人間のほうがぜんぜんわかんないよ」

そう言い掛けたとき、話題は別の話になってしまった。結局この日、真壁は釈然としない気持ちのまま、同窓会の一次会で帰ることにした。その行動も彼らにとっては『らしいといえららしい』ことなのか、真壁にはわからなかった。

「さて、こういうときは何を見るべきか、そして見ざるべきか……」

真壁は急に楽しくなってきた。この店でどの作品を借りて見るかを選ぶ行為こそ、ある意味真壁が人間らしいひと時なのかもしれない。同僚ならきっと、真壁は借りるDVDの棚にまっすぐ行って借りるのに5分もかからないと思うだろう。しかし、ここでの真壁は違う。真壁は何を借りるのか迷うこと、悩むことを楽しんでいるのだった。

らしくなること

「さ～て、どうしたものかのお、どうするべきかのお」

下駄の男——今は下駄の代わりに白の革靴を履いている『尾上弥太郎』と後藤に名乗った男は迷っていた。

「ここは直接あたってみるかよ。まあ、知らん仲でもないわけじゃがあ……さて、ワシはどの名前を名乗ったかのお？尾上弥太郎じゃったか、それとも屋久中（やく あたる）じゃったかのお」

下駄の男はその都度、相手に合わせた勝手な名を名乗っている。『勝手』と言っても下駄の男には『それなり』の理由をつけて名を名乗っている。己の名＝本名を相手に告げることは、大きなリスクである。下駄の男の職業柄、それはやむを得ないことである。敵に本名で縛られれば、苦戦をする。負けるとは思わないが、面倒は困る。

「もしもし、あー、すいません、そちらに真壁さんいらっしゃいますか？実はワタシ、真壁さんの忘れていった傘を預っているものなのですが」——ふん、我ながらたいした出任せじゃワイ。

「あー、真壁でございますか、真壁は本日体調を崩しまして、午後から早退いたしております」

なんと、まあ、こりゃ……

「あー、そうですか、では、また改めて御電話いたします。真壁さんにくれぐれもお大事にと、お伝えください。あー、ワシの名前ですか、いやあー、名乗っても覚えてらっしゃるかどうか？傘のことといえばお分かりになると思いますので、そうお伝えください。では、失礼します」

尾上弥太郎は黒のハンチングを取ると禿げ上がった頭を何度も右手で撫でた。頭は毎日手入れをしている。髪の毛もまた大きなリスクである。髪の毛一本で何かに縛られることもある。負けるとは思わないが、面倒なことは嫌いだった。

「しまった、さて、どうしたものかのお、どこに行くべきかのお」

尾上弥太郎は迷っていた。だが一つの考えが頭をよぎった。

「このさい、少々乱暴だが直接出向くかのお。あまり悠長なことはやってられんか」

そうやって両手でパンッ！とヒザの上を叩くと街の雑踏の中に消えていった。

やがてどこからともなく下駄の音が日がかげりかけた街の中に響く。

カラン、コロン、カラン、コロン

「まあ、こっちの格好のほうがワシらしいし、真壁にどちら様ですか？と聞かれることもないじゃろうからなあ」

下駄の男——真壁の傘に特別な力を与えた自称拝み家、尾上弥太郎と名乗ることもあれば、警察のデータベースにアクセスするほどのハッキングの技術を持つ男、真田五郎と名乗ることもある。下駄の男は真壁と出会ったときの格好、作努衣に下駄という井出達で再び笠井町に現れた

。「さて、後藤のほうはうまくやっとなるかのお」

下駄の男は上着のポケットからiPhoneを取り出し「いかんいかん、こっちじゃない」とブツブツとつぶやきながら、別の携帯電話をズボンのポケットから取り出し、電話をかける。

「あー、ワシじゃ、ちと問題がおきてのお、真壁の奴、ワシらが公園で話し込んでいる間に、どうやら体調が悪いとか言って早退したようなんじゃ。いやなーに、心配はいらんわい。奴の居場所は大体検討がついておる。その場所へ向かうが、そっちはどうじゃ。あ……あ……そうか…
…じゃあ、そういうのお……なるべく早く片付けて、こっちへ来てくれんかのお。あー、問題ない。お前さんが来る前に手は出さんよ。あー、それじゃあー」

下駄の男は電話を切ると舌を出してつぶやいた。

「真壁には手を出さんよ。しかし、それ以外の問題は、こっちの領分じゃからのお」

まるでイタズラを企む子供のような目をしながら、しかし、一つの大いなる決意を持った目をしながら、下駄の男は足を速めた。

「悠長なことを言われる状況じゃあないもんでのお、このままでは命に関わるわい」

解決、そして混沌

「なあ、『真田五郎』って、知っているか？」

「真田……さっきの老人ですが？」

「あー、まー、そういうわけじゃあ、ないんだがなあ」

「真田といえば、真田幸村、真田十勇士……あとは宇宙戦艦ヤマトの」

「こんなこともあろうかとしてヤツか！」

「あー、そうです、あの技術班の」

「ふん、まったく人を喰った話だ」

「どうかしました？」

鳴門刑事はなんとなく話の顛末が理解できたよう気がしたが、あえて気がついていない振りをした。

「あるときは拝み屋、またある時は技術屋、果たしてその正体は？ってか」

後藤は尾上弥太郎、真田五郎と名乗るチャーカーの男から受け取った携帯を眺めながめしていると不意に携帯が鳴った。

「ちいっ！まったくあの爺さんときたら」

待ち受け画面は尾上弥太郎の禿げ上がった頭の写真が映し出されていた。

「はい、後藤です……はい、はあ、はあ、うむう」

後藤の表情が若干険しくなった。

「わかりました。こちらも例の男に心当たりがあるんでそっちを先に済ませます。えー、なるべく早く合流できるように……はい、くれぐれも一人では動かないでください。では後ほど」

「なにか動きがあったんですか？」

後藤は鳴門刑事の方をトントンと2回叩いて歩みを急がせた。

「少し状況が動いた。こっちを早く済ませる。白鷺組にまず挨拶だ」

後藤は駅前でタクシーを拾い、白鷺組の事務所がある笠井南まで急いだ。

「確か白鷺組には、何かネタがあったよな、鳴門」

「えー、白鷺組の若い連中が飲食店で客に暴行を加えたとか、確か二日前です」

「上等だ。それで十分だ」

後藤と鳴門刑事は白鷺組の事務所がある雑居ビルの前でタクシーを降りるとすぐに事務所の前に若い男が現れた。

「こりゃあ江戸川南署の後藤さんじゃないですか？今日は何の御用で」

「あー、ちょっと聞きたい事があるな」

「そりゃあ、残念です。あいにく組長は外出中で……きちんとアポを取っていただきませんと」

「アポだあ？令状の間違いじゃないのか」

「随分物騒なことを……こんな道端で堂々とおっしゃるからには……」

それまでニヤニヤとしながら腰を低くしていた男は、急に態度を変えてすみ始める。

「なんか証拠があって動いてんだろうな、コラァアア！」

しかし、後藤も鳴門刑事も全く動じなかった。

「いきがるのもいい加減にして置けよ。二日前、駅前のビルで客とひと悶着あっただろう。今日はその話を聞きにきただけだよ。それとも何か？なんか他にやましいことでもあるのかな？」

鳴門刑事は相手の勢いを受け流すような口調で、しかし、強い眼光で相手を睨みつける。

「まあ、まあ、これは家庭訪問ってやつだ。別に組長がいなくても構わんさ、この程度のことなら他に話ができるやつがいるだろうが……それとも何か？白鷺組は加賀組と違って人材が不足しているのかな？」

後藤がたきつける。

「何だと貴様あまああ、もういっぺん言ってみろコラァ」

若い男は後藤に掴みかかる勢いでわめき散らす。

「うるせーな、何の騒ぎだ！さっきからぎゃーぎゃーと！」

事務所から一人の背の高い男が現れた。

「こりゃ、後藤さんじゃないですか？今日は何の御用で？」

「おお、武井か？組長留守だって？」

「はい、ちょっと出てます。連絡取りましょか？」

「いや、たいしたことじゃないんだ。お前のところの若いもん、もっとシツケしておけよ、ぎゃーぎゃーうるさくてしょうがない」

「はい、よく言い聞かせておきます。御用はそれだけで？」

「あー、ついでになんか最近俺の周りをちょろちょろかぎまわっているやつがいるんだが……こいつだ、見覚えないか」

後藤は携帯を取り出し、駅前で後藤をつけていた男の写真を武井に見せた。

「あー、何度か見たことありますがね。組長の客なんで、わたしには誰のことだか」

「ほー、否定しないんだな」

「どうせ察しはついてるんでしょ、後藤さん？組長にはわたしから伝えます。それでよろしいですか？」

「あー、構わんよ。だが悪いが今ここで連絡を取ってもらえるかな。こっちも、いろいろと訳ありでね。急いでいるんだ」

武井はしばらく後藤を見つめた。そして決断した。

「もしもし、あ、すみません、武井です。実は今、こっちに江戸川南署の後藤刑事さんが見えてまして、はい、はい、そうです。で、この前いらした、組長のお客様の写真をお持ちになられてまして、何か心当たりはないかと申してまして……はい……はい……わかりました。お伝えしておきます。はい、では失礼します」

武井は携帯で組長と話している間も、ずっと後藤を見つめていた。携帯を切ると後藤に目で合図をした。

「ありがとう。で、組長はなんと？」

「わかった。話はつけておくと、それだけお伝えしろと、ということです」

「そりゃぁどうも。平和的に解決できたことを心から感謝していると組長に伝えておいてくれ、二日前の傷害事件はまあ、客も酔ってたってことで、双方おとがめなし、これでチャラだ。いいいな」

「そりゃぁ、つりあわない話だ後藤さん。わたしにも立場というものがありますので、こちらが納得できる情報をいただきたい。いったい何なんです。この騒ぎは？」

「知らん。だがすべて解決さ。こいつは俺たちデカの動くヤマでもなけりゃ、あんたら極道のシマの争いやとったとられたの話でもねえ。だから警察も極道もお互いに手を引く。そう組長に伝えてくれればいい」

「あんた、食えない男だね。後藤さん？」

「ふん、言うな。俺も今さっき、食えない野郎にコケにされたばかりさ」

「まあ、わかりました。どうやら今回は後藤さんに大きな借りができた……ということのようですね？」

「そう思ってくれるなら結構。仲良くはできないが、感謝されて悪い気はしない」

そう言い残すと後藤は振り返り右手を上げて手を振った。堂々と相手に背中を見せてその場を去っていった。

「ふん、江戸川南署の後藤か、噂には聞いていたがなるほど、たいした男だな。さて、いずれにしてもこいつは『タダ』じゃすまねえな」

武井は思いをめぐらせていた。自分が動くべきか、それとも流れに身を任せるべきかを。そして再び携帯電話の電話帳を眺めながら、その場にいた若い連中に凄みをきかせた。

「お前ら、わかってんだろうな。手だしするなよ。ことと場合によっちゃ組長の立場を危うくするからな」

後藤に手玉に取られて不快感をあらわにしながらも若い連中は事務所に戻った。武井は一人、その場に残り呟いた。

「もっとも、すでに手遅れかもしれないがな。それは組長の問題であって俺の問題じゃない。本当にこりゃ、タダじゃすまないな」

結局武井は携帯電話パタンと閉じて胸のポケットにしまいこんだ。

「荒れ模様だな」

武井の見上げた笠井町の空は、恐ろしいほど静かだった。武井はひどくザワザワとした胸騒ぎを、どこか期待している自分に思わず噴出した。

「まったく、度しがでえなあ」

再会

「ターアーアーイーム、イゾンマイサーイ、イジュー」

真壁はローリングストーンズの『Time Is On My Side』を口ずさみながらレンタルビデオ店から出てきた。

「ご機嫌だなお主、悪魔にでも取り付かれたか？」

一瞬真壁は耳を疑った。振り返るとそこには、真壁がよく知る……いや、よくは知らない。だが、忘れることのできない男、下駄の男が立っていた。

「そんなにあわてる顔を見ると、やはりお主、やはり踏み外したようじゃのお」

下駄の男は、ひょうひょうとしながらも、しかし、しっかりとした足取りで、男の方に向かって歩みだした。

「ワ、ワタシは、何も……何も悪いことはしていない」

カラン、コロン、カラン、コロン

下駄の男は傘を持った男の目の前まで行くと、足を止めた。

「悪いことはしていない……か、ではいいことをしておるのかな？町のゴミを拾い集めるよ
うな？」

「あ、ああ……」

真壁は、すっかり下駄の男の放つ気迫に飲み込まれていた。

「もう、十分じゃろう。これ以上関われば、お主、元の場所に戻れなくなるぞい」

「そ、それが、どうかしたか……いや、だからなんだっていうんだ」

下駄の男は真壁の顔をしげしげと眺めた。

「それがどうしたはともかく、だからなんだというのは嘘じゃな。お主、それほど愚かな人間ではないように見えるがのお」

見透かされている。言い知れぬ敗北感。だが、憎悪や嫌悪といった負の感情を伴わない心地の良い劣等感……最初に出会ったときからそうだった、この男、只者ではない。かなわない。

「相変わらずやりにくいな」

真壁は苦々しく思ったが、どこかうれしくもあった。それは自我が芽生え始めた青年が、自分のことを少しでも理解してくれる圧倒的に尊敬できる大人を見つけたとこのような懐かしい感触であった。

「あんた、一体……いや、すいません……あなたはいったい何者なんですか？」

真壁は、積年の思いを打ち分けるようなまなざしで下駄の男を問い詰めた。

「まあ、そう焦るでない。少し歩こうかのお、あの日の夜のように、あの雨の日の……」

カラン、コロン、カラン、コロン

一日の中で一番長い時間、夕方の3時を過ぎたくらいというのは、どこか間延びして、1分1分が長く感じる。下駄の男と真壁の間に流れる時間もまるで空間が歪んでしまったかのようによく流れている。

「だいぶ顔色が悪いのお、何があったか……いや、何が起きているのか、話を聞かせてもらえぬかのお」

真壁は意外そうな顔をした。顔色が悪い事ではなく、自分がなにをしたかではなく、何が起きているかと尋ねる下駄の男は、いったいどこまで自分のことを知っているのか？

「そ、その前に、一体どうして、いや、あなたは一体全体なんですか？」

真壁は少しばかり語気を強めて下駄の男に詰め寄った。下駄の男は黙って腕を組みながら下を向いて歩いている。やがて思いついたように口を開く。

「お主は陰陽道とかまじない、呪い、そんなものは信じないじゃろう？」

真壁は即答を避けた。避けざるを得なかった。なぜなら今、真壁が直面している問題は、そういうことを認めてしまったほうが説明が楽な部類の話だからだ。だが、真壁には拘りがある。

「ふん、即答しないところを見ると、やはりそういうことが身近に起きているということじゃな」

下駄の男はニヤニヤと笑いながら真壁を見つめている。真壁は圧倒されていた。そしてそれがどうしようもなく悔しかった。まるで大人に手の届かないところにオモチャを掲げられたような気分だった。

「これは、あなたの仕業なんですか！」

思わず大きな声を上げてしまったが、下駄の男は怯みもしなかった。

「そうじゃな、ワシの仕業じゃ。だが、選択肢はお主にあった？最初はともかく2回目からは」

真壁は返す言葉がなかった。そして真壁は自分が犯罪者であることを始めて自覚した——自覚せざるを得なかった。

真壁は顔すっかり青ざめ、何かに怯えるように身を振るわせ始めた。

「ワシは……ワシはただ……傘を……あいつらが勝手に……」

真壁はまるで寒さに凍えるように胸の前で腕を交差させて振るえる肩を抑え込もうとした。

「罪はない。が、非は認めるか。お主らしいのお、ワシは嫌いじゃないぞ。だが、推奨はできんがなあ」

下駄の男は真壁を労わるでもなく、責めるのでもなく、諭すのでもなく、ただ淡々と真壁に語りかける。

「そもそもはワシのまいた種じゃ。条件がそろえば芽は出るし、茎も伸びて葉をつけ、やがては花が咲き、またそこから種を残すこともある。じゃから今回はワシが責任を持ってリセットをする。しかしのお、その後のことはワシの問題ではない。お主がこれまでどおりの生活に戻りたいと思うのならそれもかなおう。もちろん、そうでない選択肢もあるじゃろう。なんせ知ってしまったんじゃからのお。お主の住んでいる世界とは別の世界があるということ——『闇の世界』とでも言うべきか……」

真壁は思わず嘔吐しそうになった。下駄の男の『闇の世界』という言葉の響きに、今まで感じたことのない嫌な悪寒——言い知れぬ嫌悪感と底知れぬ恐怖からくる体の拒否反応としての身震いをした。

「まあ、首を突っ込んでいい事と、悪い事がある。これは間違いなく後者の領域じゃ、触れてはならないメモリーバンクじゃよ」

下駄の男に言葉に真壁は更に驚かされる。

「メ、メモリーバンクですか、いやあ、なるほど、こいつは、ははは、こいつは参ったな、書込み禁止領域ですか、くっくっくっく、なるほど、そりゃ崇る訳か」

「まあ、しかし、人の記憶や体験はそんなに簡単なものじゃないからのお、それに今お主が抱えている問題は、お主が思っている以上に深刻で、しかもあまり時間がない話なんじゃ。できれば今日中に処理しないと、ちとマズイことになりそうなんじゃよ」

真壁は自分が少しだけ落ち着いたことを認識した。思えばあの日、あの夜、非日常の扉を開けて以来、真壁はある一定以上の緊張感とストレスに耐えながら生活をしてきた。自分の周りで起きていることの非現実性と日常の中に潜む、非現実性——毎日、己のルールに従い、同じようなことを繰り返す毎日こそが、実は普通の人間の生活とはかけ離れた『非日常的な生活』とも言える。自分らしくあることが、日常的なストレスになっているという自覚は少なからず真壁にはあった。だが、この『下駄の男』と出会いは、そうした真壁の閉塞感を一気に解放するような刺激であったかもしれない。しかし、所詮、一般的な日常からはかけ離れた世界のことである。

日常的なストレスが新しいストレスによって一時的に開放されたとしても、そう長くは通用しない。やがて強烈な副作用として、自分に返ってくるに違いないのだ。

この男、この下駄の男なら、今の自分を何とかしてくれるかもしれない。自ら出口のない迷路に入り込んだのだ。今更、誰にも助けを求めるわけには行かない。だが、下駄の男ならば、そういうことを頼めるかもしれない。この男には自分の弱さを見せても構わないという安心感がある。いや、安心感と言うよりは心地いい敗北感だろう。この男には得体の知れない強さを感じる。自分とは生きている場所も時間軸もどこか違うような気がした。勝てる気がしない。

「ワタシはどうすれば……何をすればよいのでしょうか？」

真壁はある種の緊張感のほぐれからか、張り詰めていたものが途絶えた瞬間に改めて自分の身体の不調を自覚した。精神は緊張と論理的な処理によってなんとかシステムダウンせずに保ってきたが、その作業は身体にかなりの負荷をかけていたのか、冷静になると、自分の身体がいかに異常な状態にあるかを認識させられる。吐きそうだ。今にも倒れてしまいそうで、意識を保つ事が難しくなっている。視界が狭くなってきている。

「イヤだとは思うがな、お主の部屋に邪魔させてもらうことになる。このまままっすぐにだ。それと、もう一人、この件に関わっている者がおるんのでお、その者の許可なしには、いろいろとうるさくてのお、それにその者を頼りにしておけば、わしとは別の面で、お主の助けにもなるはずじゃ」

もはや真壁は下駄の男の言っていることの半分も理解できていなかった。ともかく部屋まで何とか歩いていかなければならないことは理解できた。それで精一杯だ。不意に携帯の音が鳴る。下駄の男の携帯だ。

「あー、そうじゃ、今真壁と一緒にいる。大丈夫じゃ、これからじゃよ。そっちはどうじゃ。うん、うん、そうか、まずまずじゃなあ。が、しかし、安心はできんか。どちらにしても命に関わる問題じゃからのお。何があるかわからんが、優先すべきはこっちの方じゃ、時間がない。急いで来てくれんかのお、あー、場所はのお……」

ブーン、ブ、ブ、ブン、ブ、ブーンッ！

下駄の男が、今いる場所を言いかけたとき、その声は2台のバイクの爆音によってかき消された。大通りから小さな路地に少し入ったところ——街中のエアポケットのような人気のない暗い通り——機会をうかがっていたかのように背後からいきなり2台のバイクが爆音を上げて真壁と下駄の男に向かって突進してきた。それはまるでネコ型肉食獣が獲物を襲う様子そのものである。

「クゥッ、間に合わなかったようじゃな」

下駄の男はそう独り言を言ったのか、或いは電話の先の後藤に向かって言ったのか、電話口から「どうしました！大丈夫ですか！」という怒号が聞こえたが、下駄の男はそれを無視するかのようには携帯を切り、身構えた。

「フン、邪鬼が！」

バイクはもう、目の前まで迫っていた。

危険地帯

2台のバイクは並走して真壁と下駄の男に突っ込んでくる。避け切れないか。下駄の男は履いていた下駄を脱ぐとそれを右左それぞれの手に持ち身構えた。

「伏せるんじゃ！」

下駄の男は真壁を体当たりで突き飛ばし、自らは両手に持った下駄を前方に構える。右のバイクはやり過ごせたかもう左のバイクに乗った暴漢は鉄パイプを振りかざしてきた。

ガチン！

下駄を構えた腕をまっすぐ伸ばしたところで鉄パイプの一撃を受け止め、そのまま右にいなすようにこれを交わす。10メートルほど先でバイクはUターンする。真壁は下駄の男に突き飛ばされたまま頭を抱えてうずくまっている。

「大丈夫じゃ、そのままじっとしておけ。下手に動くな！」

下駄の男は思わず下駄を手放した。

「えーい。手がしびれるわい！」

バイクに乗った暴漢はフルフェイスのヘルメットで顔を隠し、ナンバープレートも上に向けられて識別ができない。2台のうち一台がアクセルを拭かせながら奇声を発して突っ込んでくる。

「かすり傷程度じゃ済まんかな、これは」

下駄の男はこの状況にあっても全く慌てる様子がない。作務衣の上着の紐を解く。両手交差させ、わき腹のあたりに手を偲ばせ、何かを掴んだ。が、突っ込んできたバイクの暴漢にはその様子は目に入らないのか或いは老人に何も抵抗ができるはずはないと思ったか、不用意に鉄パイプを振り上げて突っ込む。

カシャーン！

下駄の男は両手に何を握っていた。両腕を左右に少し開き、縄跳びをするような構えから不意に30センチほどの棒が延びる。

「携帯式の特種警棒か……しかもあれは！」

もう一人の暴漢は冷静に状況を眺めている。二人の格好はTシャツにジーンズを着ていて見た目ではほとんど区別がつかないが、体格は下駄の男を襲おうとしているほうが大きく、もうひとりはやや、痩せ型だ。

先に突っ込んだ暴漢はこれから自分の鉄パイプの餌食になるはずの年寄りが何で両手に警棒を構えて自分を待ち構えているのか？と思いつつもこれからやろうとしている事——老人の頭上

に鉄パイプを叩き込み、そのあと道端にうずくまっている男を殴り殺す——ということ以外に何かしなければならぬ事があるとは考えもつかなかった。

このとき大柄の暴漢がバイクから降りて下駄の男と対峙するのであれば、もう少し下駄の男を苦戦させることもできたかもしれない。だが判断を誤った。大柄の暴漢はバイクに乗ったまま、しかも右手で鉄パイプを持っている以上、おのずと攻撃範囲は限られてしまう。下駄の男はあっさり暴漢の左側に体をかわし、構えた警棒を暴漢の懐に俵させる。

バチッバチッ！

少しはなれてこの様子を傍観していた痩せ型の男には、下駄の男がものすごい力で仲間をなぎ倒したかのように見えた。だが実際はちがう。下駄の男は両手に構えた警棒を襲ってきた大柄の男のわき腹に、軽く当てただけだった。

「ちいっ、ス、スタンガンかよ」

痩せ型の男はすぐに状況を理解した。無人のバイクは横倒しになり道路を滑っていく。下駄の男はもう一人の暴漢を睨みつける。とても普通の老人の迫力ではない。

「話が違うじゃねえか、畜生！」

男はバイクのアクセルを吹かしながら、倒れた男が起き上がるのを待った。下駄の男はゆっくりと倒れた男に近づき男を蹴飛ばした。

「夕方とはいえ、こんな日にコンクリートの上でいつまでも寝とったら焼け死ぬぞい」

下駄の男は鉄パイプを拾い上げるとそれを両手で握る。

「フンッ！」

大きな気合を入れると、鉄パイプは見事に真っ二つに折れ曲がる。

「くっ、くっ、くっ、くっ、一度これをやってみたかったんじゃい」

その様子を地べたから見上げていた大柄の男は、悲鳴をあげて自分のバイクへと走っていった。その様子を見ると、痩せ型のバイクの男は猛スピードで下駄の男の方へバイクを走らせる。下駄の男は一瞬身構えたが、バイクは下駄の男の前を通り過ぎ、大通りへと姿を消した。その後をもう一人の男が倒れたバイクを起こして後を追いかける。逃げ出したのだ。

「まったく、最近の若いもんときたら、なっとらんなあ、こういう時は去り際に『覚えてやがれ』とか捨てて台詞を言うもんじゃ！」

下駄の男は特殊警棒をジャージの中にしまい、下駄を履いて真壁のそばに歩み寄る。

「まあ、つまり、こういう事が今後起きないためにも、もう一人の男と会ってもらわにゃあなら

んということじゃい」

真壁には未だに何が起きたのか、そして自分の身に何が降りかかっているのか、はかり知ることができずにいた。

「あ、あんたらいったい、何やってるんだ？これってどういうことだよ」

下駄の男は携帯をポケットから取り出しながら応えた。

「ゲームじゃよ、ゲーム。フラグを立てたのはお主じゃよ。一度たった死亡フラグを帳消しにするのは、プログラムをちゃちゃっと書き換えるようなわけにはいかないんじゃよ。こっちの世界ではのお」

そういいながら下駄の男は自分の頬を人差し指で上から下へ、ゆっくりと撫で下ろした。それはヤクザを示すサインだということを真壁が理解するまでに、後藤との合流を果たすまでかかるほど、真壁は追い詰められていた。

集まった4人

呆然と暴漢が逃げ去るのを見送る真壁に、下駄の男は手を差し伸べた。

「心配はいらん、ワシはおぬしの味方じゃよ」

差し出された手を眺めながら、真壁は何とか自力で起き上がろうと試みたが、どうにもうまくいかない。不本意ではあるが真壁は下駄の男の手を借りることにした。下駄の男の手は、冷たく、しわだらけだったが、恐ろしいほどの生命力に満ち溢れていた。真壁のそれとは比べ物にならない。

「遅くなりました、大丈夫ですか？」

暴漢二人がバイクで逃げ去った方向から2人の安否を気遣う声がある。息を切らして走ってきた後藤、それに鳴門刑事だ。

「ワシか、ワシなら心配いらんよ。ちと肝を冷やしたがの。あー、こっちも大丈夫だといいたいところじゃが、急がないと取り返しのつかないことになる」

後藤は警察手帳を真壁に見せた。

「真壁直行さんですね。江戸川南警察署の後藤です」

「同じく鳴門です」

「あなたの身に危険が迫っていることについては、いろいろと事情があるようなんですが、おってそのことはお伺いするとして、まずは身の安全を確保したいのですが……」

後藤は下駄の男に目をやり、これからどうするつもりなのかを聞こうとした。

「そうじゃな、まずはワシの用を先に済まさせてもらって、全てはそれからじゃなあ。まずはお主の家まで行こうか。あまり気は進まんじゃろうが」

「わかりました。ご案内します」

いつもの真壁であれば、理路整然と警察の介入を拒んでいただろう。正直それができればそうしたいと真壁は思ったが、どうにも下駄の男には抗えなかった。

真壁が歩き出す。後藤の合図で鳴門が真壁の横につく。護衛役だ。後藤はその後ろで下駄の男と並んで歩く。

「まったく、あんた本当に何者なんですか？これは、もうお返ししたほうがいいですかね」

後藤は胸の内ポケットから下駄の男に渡された携帯を取り出した。

「こんなこともあろうかと……ですか？しっかりあんたの位置情報が表示されてる。おかげで電話が切れても迷うことなくここまで来れましたがね。どれだけの法律を犯しているやら」

「ふん、テクノロジーというものは使って何ぼのもんじゃ。規制だの許可だの法律だのくだらんわい。そういうお主も、単独捜査やら命令無視やら、臨機応変が過ぎると聞いておるぞい」

「まったく、千里眼とか地獄耳とか持ってるんですか？それならきっと、誰が襲ってきたのか、

大体検討が着いているとか？」

「ふん、お主も食えん男じゃのお、まったく」

「白鷺組はこっちで抑えました。タイミング的にはぎりぎり間に合ったと思ったんですが、どうやら制御が利かなかったってところですかね」

「左巻きのヘビじゃよ」

「左巻きのヘビ……左螺曼蛇（サラマンダ）！いや、そんなはずは……あれは確か11代目のときに解散してもう、5年近くになるはずですよ」

「どういうわけかここ半年くらいの中に、再結成されたらしい」

「つまり12代目に誰かなったと？」

「まだ表だっては動いてないようじゃが、自然に結成したというよりは、どうも誰かが後ろでお膳立てをしているらしいのお」

「警察でも把握していない動きを、なんであんたが」

「わしか、わしは11代目とはちと面識があつてのお。奴の話ではもうすでに組織は50人規模まで集まっていて、頭も12代目じゃなく13代目に替わっているそうじゃ」

「つまり12代目はもうなんかでパクられているとか」

「いやあ、それはどうかのお。もしかしたらもうじき合えるかもしれんぞい」

後藤はいぶかしげに下駄の男を見つめたが、それ以上下駄の男はこの話をしそうになかった。後藤は直接はこの暴走族に関わりを持っていない。管轄外だ。暴力団と暴走族やチーマーとは、それほど結びつきが強くはない。場合によっては反目……というより、暴力団のシマにちょっかいを出すようなことがあればただでは済まない。それはそれで住み分けがされているのである。

『もうじき合える』とはどういうことなのか？後藤は一瞬警戒を高めたがすぐにそれをやめた。どうもそういうことではないようだ。いつもとはちがう胸騒ぎがする。下駄の男の予言めいた言葉は気になるが、ここは下駄の男に従うほかないだろう。そして下駄の男の予言は、このあとの中することになる。およそ後藤が想像もつかないような形で……

真壁の部屋

真壁の部屋は閑静な住宅街に建てられたマンションの3階の角部屋。真壁は右のズボンのポケットからカギを取り出した。一瞬の躊躇が見て取れる。後藤はそれを見逃さなかったし、鳴門刑事は後藤が何かに気付いたのを感じた。意外なほどに重苦しく扉が開く。それほど古いマンションでもないだろうに、扉の隙間から瘴気が漂う。

「こりゃまた、すごいことに……」

下駄の男は、そうであろうと予測していたことに対して、予想を上回っていたことに反応しただけで、驚いたというよりかはあきれたという表情だった。後藤と鳴門刑事に緊張が走る。この感覚は『何かあるとき』のイヤな感覚。現場で遺体を発見するときのような、嫌な感覚が二人を襲った。思わず胸元のホルダーに手をかけたくなる。

「なんだ……いったい何がある？」

部屋の中は当たり前前に薄暗い。日は落ちきっていないが、この部屋はカーテンを閉め切っており、外から光が入らない。真壁はゆっくりと部屋の中に靴を脱いで上がる。壁の電気のスイッチを入れると、部屋の中に明かりが灯る、が、灯りは弱く照明をつけたのにも関わらず霧がかかったような薄暗さの中で、キッチンの冷蔵庫が唸りをあげる。

「真壁、何かいるのか？」

後藤はどうしても聞かずにいられなかった。下駄の男にではなく、真壁に直接聞いたのは、意識的にである。どうせ下駄の男は、後藤や鳴門刑事がすぐに理解できる言葉で説明するような気はないとわかっていた。

「何も、居たりしませんよ。ただちょっと、鬱陶しいだけです」

「鬱陶しい？鬱陶しいだと？」

後藤は声を押し殺しながら、しかたなしに下駄の男を見た。結局この男に説明を聞かざるを得ないようだ。真壁は壊れかけている。

「まあ、お主らしい言い草じゃな。存在は認めない。しかし、何か居るという感覚にはうそはつけない。もし、それを否定したら、自分の感覚を疑うことになる。そういうことじゃな」

下駄の男は下駄を脱いで部屋に上がりこみ、ずかずかと奥の部屋へと入って行く。

「おい、何を！」

後藤はどういうわけか体が動かなかった。明らかにこの空間は異常だ。刑事としての感と言うよりは、人間として、生物としての感性が、ここは危険だと叫んでいる。

およそ寝室であろうという奥の部屋の扉を下駄の男が開くと、瘴気はさらにその禍々しさを増した。異界の扉とは、きつとこういうものに違いない。

「気分が優れんようなら、この部屋には近づかんほうがいいぞ。命をとられることはないだろ

うが、流石にこれは身体にダメージが残るわい」

後藤はそれでもその部屋を覗かないわけには行かなかった。同時に鳴門刑事に命じる。「俺が行く、お前は真壁を見ていてくれ。様子がおかしい」鳴門刑事は一瞬不満そうな顔をしたが、従わざるを得なかった。それに、正直あの部屋を覗くのは怖かった。鳴門刑事は真壁の右腕を掴み、後藤に言った。「無茶しないでくださいよ。何か様子が変わります……普通じゃないですよ」

後藤は鳴門刑事と真壁を玄関のところまで下げさせた。ふと、白いもやのようなものが視界に入る。後藤の吐く息が白く濁っている。「おい、おい、こりゃあ、えらいことになってるなあ」鳴門刑事はまだそのことに気付いていないようだ。「まあ、いい、こんな経験はこれっきりだからな」

奥の部屋——後藤は部屋の入り口に佇む下駄の男のすぐそばに立った。立って部屋の中を覗いた。何か居る。何かはわからないが、何かがゆらゆらとゆれている。人の気配、気配だけはわかる。殺気はない。それどころかこちらに気付いていないようだ。お互いにお互いが見えていない状態。

「ほー、さすが長いこと修羅場をくぐって来ただけのことはあるようじゃな。気配だけはわかるか？」後藤は苦虫を噛んだような表情で部屋の中を見つめていた。「ワシには、この部屋がどんな風に見えるか教えようか？」下駄の男は、何か意地悪なことを思いついた少年のような表情で後藤を見上げる。

「あまり、楽しそうな話じゃなさそうですが、聞かせてもらいましょうか？ありゃあ、いったい何です？あそこには何があるんです？」

「死霊、幽霊、自縛霊、怨霊……まあ、俗に言うところは、そんな言葉じゃがな。みなグシャグシャじゃ」

「グシャグシャ……ですか？」

「そうとも、死んだときの姿のままよ。車にはねられたときの姿かたちそのままじゃ。つまり真壁に関わった三人。加藤、三河、山本じゃよ」

「加藤、三河に山本って、そんな馬鹿なことが……ああっ！」

後藤は下駄の男が言った事を信じられなかった——が、すぐに理解した。なぜなら下駄の男が三人の名前を言った瞬間、3体の気配から、こちらへの意識の集中……視線を感じたからである。結果、後藤は言葉を詰まらせた。それはなんとも不愉快な感覚、鳥肌が立ち、背筋からゾワゾワと沸いてくる、いや這い上がってくるような感覚、後藤ほどの男でも思わず身震いをしてしまうような悪寒。

緊迫する中にも、下駄の男は後藤に対して感心せざるを得なかった。「ほおお、お主にもわかるか。『殺気を感じ取る』というやつか。どれだけの修羅場を潜り抜けてきたのか、物騒な世の中じゃのお……まあ、これだけはっきりした形で現れることは、そうめったにあることではないがお」

後藤は頭に来ていた。わかったからといって何ができるわけではなし、それは見えようが聞こえようが同じことである。「こいつは全くもって、こっちの領分じゃないな。畜生、吐き気がする」後藤が刑事になってから、人間の魂の失われた姿——遺体——を普通の人間より、数多く見てきた。どんな酷い状態でも気持ちが悪くなったことはないが、怨恨がらみの被害者の遺体は、流石に気分が悪い。そういう場合、加害者の攻撃は相手の顔面に集中する。遺体の状態の悪さではなく、そういった人の負のエネルギーのようなものを感じて気分が悪くなることがある、これはまさにそれに似た感覚だった。

「一つ忠告しておく『これはいったいなんだ』とか、『いったい何が起きているンア』そういう無粋なことを聞くのはなしじゃ。お主には『何かいる』と感じられるかもしれんが、わからん奴にはわからんし、見えない奴にはみえない。つまり説明したところでそれが『こういうものだ』とか『どういうことだ』とか、誰にでもわかるように説明できるようなものじゃないということじゃ」

「そりゃあ、まあ、わかりますが、で、どうするんです？このまま放置しておいていいものではないのでしょうか？なにか退治するような方法があったりするんですか？」

後藤は少しだけ意地悪な言い方をした。そういうふうになんか少しでも体の中に湧き上がる毒を出しておかないと、腹の中に何かモヤモヤしたものがたまっていくような不快感を感じ、それは後藤が自然にとった行動であったが、下駄の男にはそれこそ感心せざるを得なかった。

「すまんがお、少し手伝ってもらえんかのお。なあに簡単なことじゃ、今から言うものを買ってきてくれんかのお。ジャストに行けば全部そろうと思うんじゃろう」そう言って下駄の男は手帳に何かを書くしぐさをした。「ジャストってあの大型量販店の……ですか？」後藤はそう言いながら、すぐに胸のポケットから手帳を出し、一枚ちぎってボールペンと一緒に下駄の男に渡した。

下駄の男は紙とボールペンをドアに当てて何かを書き出した。時々遠くを見るようなしぐさをしながら何かを思い出したように書き始める。「よし、たしか、これでよかったはずじゃ」そういうと得意げな顔で後藤にメモを渡す。

「な、なんですか？これは？」

「除霊の道具じゃよ」

「こ、これが……ですか？」

「そうじゃ。急がないと日が暮れてしまう。夜になる前に済ませないとまずいことになるやもしれん」

「は、はぁ、しかしこれは……私はどうも……あー、鳴門、ちょっといいか」

鳴門刑事は、真壁に注意を傾けながら、腕を伸ばして後藤からメモを受け取った。

「どうだ？わかるか？」

「えー、わかるには、わかりますけど……なんですかこれ？こんなときに必要なものなんですか？」

「詳しいことは俺にもわからん。だが、暗くなるまでにそろえたいそうだ。すぐに行ってくれるか？真壁のほうは俺が面倒を見る」

「えー、大丈夫です。僕、こういうの好きなんですよ。子供の頃から好きですし、甥っ子の誕生プレゼントに買ってあげたこともありますから」

「そうか、俺はどうもこういうのはよくわからなくてなァ」

「じゃあ、すぐ買って戻ってきます」

「あー、頼んだぞ」

そう言うと鳴門刑事は急いで玄関を出て行った。

「まったく……俺の領分じゃないことばかりだな」

後藤はぼそりと呟きながら、タバコに火をつけようとした。

「ここでタバコはやめてもらいますか？刑事さん」

「あー、すまない」そういうと後藤はライターをポケットにしまいこみ、火の付いていないタバコをくわえて、苦々しく玄関あたりから部屋の奥を眺めた。後藤の長い一日はまだ終わりそうになかった。

鳴門刑事が下駄の男の使いに行っている間、真壁の面倒を見ることになったことを、後藤は少しだけ鬱陶しく感じていた。どうにも真壁は後藤の肌に合わない。直感的に後藤はそう思った。

「えーっと、拝み屋のおっさん、少々詳しく話を聞きたいんだが……真壁と、あんたに」

後藤は下駄の男をどう呼んでいいのかをずっと考えていたが、結局『拝み屋のおっさん』ということにした。真壁はどこか表情がうつろでまともに会話ができる感じではなかった。下駄の男は真壁に近づき、顔を覗き込んだ。そして険しい表情をした。

「そんなに酷いのか？」

「いや、大丈夫じゃよ。ワシらがついていればどうということはないだろう」

「命に関わるとか言っていたのはアレの影響か？部屋の奥の——」

後藤にはその後の言葉が思い当たらなかった。幽霊とか、魂とか、呪とか、そんなことだろうとは思ったが、何が適切なのか、後藤にはさっぱりわからなかった。

「アレはな、俗に言う幽霊とか悪霊とか、そういうものだと言ってしまえば簡単じゃが、それほど単純なものではないんじゃないよ。言うなればこの男、真壁直行の『拘りと懺悔の念』のようなものが具現化した——影のようなものじゃよ」

「影……ですか？確かに影といわれれば、影のようですが」

「もちろん『影』というのにはいろんな側面がある。真壁という『ペルソナ』が強ければ強いほど、影すなわち『シャドウ』もまたより実体化しやすくなる」

「なんですか、その『ペルソナ』……とか『シャドウ』……とか」

「ふーむ、19世紀末から20世紀にかけて精神医学が急激に発達したんじゃが、『夢判断』とか聞いた事があるかのお？」

「えーと、確かフロイト……でしたっけ？」

「そうじゃ。その弟子というか、まあ、途中でフロイトとは決別したんじゃが、ユングという学者がおってのお、そのユングの言うところの『ペルソナ』、つまり『人格の仮面』じゃ。表向きなのな」

「人格の……仮面？」

「二重人格とか多重人格とか聞いたことあるじゃろう？犯罪の世界でもよく出てくる話だと思っただけなの？」

「あー、多重人格者、確かビリー・ミリガンとか」

「そうじゃ。その一つの人格をペルソナと考えて、まあ遠くないのお。社会との摩擦に自分の内側の心を守るための仮面、それがペルソナじゃ。そして仮面の裏側を影＝シャドウというんじやが、まあ、強烈なストレスの中で、その影が暴れだして社会的、道徳的規範を超えて行動す

る——つまり犯罪を犯すというのは良くあることじゃな。しかし、もちろんこれは、たとえ話じゃ。本来それと言えば真壁自身の内側の話。それがこうして外側で、お主にも感じられるほどのものになっているというのは、まあ異常なケースということになる。そして、そのきっかけを与えたのは、このワシなんじゃよ」

「なんですか、その『きっかけ』ってヤツは？」

「ふーむ、それは……」

下駄の男は真壁の部屋の周りを見渡し、玄関においてある、一本の傘に目が留まった。

「これじゃよ、この傘じゃ」

下駄の男は玄関から一本の黒い傘、それはどこにでも売ってそうな、1000円から2000円くらいの傘である。後藤は本屋の防犯カメラに移っていた映像を思い出していた。

傘……そうだ、傘だ。

後藤は下駄の男を見つめた。下駄の男は後藤を無視するかのように傘を見つめ、そして語り始めた。下駄の男が始めて真壁直行に出会った日の事を。

「あれは5月、午後から急に雨が降り出してのぉ、ゲリラ豪雨というやつじゃな。天気予報をみてなければ雨が降るなどとは思えないような、そんな天気じゃった……」

ことの始まり

「その夜は、いろいろと用事があったのお。そこに行く前についでに借りたDVDを返そうと雨の中、駆け足で北口にあるレンタルビデオ店に行ったんじゃがな。こともあろうにワシの傘をくすねた奴がおったんじゃ」

「突然の雨、傘の盗難、まあどこにでもある話です。運がいいか悪いかみたいなの……」

「ふん！そんなことじゃからお主等の仕事は減らんのじゃよ！たかが傘一本、しかしなあ、盗んだ側の罪の意識よりも、盗まれた側の恨みの意識が強いから犯罪がなくなると知るんじやな！」

下駄の男は珍しく語気を荒げて後藤を睨みつけた。後藤はそれを真正面から受け止める覚悟を見せた。

「まあ、それは今話すことじゃないじゃろうが、結局のところすべては原因はそこにあるんじやよ」

「すべての原因？なんですか、どういう……」

「つまり罪に見合った罰などというものは、人間が秩序ある社会を維持する為に作った方便であって、傘を盗んだことが死刑に値するという『人の思い』が世の中にあるということを見捨てるからそういう思いがどんどん淀み溜まっていくんじや。そしてそうした淀んだ思念が固まりになって、大きな事件を引き起こすと言っておるんじやよ」

後藤は火のついていないタバコをくわえたまま力なく首を横に振った。

「それは、確かに……確かに、そうかもしれませぬね。最近の事件は、短絡的というか、唐突というか、『すぐに切れる』というか、こちらでも理解できないような動機で傷害事件がおきています。このごろじゃあ、すっかり慣れてきましたが……でも、それじゃあ、その傘を盗んだやつを拝み屋のおっさんはどうしたんです？まさか、それって今回の？」

後藤はくわえていたタバコを右手の親指と人差し指でつまみ、前のめりになって下駄の男を見つめた。

「その傘にはのお、ちょっとした仕掛けがしてあってな。まあ、置き忘れてたりしないようにするまじないみたいなもので、場合によってはそれを持ち去ろうとする不貞な輩に罰が当たるような効果もあるんじやがな」

下駄の男はまるで嘘をついて悪戯を企んでいる子供のような目で後藤を見上げた。どことなくうれしそうにも見えた。

「で、じゃあ、たまたま、偶然、呪いの仕掛けたワシの傘が、不貞な輩に、盗まれるところを見てしまったのが、この真壁直行で、ワシの盗まれた傘を捜すのに協力してもらったんじゃないよ」

「協力？」

「なに、たいしたことじゃないわ。真壁はワシが特殊な能力で傘がどこに持ち去られてかを知ることができたと思っ込んでいるかもしれんがのお。真壁が傘を盗んだヤツがどの方向に逃げていったのか、直接きかなんでも、真壁の挙動をよく観察すればすぐにわかることじゃ。ワシの能力はそんなに便利なものじゃないし、ワシはエスパーでも仙人でもないからのお。まあなっではみたいと思うがのお」

下駄の男は両腕を組み、片目をつぶって見せた。

「なるほど『果たして本当のところはわからないのだ』ということですか？」

後藤は少しだけわかった気がした。原因の予測としては当たらずも遠からず、だが、真実というのはそう簡単にはたどり着けるものではない。今は、事実から推測される『およその見当』だけで、十分だ。どうせ聞いてもわからない真実など、今解決しなければならない問題に影響がないのなら、知らなくても差し支えはない——今はまだ。

「まあ、結局、店からさほど離れていない場所で、車に当て逃げされた男を捕まえて傘を取り戻すことができたわけじゃが、そのお礼に真壁の傘にも同じ種類のまじないをかけてやったんじゃないよ。まったく、年寄りの戯れじゃ。反省はしとるがしかし、後悔はしとらんがのお」

後藤は考えた。ここから先の話は大体察しがつく。世の中にそんな力が存在するのであれば、真壁のことだから理屈はともかく現象だけを認めてそれを実践した可能性がある。わざと、そう、たとえば、天気予報を調べてわざわざそういう異事が起こりやすい日に、『わざと』傘を無造作に置いておく。思わず手が出てしまいそうな取りやすいところに。その誘惑に勝てないような輩がここに3人集まっているわけか……後藤は脊髄反射的にこの結論に拒否反応を起した。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！あんたの話はわかる。いや、その……わかるつもりだ。だが、オレの知る限り、世の中ってというのはそんな単純なものじゃないだろう。第一、そんな力が実在するなら、世の中はもっと……」

後藤は自分が何をその後言いたいのか、すっかり忘れてしまった。脊髄反射的に何かが無意識から浮上して、否定をしなければという感覚だけで、反論を話し始めたのか、或いはゆるぎない論拠が自分の中にあっただのに、あまりに勢いよく吊り上げたものだから、その意識の釣り糸が切れてしまったのか。

「もちろんじゃよ。もちろん、世の中はそんな単純なものじゃないんじゃない。ワシの施したそれは、いわば暗示のようなものだと思ってくれていい。ワシは仙人でもエスパーでもないからのお。

じゃが、いくつかの偶然が重なった。悪い偶然じゃ。本来、起こらないことが起きてしまうような偶然、負の連鎖じゃよ」

そういい捨てて、下駄の男は後ろを振り返り、奥の部屋を見つめた。後藤は結局のところ、すべてを下駄の男に、この拝み屋のおっさんに任せるしかないのだと悟った。今は……

「ふー。ところで拝み屋のおっさん。いったいどんな用事で急いでたんだい？この手の……厄介ごとかい？」

下駄の男はニヤニヤした顔で振り返ると左手の小指を上立てて言った。

「これじゃよ、これ」

後藤はもう一度、首を左右に振り、両手を挙げて言った。

「参りました。降参します。ここからはすべてお任せします」

かくして準備は整った

「遅くなりました。でも完璧です。しかし、本当にこんなんでも良かったんですか？いったい何に使うんですかねえ、こんなもの……」

鳴門刑事は少しだけ息を切らしながらレジ袋の中を覗きながら疑問と不安と期待の混ざり合ったなんとも言えない表情をしていた。

「ふむ、拝み屋のオッサン、これでいいのか？」

後藤は鳴門刑事からレジ袋を受け取ると怪訝そうな顔で袋の中身を一つ取り出した。

「おー、それじゃそれ、やっぱ昭和の円谷の仕事は秀逸じゃのお」

そういって下駄の男はレジ袋と後藤が手にしているソフトビニールのおもちゃを受け取った。

「ゴモラにエレキングにベムスターじゃな。そして我らがヒーローウルトラマン、セブン、ジャック」

「ジャックって、そんな名前のウルトラマンいましたっけ？」

「後藤さん、それ『帰ってきたウルトラマン』の本名ですよ。へえ、それにしても、尾上さん、本当にお詳しいんですね。ボクも大好きなんですよ。DVDとか借りて全部見ちゃいましたよ」

鳴門刑事は、後藤の視線を気にしながらも、これから起きる事が何なのかワクワクしている感情を抑えきれない様子だった。それを後藤が咳払いで一括した。

「え、えへん！で、拝み屋のオッサン、次は何をすればいい？」

下駄の男は、イタズラを始めようとする子供のような表情で後藤を上目遣いで見ると、鳴門刑事に向かって次の指示を出した。

「すまんがのお、鳴門刑事、この近くに子供が一杯遊んでそうな公園にいて、そうだなあ5歳くらいの子供で、ウルトラマンのおもちゃで遊びたい子供を捜してくれんかのお。ちゃんとお母さんに許可をもらってくれ、ちょっとした雑誌の取材とか、大学の研究とかなんとか言っとうまく誤魔化すんじゃよ。段取りができたなら連絡を、そこにすぐに向かうから」

鳴門刑事は少しばかり残念そうな顔をした。きっとこれから何かをここで始めるに違いないけど、自分はそれを見ることはできない。でも、まあ、後藤ではまず母親や子供に信用されないだろうことも十分に理解できたし、大体が、後藤はそういう事が苦手なタイプだ。

「わかりました。多分、西港公園なら、今の時間、遊んでいる子供がたくさんいると思います。段取りできたら連絡します。じゃあ、あとで！」

鳴門刑事が勢いよく玄関を飛び出すと、下駄の男は、厳しい表情で後藤に語り始めた。

「このようなことには、なるべく素人は巻き込みたくないじゃ。もう十分懲りておる。その点お主は、なんというかこう、いい感じに鈍いところがある。それは欠点ではなく、すばらしい長

所じゃよ」

「それはどうも、なんだかちっとも褒められた感じはしませんが、まあ、いいでしょう。わたしもかわいい部下をあまり危険な目にはあわせたくない出すし、それに……」

「子供が苦手か？いや、違うな、母親の方じゃの」

「ちい、あんた本当に……まあ、いいですよ。なんだかわかりませんが急がなきゃまずいんでしょう？で、こんなもんいったい何に使うんです。まさか、子供に遊ばせて終わりじゃないでしょう？」

「いやあ、その通りじゃ……まあ、その前にやらなきゃならんことはあるがのお」

下駄の男はまた、意地悪い表情をしながら、それでも目の真剣さは、更に増しているようだった。どうやら、下駄の男の言っていることは嘘や冗談ではないようだが、後藤には皆目検討がつかなかった。

「これを預っておいてくれ、これはまだ使わん」

そういうと下駄の男は、ウルトラマン、ウルトラセブン、ウルトラマンジャックこと帰ってきたウルトラマンのソフビ三体を後藤に預けた。下駄の男はゴモラ、エレキング、ベムスターの三体の怪獣を袋の中から取り出し、テーブルに並べると、袋と一緒に入っていた筆記具、筆ペンと半紙を取りだし、それを3つにおいてきれいに破くとなにやら文字を書き出した。

「まじないのようなものですか、それ？」

「まあ、間違っちはおらんがのお、まあ、より作業を効率的に行うための儀式のようなものじゃ」

「儀式、ですか？」

「そうじゃ、人間は何か一つのことを始めるにも終わるにも儀式をやったほうが、スパッと頭の中を切り替えることができる。そういう意味じゃ儀式はとても重要なんじゃよ。とくにこっこの領分ではのお」

かくして準備は整った。

三体の怪獣

下駄の男は、ソフトビニールの怪獣の頭や尻尾を胴体からはずし始めた。後藤はその様子をただじっと、いぶかしげに眺めていた。下駄の男は懐から何かを取り出す。ハンカチのような布のようなものの中に何かが入っているようだった。下駄の男はテーブルの上にそれを広げた。中から小さな三つの透明なビニール袋。袋にはそれぞれ何か書いてある。『加藤』『三上』『山本』、中に入っているのは——後藤は思わず口にした。

「おい、拝み屋のオッサンそいつはまさか！」

「あー、そうじゃよ。あの3人の遺骨の一部じゃよ」

「あんたそれをどうやって！いや、そんなことはこの際どうでもいい。どうするんですかそんなもの？」

「手順をなるべく省略するために、ちょっと本物をな。」

「本物って、悪い冗談は——」

後藤は下駄の男の表情を見て取った。これは嘘じゃない。どうやら、とんでもないことを始めるらしい。刑事の目の前で拝み屋が呪術をやろうとしている。

「怖いかな？」

「こう見えても信心深いんですよ、俺は。罰が当たるのはあんただけなんでしょうね」

「その点は心配いらん、なんせワシはこの世界のプロじゃからのお」

「なんかその、塩とか酒とか身を清めるようなことしなくても大丈夫なんですか？」

「そんなに心配するのなら、ほれ、台所に行って酒でも探してこい。まあ、真壁の部屋にはそんなもの、置いてあるとは思えんがのお。せいぜい食卓塩じゃろう」

後藤はもう、口を出すのはやめようと思ったが、どうしても言わずに居られなかった。

「で、なにか、行事の前の注意事項とかないんですか？」

「ふん、簡単なことじゃよ。口出し、手出しをせんこと、それだけじゃ！」

後藤と話しながらも下駄の男は手を休めずに小さなビニール袋の中身——遺骨をソフトビニールの怪獣の中に入れて頭や尻尾を元通りにしていった。

「まずはベムスター、加藤三治よ、ドラゴンスケールの12代目！お前の居場所はここじゃよ！」

部屋の奥から冷たい視線が下駄の男に向けられた。それは歪んだ心、闇に沈み行く魂の、もがき苦しむ慟哭。後藤はなんとも不気味なうめき声が聞こえたような気がした。すると次の瞬間、下駄の男は手に持っていたベムスターのソフビ人形を闇に向かって投げつけた。後藤は息を呑む。闇の中に蠢く、何者か——影のようなものがベムスターのソフビ人形に絡みつき、人形の腹から中に吸い込まれるような錯覚を見た。いや、見たような気がしたのか？

部屋の奥のどんよりした空気が、少しばかり軽くなった気がしたが、同時に何かザワザワと騒がしいような気もする。下駄の男はすでに右手にエレキングを握っていた。

「次はこれじゃい。三河剛よ！お前は組織の飼い犬だな。エレキングが御似合いじゃわい！」腹のそこから響くような唸り声。憎悪、非情、愚直……加藤のときとはまた違う負の感情の波紋が部屋中に広がる。その波紋の中心めがけて下駄の男はエレキングを投げ入れた。エレキングは一瞬空中で静止したかのような錯覚のあと、波紋が渦のようにエレキングの角めがけて集まるような幻影。

「最後はこれじゃ、山本茂よ！凶悪で攻撃的、しかも貪欲。ゴモラほどの威厳はこれっぽちもないが、貴様はゴモラのそれと同じ邪な魂を宿した目をしておるわい！」ドーン！と突然地響きがあったような波動が襲い掛かる。思わず後藤はよろけそうになる。幻覚ではない、はっきりとした輪郭で不純な魂を宿した邪ないやらしい視線を感じ、思わず身震いをした。下駄の男はゴモラのソフビ人形を右手に持ち、正面へ突き出した。その手が震える。ぶるぶると震える。まるで何かの圧力が下駄の男の正面にあるような……いや、きつとなにかあるに違いない。「ふん！」下駄の男が気のこもった息を吐き、その圧力を押しつけた。「己の姿に憤怒しおったか！たわけめ！これが貴様の姿じゃ！」ついに下駄の男はゴモラを闇に向かって投げつけた。

「なに？」後藤は目を疑った。投げられたゴモラの人形は奥の壁に当たる軌道を描くのを突然やめてしまったのだ。今度こそ、それは一瞬静止した。次の瞬間まるで何か下から突き上げたように天井に向かって飛び上がり——いや、カチ上げられ、ぐるぐると回転しながら天井にぶつかり、今度は何かに叩きつけられたかのように勢いよく床に転がり落ちた。一瞬の静寂のあと、後藤は何が起きたかよりも、今実際に身の回りで起きている変化に驚いた。

「あの、いやな感じが……なくなっている」

不意に後藤の携帯がけたたましく鳴る。後藤は慌てたが下駄の男は微動だにしなかった。

「もしもし、鳴門です。指示通り、準備できました。西港公園です」

「あー、あー、鳴門か、そうか、わかった……」

「後藤さん、どうかしましたか？」

「あー、いやー、なんでもない。こっちも片付いた。すぐにそちらに向かう」

後藤は携帯を切ると。助けを求めるような目で下駄の男を眺めた。

「あー、すみません。勝手に準備できたとか、いっちゃいましたが……」

「いや、構わんよ。準備はできておる。さて、最後の仕上げじゃ。真壁も連れて行くぞい」

下駄の男は、奥の部屋に転がった3体の怪獣のソフビ人形を拾い集めると、何も省みずに玄関

までまっすぐに歩いて出て行った。後藤は真壁を抱きかかえ、その後を追うしかなかった。

うつろな状態の真壁を公園まで連れていくのは、思った以上に手間のかかる作業だった。それは裏を返せば、それだけ真壁の状態が良くない——危ないということだろう。いろいろと聞いたこともあったが後藤は黙って下駄の男についていくことにした。「真壁、大丈夫か、しっかりしろ」後藤の呼びかけに全く反応しないわけではないが、気力というもの目に見えて消失していた。憔悴しきるまで、さほど時間はかからないだろう。

「なーに、ここまでくれば心配はいらん。よい依代が手に入ったおかげで、スムーズに事が運んだ。お主の部下……鳴門刑事じゃったかのお。いい仕事をしてくれたわい」

「よりしろ……ですか？」

「そうじゃ依代、これはこれでな、なかなか深いものがあるのじゃが、まあ、いろんな呼び方もあるが、たとえばじゃ、ありがたい仏像にはありがたい仏の御心が宿るように、邪悪な像には邪心が宿る。奴らの魂はまあ、具現化するとこんな醜い姿に似ているということじゃ」

だったら本当は専用の道具があるに違いない、と後藤は思ったが、この老人、下駄の男はそういった型にはまった事よりも、より実践的な方法を選ぶのだろうと、直感的に理解した。そして同時に、下駄の男なら『普通のやり方ではつまらない』というくらいの考えはあるのだろうと。

「しかも、今回はあの場所——真壁の部屋から追い出すだけでなく、払わないといかん。短期間でできる方法など、そうはない。これは自慢でもなんでもないぞ。わしレベルでなければできないことよ。最近の術者はどうも型にはまっていかん。世間もそうじゃが、こっちの世界でもマニュアル至上主義が浸透して来ておつてのお……まあ、なにも今に始まった事ではないのじゃが、なんというか、つまらんことよ」

後藤は思わず苦笑した。

「なんじゃい、そういうお主も、わしの見たところ、同じ穴の貉じゃよ」

再び後藤は苦笑した。

「しかし、拝み家のオッサンや俺みたいな者ばかりじゃまずいでしょう」

「おー、だから鳴門くんのような素直な若者が大事なんじゃ。王道行くべきものは王道を行けばよい。なにもわざわざ邪の道に誘い込むこともあるまい。その辺、お主はちゃんとわきまえておるか？わしゃ、心配でしかたがない」

先を急ぐ下駄の男は、一連の会話の中で始めて後藤の方を振り向いた。その顔はしわくちャの

満面の笑み、しかしその肌艶はどこか神々しく、もし仙人というものがこの世に存在するのなら、こういう人物なのだろうと思った自分を、後藤は笑うしかなかった。

「お一、お一、おるわい、おるわい、めんこいわっぱがたくさんおるわい。子供はいいのお。それに……」後藤は目の前に広がる光景に正直、悪寒が走った。どんなに恐ろしい目にあっても、例えそれがこの世のものとは思えないようなものでも、まだましに思えた。後藤は子供とその母親が大の苦手であった。

「やはり若い人妻はええのお、女性が美しく見えるのは、やはり母としての強さとやさしさを身につけてからじゃ。そして、その過程にある女子は可愛らしさも兼ね備えておる」この件に関しては、後藤は下駄の男に同調はできなかった。

「後藤君、君にはまだ、わからんかのお。ものの美しさと愛しいさは完成形にではなく変化の過程にあるんじゃよ。蛹から蝶々になる姿やガニからセミになる瞬間を見た事があるかね。あれは本当に美しいぞい」

後藤は頭の中で理解はした。しかし物事の道理と自分の生理的な感情は必ずしも一致する必要も感じなかった。そこが自分の長所でもあり、また短所でもある。自分のような人間には、つまりはそういう役割があり、鳴門刑事のように道理と生理が一致している人間には、進むべき道がはっきりとしている。そしてできることであれば、多くの人間がそうあるべきで、『そうでない側の人間』が、他の誰かが王道に行こうとすることを妨げたり、違う道に誘い込むようなことはしてはならないし、後藤はそれを許してはいけないと思った。それはもしかしたら自分が今、刑事であることの理由のひとつかもしれなかった。

そういうことを考えたことはなかったが、下駄の男との出会いは、後藤に少なからず影響を与えているようだった。それを不愉快には思わなかったが、手放しで喜べる後藤ではなかった。「拝み家のオッサンには、どうりでかなわないわけか。手出し無用、口出し無用を今は貫きますよ」

下駄の男はニコニコと笑いながら後藤の申し出を聞き入れ、鳴門刑事がこちらを見つけると手招きで呼びつけた。「ご苦労じゃのお、では、これからワシが言うことを、うまいこと伝えてくれんかのお」そう言うと下駄の男は後藤に目で合図をしてまわりに話が聞こえないような距離に呼び寄せ、これから何をするのかを簡単に説明を始めた。真壁は相変わらずうつろな目をして、回りの風景を眺めている。おそらくここがどこかもわからないような状態なのだろうが、心配しても始まらない。全てはこの男、拝み屋、下駄の男に任せるしかないのだから……

それはいささか異様な光景であった。閑静な住宅街にある公園の砂遊び場に、4人の若い母親の姿と、6人の子供（後藤にははっきりと男女の区別がなかった）、そこにスーツ姿の男が3人と、作務衣を着た老人と思しき男がひとり。真壁は砂場の近くになるベンチに後藤と一緒に座り、鳴門刑事が母親と会話ができる位置に立ち、下駄を履いた老人と思しき人物が近所の量販店のレジ袋を腕に下げ、子供たちと砂場で遊んでいる。

最初、後藤は下駄の男のことを子供たちが怖がってしまうのではないかと考えてみているが、ものの数分ですっかり打ち解けている。後藤にはとてもマネはできない。

「坊主、これ知っているか？ほら、怪獣の人形だ。なんだかわかるかな？」

「あー、僕知ってるよ、それベムスターって言うんでしょ」

「おー、おー、よく知ってるのお、坊主」

「うん、だってパパがDVD持ってるもん」

小学校1年か2年くらいだろうか。どうやらここにいる子供の中で最年長のようだ。その子の横で黙々と砂の山を作っているのが妹のようである。

「コウキ君のパパってウルトラマンとか大好きなの？」

「そうなのよ。もう、子供が喜ぶとか何とか言って、結局自分が見たいだけなのよ」

「男の人って、そういうの好きよね。うちのダンナも、なんていうのガンプラ？あんなの掃除の邪魔になるだけよ」

どういう人間関係なのだろうか。後藤の興味は一瞬そちらのほうに傾いた。どの子とどの母親が家族で、母親同士の中でリーダー的存在は誰で、旦那はどんな職業なのか……という思考を瞬時に行ったもののすぐに後藤はそれを吐き捨てた。今やるべきことはそれじゃない。

鳴門刑事が後藤のところに歩み寄る。「後藤さん、ボクが買ってきた人形、なんか感じが違うというか、妙に迫力が増したというか、なんか別物みたいな気がするんですけど」

後藤は一瞬正直に答えそうになってそれをやめた。

「そうか、俺には全然わからんがな」

鳴門刑事はいぶかしげに後藤の顔を覗き込む。



「いいかい、坊主、このベムスターを倒したのはどのウルトラマンか知っとるか？」

「えーとね、えーとね、こっちなあ」

コウキ君はウルトラマンとウルトラマンジャックとで悩んでいた。後藤にはよくわからなかった。

「ミィ知ってる。こっちだよ」

それまで砂の山を作るのに夢中になっていたコウキ君の妹がジャックを指差した。

「でも、この怪獣強いから、ウルトラマンやられちゃったんだよ」

「おー、おー、よく知っておるのお、そのとおりじゃ」

「よし、じゃあ、おじちゃんが怪獣をやるから、坊主がウルトラマンジャック、お嬢ちゃんがセブンをしてくれるかのお」

「うん、いいよ、わかった」

「そこの2人もほれ、こっちに来んか、そっちのわっぱもほれ」

下駄の男に促されて、後藤と真壁、それに他の子供たちもユウキ君とミィちゃんを囲んで輪になった。「これから怪獣ショーの始まりじゃ」

下駄の男はベムスターのソフビ人形にふっと息を吹きかけ、なにやら口元で呟いている。すると怪獣の人形はいっそうリアリさを増し、子供のオモチャとは思えないような迫力を放ち始めた。

「怖い」集まってきた子供のうち、一人の女の子が砂だらけの手で顔を覆う。子供が怖がるほど、この人形には異様な雰囲気、まるで獣のような獰猛さで子供たちを睨んでいる。その目はまさに猛禽類——鷹や鷲のような機械的で無慈悲な狩人の目である。

「ウルトラマンジャック！子供たちを守るのじゃ！」

ユウキ君がウルトラマンジャックのソフビ人形を右手に掴みベムスターに体当たりする。

「あ！」何か特別な力ではじかれてしまったかのように、ジャックの人形は子供の右手を離れて

砂場に倒れてしまう。

「それ、セブン、ジャックを助けるんじゃ！」

ミイちゃんが倒れたジャックのそばにいてセブンとジャックを摺り寄せる。

「大丈夫？ウルトラマンジャック？」

「それじゃ、セブンはジャックにこのブレスレットを渡すんじゃ」

そういって、下駄の男はオモチャの指輪のようなものを、ミイちゃんに手渡した。

「ウルトラマン、このブレスレットを使って、あの怪獣を倒すのよ」

「よーし、今度は負けないぞー」

再びユウキ君がウルトラマンジャックでベムスターにアタックする。今度はベムスターが一瞬怯んだように見えた。

「今じゃ！ウルトラブレスレットを使うんじゃ！」

「いけー、ウルトラブレスレット！」

次の瞬間、ベムスターのソフビ人形の接合部分、両手と首がまるで何かに切断されたかのようにポットと取れた。

「うわー、すごい！すごい！」

子供たちから歓声が上がる。「消えた……あの男が消えた」真壁がボソリと呟く。「い、今のは、後藤さん、手品かなんかですか？」鳴門刑事が後藤と下駄の男を交互に見つめる。「俺にわかるか」後藤が吐き捨てる。「今、確かに光が……あつ、何か、さっきまでの凶悪な雰囲気はなくなって、ボクが買ってきたときの雰囲気に戻りましたよ。これって……」鳴門刑事は、後藤の耳元でささやく「何かの呪いとかそういうことですか？」

「よくやったぞ、坊主、次はこいつじゃ、エレキングの登場じゃ！」

エレキングVSミィ

「うわー、なんか今にも動きそう」

「今度は、ぼくにやらせて」

「この怪獣なんていうの」

子供たちは砂遊びを中断して一つの輪を作っていた。それはまるで昭和の風景のようだった。紙芝居を囲み、砂や泥で汚れた手をズボンにこすりながら駄菓子を食べていた幼い頃の思い出を重ね合わせるには、後藤も鳴門刑事も若かったが、下駄の男にはその姿がはっきりと見えていた。

「セブンはわたしがやるのお」

ひときわ大きな声でミィちゃんが叫んだ。さっきウルトラマンジャックにウルトラリングを渡したのはミィちゃんだった。よっぽどセブンが好きらしい。

「よし、セブンはお譲ちゃん、エレキングは宇宙怪獣じゃ。ピット星人の言うことを何でも聞く、わしがピット星人になって指示をだすから、誰にエレキングをやらしてもらおうかなあ？」

「はい、はい、はい、ボクやる、ボクやる」

「じゃあタクマくんやって」

目のくりくりした少年タクマくんは、おそらくミィちゃんと同じ幼稚園のようだ。

「タクマくん、ちゃんとやらないと、ダメなんだからね」

ミィちゃんとの上下関係は明白だ。後藤は思わず苦笑した。



「エレキングは電気攻撃が得意なんだ。弱点は角、あれを折られるとピット星人からの命令が届かなくなるんだ」不意に真壁が呟いた。後藤はそれを聞いてはっとした。内容にではない。真壁の意識がはっきりしてきている。目はうつろだが、目の前の光景が理解できている様子だ。

「効果が、現れているのか……」

「さあ、ウルトラセブン対宇宙怪獣エレキングじゃ。エレキング、セブんに尻尾攻撃じゃ」

タクマ君は下駄の男の指示に従って、エレキングの尻尾をセブンに当てた。

「きゃあ」

ミィちゃんが思わず手を放す。セブンが前のめりに倒れる。

「後藤さん、今の見ました、今一瞬、スパークしたような……どんな細工がしてあるんです、あのエレキングには？」

「さあて、首やら尻尾やらはずして、なんかやってたからな、あのペテン師は」

「角だよ、エメリウム光線で角を狙うんだ」真壁が呟く。

「よーし、えめりむこーせん！」

ミィちゃんには、エメリウム光線と聞こえたのか、あるいはエメリウム光線と言おうとして、いえなかったのか……真壁に促されて、ミィちゃんはセブンを起き上がらせてエレキングと対峙する。一瞬セブンの額が光ったように見えた。次の瞬間、エレキングの角が折れる。

「うわあ」タクマ君が思わず怯んだ。「いまだ、アイ斯拉ッガーで止めだよ」真壁の声は少し興奮しているようだった。

「アイ斯拉ッガー！」ミィちゃんはセブンの足を砂に埋め込んで立たせると、自分の頭の上に両腕を構えて、アイ斯拉ッガーを投げるマネをする。するとまた、セブンの頭がスパークする。

「ふーっ」下駄の男がエレキングに向かって息を吹きかける。

「あーっ！」またしてもタクマくんの悲鳴。エレキングの首と尻尾が胴体から外れ、砂場に横たわる。「すごーい、すごーい」まわりの子供たちは手を叩いて大喜びする。真壁の目から涙がこぼれる。

「消えた、消えていった。あの男も、消えていった……」

下駄の男は、すかさずバラバラになったエレキングをレジ袋にしまう。

「お譲ちゃん、よくできたねえ。ご褒美にこれを上げよう」

「ありがとう。おじちゃん」

ミィちゃんはウルトラセブンのソフビ人形を大事そうに抱えて、お母さんの下に報告に行く。

「いーなあー」他の子供たちが羨ましそうに見ている。

「御兄ちゃんと仲良く遊ぶんじゃぞ」下駄の男は、満面の笑みでユウキ君の頭を撫でる。「妹と仲良くするんじゃぞ」そういつて、ユウキ君にはウルトラマンジャックを渡した。

「さて、最後はこいつじゃ！古代怪獣ゴモラじゃ」

ゴモラVSタクマ前編

下駄の男がレジ袋から取りだしたゴモラを見て、それまでキャッキヤ騒いでいた子供たちの表情が一変した。「怖い……」「なんか、こっちを睨んでる」



「後藤さん、あれは僕が買ってきたものとは全然違いますよ。なんですか、ベムスターといい、エレキングといい、いったいどんな魔法をかけたんです？」

「ふんっ！魔法？とんでもない。呪術だよ。それもとびきりの！」

後藤の吐き捨てた言葉に、鳴門刑事は思わず何かを反論しようと思ったのだが、すぐに諦めた。今ここで起きていることは尋常じゃない。

「真壁、少しずつですが、精神も身体も回復しているような……これっていったい、何なんです、後藤さん！」

「なんでも俺に聞くなて言ってるだろう。俺にもわからんことはわからんし、知らんことは知らん。そしてわかる必要も知る必要もないことが、世の中にはあるんだということだ……今俺がお前に教えられることは、それだけだ」

「そんな！」

鳴門刑事は珍しく向きになって後藤に食って掛かろうとした。が、後藤が厳しい顔で鳴門刑事を制した。

「いや、すまん。訂正する。『教え』ではなく、これは『忠告』だ、鳴門！」

納得はできない。そう思いながらも、鳴門刑事は後藤の言いたい事もわかるような気がした。思えばこの事件そのものが、そもそも関わるべきことではないし、『関わるな』と上層部からも後藤からも忠告を受けていたことだと、今更ながらに思い知らされた。が、しかし、そう思えば思うほど、鳴門刑事の胸には黒い、わだかまりのようなものが、どうしようもなくざわめくのであった。

「よし、今度は坊主がやってみるか？」下駄の男は、ゴモラに続いてウルトラマンをレジ袋から出してタクマ君に話しかけた。

「おや？」後藤はレジ袋の中にまだ、何か入っていることに気がついた。

「どうしました？」

「いや、あの中には、もう一体いるみたいだが」

「あー、怪獣は全部で4体買いました」

「予備……というわけか？」

「さあ、タイラントという怪獣です。タイラントというのは……」

「その話は後だ。始まるぞ」

タクマ君は恐る恐るウルトラマンを受け取ると、ゴモラと対峙した。見た目には怖がっているのがわかる。ゴモラは下駄の男が操る。エレキングと同じでゴモラの武器は強烈な尻尾による攻撃である。エレキングは電撃と締め付けの攻撃であるのに対し、ゴモラの尻尾攻撃は、強烈な打撃技である。ゴモラの尻尾攻撃にタクマ君のウルトラマンは跳ね飛ばされる。

「尻尾だ。尻尾だよ」真壁が呟くが、タクマ君にはどうしていいかわからない。そのとき、下駄の男が気のこもった言葉で真壁を叱咤した。

「真壁よ。己の力で、ゴモラに立ち向かってみせい！」

一瞬真壁は気迫に押されて怯んだが、それでも体勢を立て直してゴモラに対峙した。

「これでも食らえ！スパイダーショットを御見舞いするぜ！」

それはまるで少年の日の真壁を見るような錯覚。真壁は右手を胸元に、左手を少し前を出し、握りこぶしを二つ作る。それは科学特捜隊の光線銃、スパイダーショットを持つ構えだった。

下駄の男が再び息を、ふっとソフビ人形に吹きかける。ゴモラの太い尻尾がもぎれて砂の上をのた打ち回るかのように転がった。

「うわー、すごいやー」子供たちから歓声が上がる。

「これはいかん」

下駄の男はゴモラを砂の中に埋め込んだ。ゴモラは逃げた。

「さあー、いよいよ仕上げじゃぞい！」

下駄の男は砂の上に転がった尻尾をレジ袋にしまい、倒れたウルトラマンの人形をタクマ君に渡した。

「ゴモラが現れたら。止めを刺すんじゃ。スペシウム光線、どうやるかわかるか？」

そういいながら、下駄の男は右手と左手を体の前で交差させ十字を作った。

「この構えじゃ。いいか、今度は子供たちみんなでゴモラをやっつけるぞ」

さっきまで怖がっていた子供たちはすっかり気を取り直していた。その瞳はまさにヒーローの

強く輝く瞳、そのものであった。

ゴモラVSタクマ後編

果たしてこれで、本当に終わるのかという疑問を抱きながらも、後藤は下駄の男のやることを見守るしかなかった。鳴門刑事はどう考えているだろうか。やはり、少しは説明をしたほうがいいのか。後藤は自問自答を繰り返していたが、真壁の様子が刻々と回復に向かっているようだし——まずはこの茶番ともいえる儀式を最後まで見届けるしかないか——と、そう腹をくくった。

「いいか、坊主、次にゴモラが現れたら、ゴモラの角めがけてチョップじゃ」

下駄の男の言葉に促されて、タクマ君はソフビのウルトラマン人形の腕を前に上げ、ゴモラの出現に備える。真壁も子供たちと同じように身構えている。下駄の男は砂の中に手を突っ込み、ゴモラが砂の中から頭を出す。

「グガァァウオォォ！」

ゴモラが雄たけびを上げて砂の中から這い出てくる。下駄の男が操り、声を出しているにもかかわらず、本物の怪獣が凶悪な牙をむき出しにして暴れだしているような錯覚に陥る。いや、錯覚ではないのかもしれない。この男ならそんなこともやってのける。後藤にはそう思えて仕方がなかった。

「ウルトラチョップじゃ！」

下駄の男の声に、タクマ君は我を取り戻す。ゴモラのあまりの迫力に目を奪われていたようだ。「エイ！ウルトラチョップ！」タクマ君の操るウルトラマンの右腕がゴモラの頭に数回当たる。ゴモラは苦しそうな様子で怯むとゴモラの鼻先の角と左の角がちぎれ落ちた。

「やったー！」子供たちの歓声が上がる。

「よし、止めじゃ。みんなでスペシウム光線じゃ！」下駄の男が叫ぶ。

「スペシウム光線！」タクマ君、ユウキ君、ミィちゃんそしてほかの子供たちが右の胸の前で十字を構えてゴモラめがけて叫んだ。

「パパッ！」閃光が走る。

「ひあああ」少しはなれたところから様子を伺っていた母親の何人かも反応する。確かに何か光った。ゴモラはすっかり精気……いや、邪気を失い、右側に崩れるように横たわる。

「やったー、ゴモラを倒したぞー！」タクマ君が歓喜の勝どきを上げる。

「パチパチパチ」子供たちの拍手。

「坊主よくやったな」

ゴモラの屍骸——角と尻尾の取れたソフビ人形をレジ袋に入れると下駄の男は優しく、そして力強く子供たちの頭を撫でて回った。ふと、その不自然さに後藤が気付く。単に頭を撫でるといよりは、どうやら一人一人になにやら呪いをかけているような様子に見えた。

「消えた……やつら……みんな、どこかに行っちゃいやがった」

「真壁……」後藤は確信した。世の中にはこういうものもあるのかもしれない。いや、あったほうが、良いのかもしれない。

「ご、後藤さん、これっていったい、何なんでしょうね。真壁は回復したみたいですし、あの怪獣のソフビもウルトラ兄弟にやられる前と後じゃ、なんだか全然違う感じがするし、僕等の目の前で、いったい何が起きたんでしょうか……」

「何も起きちゃいないさ！報告書に書けるようなことはな」

後藤は鳴門刑事の肩をぽんと叩くと真壁に歩み寄った。

「真壁、よかったら話してくれるか？お前さんが見たもの、お前さんが感じたものを、そして——」

「ワタシがやりました。全部ワタシのせいなんです。でも、ワタシはただ、雨の日に傘を持って出かけただけなんです。ただ、それだけなんです」

「さてと、ここに長居は無用じゃ。これから笠井稲荷にいくぞい。話は道々すればよいじゃろう」

下駄の男は懐から何かを取り出し、砂場にまいた。白い粉……塩のようだ。

「わっぱどもの遊び場所に変なものがつかんようにしておかんとな。さてまいるぞい！」

鳴門刑事が母親に挨拶をし終わると、後藤、鳴門刑事、真壁、そして尾上弥太郎と名乗る自称拝み屋——下駄の男の4人は西港公園を後にし、そこから2キロほど北にある笠井稲荷神社に向かった。陽はすっかり傾き、街は赤く染まっていた。

後始末

「おい、大丈夫か？」

「あー、畜生、まだビリビリした感じがするぜ。なんなんだよ、あのジジィ」

そこは笠井町の中心地から車で15分ほど行ったところで、大きな工場や倉庫が並ぶ工業地域。誰も使っていないような空き倉庫や廃工場が少なからずある。そういう場所は都会の死角であり、闇に生きる者が暗躍する場所でもある。

「どうします？このままじゃ俺たち、ヤバイくありません？」

「知るかよ。大体話が全然違うじゃねえーか。本来なら、畳み掛けるところなのに、一旦待機しろだなんて、上のほうでなんか手違いがあったんじゃないか？」

「まさか、そんで俺たちを口封じするためにここに呼んだとかないッスよねえ」

「おいおい、そんなのテレビドラマの見すぎだ。アメリカとか中国とかならまだしも、ここは日本だぜ。そんなことできっこねえって」

2台のバイクのうち1台はあちこち傷だらけになっている。真壁と下駄の男を襲った際に失敗し、転倒したのである。『40代くらいのサラリーマンとそれに付きまとう老人、これを襲撃し、引ったくり強盗を装って、場合によっては死亡事故になっても構わない』というのが指示内容であり、見返りとしての金銭の授受はその事が確認され次第と言うことだった。どうということはない。いつもの仕事である。

「あれー、おかしいですね。携帯、つながらないっすね」

「ジジィにスタンガンかまされたからな。携帯、いかれちまってんだろう」

リーダー格の男が自分の携帯を確認する。

「あれ、さっきまで繋がってなのになあ、ここって電波悪いのか……」

「橘さん、マジ、これってヤバくないっすか？」

「ふん、ビビってんじゃないあねえよ。携帯がつながらんえくらいで！」

嘘であった、明らかに虚勢であり、大丈夫だという態度をとりながらも、橘という男は、いざとなれば、どんくさい相棒を置き去りにして、その場を逃げるつもりでいた。

「一応、エンジンは入れて置けよ」

そう言って橘はエンジンをかけた。

「ブルルルン」

しかし、エンジン音は一つしか鳴り響かない。おかしいと思い、橘は声をかけた。

「おい、マツダ、エンジンかけておけって、おい、きいてんのか！」

マツダと呼ばれた大男は、微動だにしない。いや、できないのであった。

「あ、あああ！」

もし、橘がエンジンをかけるのがもう少し遅かったら、マツダの最後の声を聞いたかもしれない。橘がエンジンをかけた瞬間を見計らうようなタイミングで、一発の銃弾がマツダの分厚い胸を貫いていたのである。マツダは、「ヤベーじゃん、これ、マジかよ」と胸元の急激な熱さと痛みで溺れながら口を動かした。が、その言葉はマツダが思ったようには口からは出なかったのである。

「パスン、パスン」

マツダの額と喉元に弾丸が滑り込み、マツダの巨体は地面に崩れ落ちた。

「畜生ー！」

橘は、思い切りアクセルを吹かし、バイクを走らせた。が、走ったのはバイクだけだった。橘の肩口に弾丸が当たり、ハンドルから手が離れ、橘の身体は地面に引き倒された。

「いっ、痛てー、痛てーよー」

地面でのたうち回る橘。ほんの数メートルのところで橘のバイクが横転する。橘はなんとかバイクに乗ろうと、もがきながらバイクのところまで駆け寄ろうとする。

「俺の単車が、俺の単車が……」

橘にとって、バイクは唯一信頼できるものだったと、橘をよく知る人物は口をそろえてそう語る。だが、橘の身元を後藤が調べ、そのことを耳にするのは、随分、後のことである。

誰もいない工場跡に主をなくしたバイクのエンジン音が、むなしく響いていた。

「なんで、ウルトラマンなんですか？」

笠井稲荷に向かう道すがら、後藤、鳴門刑事、真壁、そして下駄の男の一行は、5分ほど無言で歩き続けた。

カラン、コロン、カラン、コロン

下駄の音が鳴り響く。どう見ても滑稽さだけが際立つ。しかし、この日鳴門刑事の身に起きたことは、例え警察という特殊な職場であることを差し引いても荒唐無稽なことばかりである。聞きたいことは山ほどあったが、結局鳴門刑事は、後藤が歩きタバコを吸うことを注意するのを忘れるくらいに頭の中が混乱していたし、いろいろ考えたが、一番自分に引き寄せた質問をぶつけるしかなかった。

「たとえば、ウルトラマン以外のヒーローじゃダメなんですか？いえ、そればかりか、なんでマン、セブン、ジャック指定なんです？」下駄の男は鳴門刑事の方を振り向かずに、レジ袋をぶら下げたまま両腕を胸の前で組むと「さーて、なんでじゃったかのお」と小首をかしげた。

「まさか、なんとなくとか、適当とか、好きだからとか、そんなんじゃないと思いますがね」後藤が鳴門刑事の問いかけに相乗りする。後藤にはウルトラマンだろうがセブンだろうがどうでもいいと思えたが、しかし、言われてみれば、指定するからには理由がありそうだと思った。

「おー、そうじゃった、そうじゃった。真壁よ、お主、エースまでは全部見たんじゃろ？」下駄の男は、真壁の方に振り向いた。その顔は老人というよりは、いたずら好きな少年のそれだった。

「はぁ、確かに……でもなんでそんなことわかるんです？ワタシがあのお店であなたを見たのは、あの夜……あの一回だけだったはずですが……」真壁はすでに普通の受け答えが出来るようだ。

「ワシはなんでもお見通しじゃよ」今度は後藤に向かってニヤニヤといやらしい笑みを浮かべて見せた。

「は一、そういうことか……おっさん、レンタルショップのデータを盗み見しやがったな」

「え、盗み見ってそんなこと……」

「できますよ。あの店、個人経営でこの沿線に4～5店舗、オンラインで結んでやってるみたいだから、セキュリティはかなりゆるいんじゃないんですかね。ちょっと腕がある技術者なら、それほど苦労しないで覗き見くらいは出来るでしょう」

「鳴門ー！ このおっさんがどうやって真壁の情報や加藤、三河、山本の情報を得たのか、一切詮索無用だ。なんだったら、俺が教えてってことで納得しろ」

「後藤さん！そんなぁ！」

「鳴門勘違いするなよ。これは命令じゃない！お願いだよ」

「ご、後藤さん……命令ならともかく、お願いなら聞かないわけに行きませんね」

「あっ、あっ、あっ、お主ら、いいコンビじゃのー」

後藤も鳴門刑事も何か文句を言おうと考えたが、何一つ言い返せないと気づくと、無性に腹が立った。

「で、真壁がエースまでは知っていたということと、どういう関係があるんですか？」

「鳴門刑事、警察学校では心理学とか教えたりするののお？」

「はあ、まあ基礎的なところから犯罪心理学が中心になりますが」

「基礎は大事じゃよ、基礎は……人に暗示をかけるためには、ステレオタイプのアイテムが有効だとワシは思うんじゃがのお」

「ええ、確かに有効です。固定観念を利用するのは詐欺や靈感商法の常套手段です」

「だからじゃよ。今回の場合は、心理学の面からもワシの分野の面からも、誰でも悪役とわかるアイコンは有効なアイテムというわけじゃ」

「そちらの分野のことはわかりませんが、なるほど、真壁が回復した経緯には、自分に何かを取り付いたという思い込みを、こういう形で治療したというわけですか」

鳴門刑事は、理屈を積み重ねて、事態の全体をつかもうと努力をしていた。一方後藤は、直感的な違和感や不自然さから来る疑問、そしてこの件に関わるそれぞれの人間の思惑を合わせて、多面的に事態を把握しようとしている。時にまったく違う結果が導き出されることがあるが、後藤には鳴門刑事の進言はとても貴重なものだった。後藤には正論を導き出しても、正論を正論と位置づける自信がない。後藤は自分が王道から外れた人間であることをよく知っていた。

見た目にも滑稽な4人は、聞く耳を疑うような滑稽な話をしながら滑稽な目的地に向かって歩いてゆく。夕日は立ち並ぶビルの陰に隠れてしまっている。西の空が赤々として血に染まったように見えたのは、後藤の錯覚であり、真壁の憂鬱であったが、同じ頃、別の場所でこの事件に関わる血が流されたことを、後藤はまだ、知らなかった。

赤く染まる街

「な、なんで、こんなことを……」

橘は死を覚悟していた。ほんの数分前までは、『明日』という日が来ることになんの疑いもなかった。自分は、この街、この笠井町でのし上がり、今まで自分をゴミのように扱ってきた連中をいつか見返してやりたかった。バイクが好きだった。ただひたすらにバイクが好きで、思いっきり街の中を、アクセル全開にしてぶっ飛ばしたい。そう思って、そうやっていたら、いつの間にか社会のあらゆるものが自分の敵となっていた。教師も、親も、仲間までも……それに抗う術を暴力に求めたことへの悔いは、何かの拍子にどこかへ捨ててしまっていた。

「良かったよ。キミには謝らなきゃいけないと思っていた。それもかなわないかと思ったが、これも神の思し召しだ。私は神に感謝する。そしてすまないね。キミ、キミはちっとも悪くない。どうかワタシを許して欲しい。キミへの償いに、ワタシからのプレゼントだよ。どうしてこんなことになったのか、キミがあので恨むべき人の名前を教えてあげようか？」

サイレンサーを装着した銃を持った男は橘のそばを慎重に歩きながら、巨漢の男が確実に死んでいる確認をした。マツダは白目をむき、口を大きく開けたまま夕日に真っ赤に染まった空を睨んでいた。

「聞きたい？聞きたいかい？」

「武井さんか」

「ちがう、ちがう、武井は何も知らないよ。それにこんなことはね、上の許可なしにはできないことだよ」

「じゃ、じゃあ、組長自らが？」

「いやいや、もっと上さ、あー、そうそう、時期にね、組長にも合えるからさあ。組長もヘマやったね。クッククックッ……まあ、組長のヘマの責任をキミが取る筋合いはないよね」

「だ、誰だよ、いったい何者なんだ」

「うーん、やっぱ教えない」

シュッポ、シュッポ

乾いた音が2回

んがああ

嗚咽が1回

コツ、コツ、コツ、コツ

足音が遠のいていく。そして数人の足音、大きな2つの袋を担ぎ、車のトランクに押し込む。車は何事もなかったようにそこから立ち去り、大量の血痕と2台のバイクだけが残された。

車の中。携帯のボタンを押す音数回……呼び出し音

「あー、どうも、ワタシです。はい、順次滞りなく。えー、指示通り痕跡は残しました。これから港のほうへ、はい、あそこに沈めれば、まず発見は難しいかと……えー、そっちのほうは夜になってから、えー、動きは掴んでおります。協力者も得てますので、はい、信用はできます。今回の件、ある程度予測していたようなので、今の組長よりは、頭の切れる男です。多少、切れすぎることもあるかもしれませんが……えー、監視は別途、はい、はい、では、後ほどまたご報告に上がります」

ピッ 電子音。携帯切れる。

パンッ 携帯を閉じる音。

「ふー、まったく、明日はわが身、開ける扉を間違えると、生きては外に出られない。組のトップといえども、あの方にとっては単なる捨て駒。おっかねえ、おっかねえ」

車は夕暮れていく街の中に溶け込み、闇の中へと向かって消えていった。街はいよいよ真っ赤に染まっていった。

「さて、ついで。ここからのことは一切ワシに従ってもらうが、依存はないのう？」

今更、何を、という言葉を読み込みながら、後藤と鳴門刑事はうなずき、真壁もそれに従った。笠井稲荷——笠井駅から北へ徒歩で30分ほどのところにある神社は、古くからこの土地にあるが、その存在を知るものは意外に少ない。笠井町は、もともと新興住宅街として、昭和40年代終わりから50年代にかけて駅の南側……埋立地に巨大な団地が建設され、発展した町である。駅の南側には歴史ある神社などは当然似なく、また北側は、中小零細工場が立ち並ぶ町であったが、それも次々とマンションに変わっていった。古くからこの地に住むものは少なく、寺や神社というものはほとんどない。

「この神社はのお、これで結構なもんなんじゃよ。無礼があつてはバチが当たるといふものよ。人知れずこの笠井の町を治めているのじゃ。農業、漁業、商業の神様じゃ。そのおかげでこの町はこれだけ発展しておる」

「つまり商売の神様の力を借りるといふわけですか……そんなんで大丈夫なんですか？」

「罰当たりなものいいをするでない！機嫌をそこねたら困るのはお主らぞい！」

その佇まいは、どこにでもある普通の神社である。隣には大きな公園があり、子供たちの遊ぶ声が聞こえてくる。後藤たちは下駄の男に従い、鳥居で挨拶をしてから神社の中に入る。正しい作法で参拝したのは、いつのことだったか……カラスが不気味に騒ぎたて風に木々がざわめく。全く、絵に描いたような不気味な空気が流れ出す。

「やはり、あまり歓迎はされておらん。招かれざる客を連れておるからのお」

下駄の男は意地悪そうに他の3人の顔を眺めた。いつものいららしい笑みを浮かべながら…
…「冗談じゃよ。神様というのは、ワシら人間一人一人のことを気にするほど人間社会に関心は持っちゃらんわい」

三人は顔を見合わせた。笑う気にも怒る気にもなれなかった。間違いなく、鳥居をくぐってから何か雰囲気が違う。後藤は初めてここに来たわけではないが、とてつもない違和感を感じていた。

「ご、後藤さん……」

「わかってる。なんてことはねえ。いつものことさ。いつだって俺たちは招かれざる客さ」

「そ、そうですね」

「さて、こっちじゃ、こっち、とっとと済ませないと日が暮れてしまうわい」

下駄の男は、手水舎で左手右手の順に清め、次に口をすすぎます。再び左手を清め、残った水で柄の部分を流した。3人がそれに従う。正中を避けて拝殿に向かう。しかし兵殿には入らずに、右に曲がった。煙が立っている。拝殿の横の細い道を通るとそこに巫女が立っており、火を焚

いていた。

「おー、おー、すまんのぉ、待たせたかのぉ」

「お待ちしておりました。いえ、さきほど準備が整ったばかりでございます。どうぞお遣いください。お炊き上げが終わりましたら、声をかけてください。では、私はあちらで人払いをしておりますので」巫女は静かに頭を下げ、下駄の男に微笑みかけると拝殿の方へ姿を消した。

「人払い……ですか？」

「いやなに、ワシは別に構わんのだが、それこそ、おぬしら、こんなところでふらふらしてるところを誰かに見られたくはあるまい。さて、はじめるかのぉ」

後藤の肩をポン！と叩くと下駄の男は焚き火の前にしゃがみ、レジ袋から三体の怪獣のソフビ人形、ベムスター、エレキング、ゴモラを取り出した。

「あ……ま、まだ、そこに、いるのか、あいつら」

真壁が口を開く。少し震えているようだ。

「あー、そうとも、そう簡単には、こいつらは払えはせんわい。だから、ここできっちりしておかんとあ、うん？なんじゃ？なんか納得いかんか？」

「それって、じゃあ、最初からここにすればよかったんじゃ……」

鳴門刑事がかみつく。

「ふむ……なるほど、たしかにそれも一理あるがのぉ、しかし、こういうことはやはり、慎重に慎重をかさねないといかん。それにアレにはちゃんとした意味があるんじゃ」

「差し支えなければでいいんですが、できたら、そのあたりもお話いただけると、こちらも目覚めが悪くなくていいんですがね」

後藤が鳴門刑事を援護する。

「そうじゃなあ、まあ、タネをばらしたところで、すぐにそれを真似できるものじゃないあらのお……手品と同じじゃ」

下駄の男は、とても楽しそうに笑いながら三人の顔を見上げた。

存在の確認

「魂とは、幽霊とか霊魂とか、そういうイメージが強いがのお、もっと哲学的で科学的な存在なんじゃよ」

下駄の男は、焚き火の中のまだ燃えていない破魔矢を手に取り、焼き残った御札や紙くずをかき回し、空気を入れて火の回りを強くした。パチッ、パチッと音がする。

「つまり、ボクらが見たものは全て現実の世界に存在すると……」

鳴門刑事は一步前に詰め寄る。「そんな馬鹿な事が……」と真壁が鳴門刑事の言葉をさえぎる。「……あるはずが、ない。あっても、ワタシは、信じない」

「ふん！それじゃよ、その『あっても信じない』というのがことの真理じゃ！」

下駄の男が吐き捨てる。

「あるような、ないようなという、曖昧な解釈ならばそれは障らない。障ることはほとんどないんじゃ。だがのお、お主のように、客観と主観をはっきりと使い分けるような輩の前では、かえってその存在を際立たせるんじゃよ。拘りといってもいい。それも無用の」

「わかんないなあ、どうにも、拝み屋のオッサンの言ってることは、矛盾してないか、そのお……無用の拘りは、霊魂とか、幽霊とか、そういうものを否定しているわけだから——」

「否定？ならばなぜ、この男は、傘を持って出かけたんじゃ？雨の急に降りそうな晴れた日に？」

「そ、それは、それは……」

真壁が言葉を詰ませる。

「魂など存在しない。幽霊など、呪いなど、そんなものは存在しないと思いながらも、そのくせ、その力による効果を観測し、考察し、利用した。そうであろう。お主はこうなるとわかって、あの傘をもって出かけたんじゃ」

真壁はヒザから崩れ、両手を地面につけて、頭を垂れた。後藤と鳴門刑事はそれを見守るしかなかった。

「魂というのは、魂そのものだけでは存在できん。まず、最初は体が必要だ。おぬしらのようにな。しかし肉体はいつか滅びる。魂がそれを認識していれば、肉体と同時に魂も滅びる。しかしなあ、魂が肉体が滅びたことを認識できない状態、そして、その魂の存在を客観的に観察するものの存在。その二つの条件がそろわなければ、今日見たような現象は何一つ起きやせん！」

「あー、それってつまり、アイデンティティの確立ってことですか、自己認識と社会的客観性での存在証明みたいな」

「鳴門刑事、お主はなかなか勉強しとるな。関心、関心」

下駄の男は明らかに後藤に対するあてつけで鳴門刑事を褒めた。それがわかるだけに、後藤も、そして鳴門刑事も無関心を装った。

「じゃ、だとして——だとしてですよ、さっきの公園でのあれはいったいどういう意味が？」

鳴門刑事にはもっと聞きたい事が山ほどあったが一つ一つ手順を追わなければ、この老人は話をはぐらかすだけだと考えた。そしてその判断は正しかった。

「うん、そうじゃな。悪いことをしている人間に、お前は悪人だ。悪いことはやめろといって、犯罪がなくなるなら、お主ら、職を失うことになるじゃろう？そういう輩には、子供の一言が一番効くんじゃよ。誰しも純粋な少年時代はある。悪者と言われて傷つかない子供はおらんじゃろう。わっばに恐れられ、忌み嫌われれば、自分がどういう存在か認識するというものよ。そして、ヒーローに退治される」

「自分の中の凶悪な部分を純粋な子供の持つ客観性で認識させ、それをステレオタイプのヒーローに退治させることによって、邪悪な部分——凶悪なアイデンティティを崩壊させる。理屈ではわかりますが、そもそも信じられないというか……」

考え込む鳴門刑事を見ている下駄の男の顔は、さながら自分の生徒にいやらしい宿題を出すときの教師の顔そのものだった。

「なんだって、あいつら、なんだって、あんなやつらが……」

真壁は再び困惑の中に彷徨っていた。

仕上げ

「最初は……最初は本当に偶然だった」

真壁が語りだした。あの日のことを、あの夕立の日のことを……

「ラーメンを食べていたんだ。最初は気付かなかった。カウンターに座っているのがあの夜の男ってこと。ワタシは何度かあの傘を忘れそうになったが、決まって傘はワタシの手元に戻って来ていた。不思議だとは思ったが、理屈なんてどうでも良かった。その男が席を立て、外に出て、数分もしないうちに、ブレーキ音と悲鳴が聞こえてきた。ワタシは自分の傘がなくなっていること、そしてあの男が、あの日レンタルショップでみた、あんと見たあの男が、懲りもせず、また傘を盗んだんだ。」

鳴門刑事が手帳を取り出し、中から一枚の写真を真壁に見せた。

「そうだ。この男だよ。車に引かれて、見てすぐわかった。こりゃ助からないって……」

「山本 茂、22歳 無職、不良グループと暴力団の橋渡しのことをしていたらしい事が、最近わかりましたが、詳細はつかめていません」

後藤刑事がその写真を下駄の男に見せる。

「こいつが、つまり、あんの傘を盗んだ男で、真壁の傘も盗み、それでおまけに左螺曼蛇（サラマンダ）の12代目というわけですか？」

下駄の男は沈黙によって答えた。そして語った。

「自分がやったわけではない。悪いのは山本で、自分には責任はない。だが、原因と結果の過程に自分の傘があるのは明白。男の死に顔が目に焼きついて離れなかったのじゃろう。結果的にその強い思いが、魂を呼び寄せたんじゃ。不幸なことじゃ。山本にも、真壁にもそして……」

「そのあとの2人ですか？三河と加藤」

鳴門刑事が更に2人の写真を取り出した。

「不幸？不幸ってなんですか？あんなヤツらが、こうして社会にのさばっている。傘を盗むのは小さな犯罪です。だけど、それだけじゃないでしょう！ワタシは調べた。自分がしてしまったことを悔いて、それで、最初の男のことをいろいろと調べたよ。新聞に名前載ったからね。そうしたらすぐに出てきたよ。あの男がどんな非道な人間なのか……だけどそれすら、あんな男をあがめるような輩がこの世の中にいるってことも知った。だからワタシは、だから、ワタシは……なのに、なんで、なんでワタシがこんなめに、あんな連中に取り付かれなきゃならないんです！逆恨みもいいところだ！」

「妄想じゃ！そんなもの！死んだ人間が化けて出てくるなど、そう簡単にできんわい！主の妄想

が具現化しただけじゃ！主も気付いておるじゃろう！真壁直行よ！あれはお主自身の姿よ！」

真壁の顔色が変わる。興奮して大声を上げていたときとは、全く別人のように、力なく、その場にへたれ込む。

「真壁自身って、拝み屋のおっさん、それじゃ、それこそ何のための儀式だか」

「真の姿は真壁自身の妄想よ！じゃが、もはやそれだけではない。妄想に人の命を奪うことなどできんよ。真壁の妄想を依代に、本物の魂が、そう邪心に汚れた魂が集まり、加藤、三河、山本の三人の形を形成したんじゃ。加藤であって、加藤ではない。巷に彷徨う邪心、邪念の塊よ」

「それって、結局どういうことなんですか？そんなものが、あるとして……人の命を奪うことなんかあるんですか？」

「命というよりは魂じゃよ。真壁のアイデンティティを崩壊させ、別の人格が形成される。悪魔憑きとかキツネ憑きといったほうがはやいかもしれん」

「つまり、真壁であって、真壁じゃないものになるところだったと？」

後藤の問いに、下駄の男は再び沈黙によって答えた。

「で、その邪な魂を無邪気な子供の心で弱らせて、あとはここで火炙りにすれば、すべて解決というわけじゃよ」

そういうと、下駄の男は無造作に怪獣のソフビ人形を火の中に放り投げた。

ポー！

一瞬大きな炎が上がる。青白く、不気味な炎は、まるで魂の断末魔のような音を立てながら揺らぎ、そして小さくなっていった。下駄の男は口もとに手を当ててなになにやらブツブツと呪文のようなものを唱えているが聞き取れない。日本語ではないような気もする。

ポー！

再び炎が大きく立ち上り、下駄の男めがけてありえない方向に立ち上がる。後藤は一瞬身構えたが、それより早く……と言うよりは、炎が立ち上がるよりも先に下駄の男は、レジ袋の中から一体のソフビ人形を取り出し、構えていた。

「あ、アレはタイラント！」

鳴門刑事の口から、そう聞こえたように後藤は思った。真壁は身を屈め、すっかり怯え切っていた。

「フン！」

下駄の男は、大きな気合のこもった息を吐き、立ち上がる炎を迎え撃った。ありえないことだが、邪悪な炎は下駄の男が右手に構えるソフビ人形に吸い込まれていくように見えた。下駄の男の左手は、何か特殊な構えをしている。拳法なのか、印を切っているのか、後藤にはわからなかった。

「フー、やれやれ、これで終わりじゃ。さて、帰るとするかの」

下駄の男はタイラントのソフビを乱暴にレジ袋にしまうと、渾身の笑顔で一同を見回した。3人はあまりのことに、しばらく声を出すことも、動くこともできなかった。日はすっかり傾き、夜になろうとしていた。

帰り道

下駄の男は、拝殿に寄り、なにやらしばらく話し込んでいた。どうやらただの談笑のようだが、よほど親しいのか、或いはここの関係者なのか。若い宮司は、下駄の男に頭が上がらない様子だった。

「これで、すべて終わりなんですか？後藤さん」

鳴門刑事は、どこか不満げである。それは後藤も同じだ。

「どうかな。ここを出てからが、俺たちの本当の仕事だ。真実なんてもんはどうでもいい。一番大事なものは……」

「この町に住む人の生命と財産の安全」

「そういうことだ。どうやら真壁は命を狙われたようだ。俺たちがけん制したから、たぶんこれ以上手出しはしないと思うが、それにしてもどうにも気に入らない」

「『違和感』ってやつですね。それは僕も感じてます。なんか、こう、もっと裏にどす黒いものが……」

「待たせたのう。じゃあ帰るとするかの」

下駄の男が鳴門刑事の言葉をさえぎった。

「余計な詮索は無用じゃよ。ここまではワシの仕事じゃが、ここから先はお主に働いてもらわなきゃならん。ワシらを襲った連中に心当たりがある。まずは真壁の安全を確保するために、どうすればいいかの」

「それなら、もう、問題はないかと思えます。あのタイミングであれば、連絡が間に合わなかったで済むでしょうが、ここから先は、そうはいきません。それに……」

「うん、なんじゃい？」

「いえねえ、拝み屋のオッサンには、取って置きの手立てがあるんじゃないかなと、そう思えましてね」

「フン！」

下駄の男は面白くないという表情をしながら、歩き出した。後藤、鳴門刑事、真壁がそれに続く。真壁は所在なさげというよりは申し訳なさそうに3人の後を追った。

「傘を貰い受けるぞい。真壁、異存はないな」

「あ、あんなもの、もう、持って行ってください。でないと、ワタシは……」

「言うておくが、それで全て元通りにはならん。覆水は盆には返らん。しかし、そのことを嘆くよりも、次にこぼさない手立てを考えることじゃ」

「めずらしく、いいこと言うじゃないですか、拝み屋のオッサン」

下駄の男が何かを思い出したように、立ち止まり振り返った。

「おい、後藤、ところでワシは、いつから拝み屋のオッサンになったんじゃ？拝み屋はいいが、

オッサンはやめんかい、この罰当たりが」

思わず後藤と鳴門刑事は顔を見合わせた。そして今日、久しぶりに笑った。それに釣られるように真壁も笑った。下駄の男がだけが、不機嫌そうに三人を睨んでいた。

「フン！まあ、いいわい。ワシもいろんな通り名があって、面倒に思っていたところじゃ。若い子に拝み屋のおじちゃまと、言われるのも悪くないのお」

下駄の男は、再び歩き出した。

「そうか、どうも、おかしいと思ったんだが、そういうことですか」

今度は後藤が立ち止まった。

「いや、なんでこんな回りくどいことをするのかと思ってたんですがね……」

「な、なんですか、後藤さん」

「オッサン、あんた、本当に何者なんですか？笠井町の防犯カメラの位置を完全に把握してるわけですか」

「え？ただ人目を避けていたというわけじゃないんですか」

下駄の男はすっかり機嫌を直していた。

「細かいことを気にしすぎじゃ、たとえそうだとっても、お主らになんらデメリットがあるわけじゃないだろう？むしろ感謝して欲しいものじゃ」

「それに、さっきから聞こうと思ってたんだが、あと一体の人形にどんな意味があるんです？」

「そうそう、それを僕も聞きたかったんです。あれはタイラントとって、ウルトラマンタロウに出てきた怪獣で——確か、怪獣の霊を集めて作ったとかいう設定じゃ……」

「おー、よく知ってるのお。その通りじゃ。まあ、こいつはほれ、ワシの報告書みたいなもんじゃ」

「報告書？」

「そうじゃ、こいつをクライアントに治めて、それでワシの仕事は終わりじゃ」

一瞬後藤の脳裏におぞましい光景が浮かんだ。ついさっき、真壁の部屋で見たあの化物が、もしかしたらあの炎の中から抽出され、あのソフビ人形に納められている。そしてそれを受け取る輩とは、きっとまともな人間じゃないと、そして、そのような人間が、この町にいないことを願うしかなかった。

街を離れる

「では、これを、お願いします。でも、大丈夫ですか、この傘は……」

真壁は下駄の男に傘を渡した。愛着のある傘だが、未練はなかった。しかし他人にこの傘を託すのは、たとえそれが下駄の男であろうと心配である。なんと云っても、この傘には不思議な力が宿っているのだから。

「ふむ、心配はいらん。わしを誰だと思っちょる」

下駄の男は、傘を受け取ると、その場で傘を開いた。傘の中心部分、骨と柄が集まる一点にひとさし指を滑らせ、くるくると小さく回した——まるでトンボを捕まえるときのように。するとその指先に黒い、糸のようなものが巻きついている。髪の毛——それはあの日、真壁の頭髪から引き抜いた一本の髪の毛であった。下駄の男は指先にふっと、息を吹きかける。髪の毛はどこかに飛んでいき、所在がわからなくなってしまった。真壁の目には、空中に溶けていってしまったように見えた。

「これで終わりじゃ。あとはお主次第じゃよ」

下駄の男は、真壁の肩に手を置いて真壁を見つめた。肩に置いた手は力強く、眼光は鋭い。「わかりました。この部屋はもう、引き払おうと思います。この街を、東京を出ようかと思えます。」

「そうだな。いい結論じゃ。後藤よ、かまわんな」

「え、ええ、別に具体的な容疑者というわけではありませんし、連中も東京を出てまで、この件は追わないでしょう」

「ご、後藤さん、いいんですか？」

「鳴門、どう考えたって、真壁の名前が出るような報告書はかけないだろう。それに二人を襲った連中だって、もう手出しをしないだろうし、それに……」

「なんです？後藤さん」

「い、いや、なんでもない、少しばかり、考えすぎかもしれんが、あの二人は別件でも十分に引っ張れるだろう？」

「まあ、それはそうですが……」

鳴門刑事は不満であった。この事件の真相が、明るみになる事がないのはわかる。しかし、頭でわかるからといって、感情や感覚がそれをゆるさないこともある。たぶん、後藤もそうに違いないのだ。が、自分よりもこういうことへの割りきりは後藤は早い。そしてむしろその事が、鳴門刑事を苛立たせているのかもしれない。

「よし、いくぞ。やはり気になることは先に片付けておかないとな」

「え？なんです？気になることって」

「もういちど白鷺組に行くぞ。署に戻るのはそれからだ。じゃあ、拝み屋のオッサン、世話になりました。いろいろと面白いものも見せていただいて、また、近々お会いすることもあるかもしれませんが、今日はこれで引き上げます」

下駄の男は、後藤に近づき、真壁にしたように後藤の肩に手をおいた。

「なかなか面白い男よ。後藤、また会う日も、そう遠くはないじゃろう。なにかワシに頼りたい事があれば、つぶやけばいい。すぐに駆けつけてやるわい」

「な、なんですか、それ、呟くって？」

「鳴門刑事、あとで主にメールをするから、それで後藤に教えてやってくれ」

「は？で、でも、僕のメールアドレスなんて」

「ワシを誰じゃと思ちよる。袴田元気じゃぞ！わしは少し、この場所に用事がある。さあ、とつとと行かんか！」

下駄の男は部屋から二人を追い出した。

「な、なんだ、『はかまだ げんき』って？まあ、いい、いくぞ。車拾うぞ」

「は、はい」

後藤と真壁刑事は、急いで真壁のマンションを出た。そして、大通りに出たところで車を拾う。不意に鳴門刑事が笑い出した。

「な、なんだよ鳴門？お前までおかしくなったのか？」

「い、いえね。後藤さん、あの老人は本当に食えないというか……『はかまだげんき』って、もしかしたら、ハッカー、まだ現役とか、そういうことじゃないかって」

「フン、拝み屋が！」

車は白鷺組の事務所があるビルに向かっていった。一方下駄の男は、真壁を連れて、部屋を出ていた。一階のロビー。

「わるいがお、管理人に話しかけてくれんか？部屋に誰か侵入した形跡があるとか何とか行って、部屋まで連れて行って、そう5分くらい足止めしてくれんか？」

「はあ、でも、なんで？」

「ちとな、防犯カメラの映像に細工をな」

「ちょ、ちょっとそれは……わ、わかりました。もしかしたら、これで」

「そうじゃ、これでお別れじゃ。主とはもう、二度と会うこともあるまい」

「そうですか。こういうとき、お礼を言うべきなのか、お詫びを言うべきなのか、ワシには……」

「礼は形のあるもので、詫びは誠意でするものじゃ。ワシは誠意でことに当たったわけでも、礼でもない。これは仕事じゃ。詫びも礼も不要じゃよ」

真壁はしばらく下駄の男を見つめ、そして頭を下げた。

「お疲れ様でした」

「うん、お疲れじゃな」

「では、失礼します」

「あー、失礼する」

真壁と下駄の男はそこで別れた。下駄の男は管理人室の中に入り、ビデオに細工をし、下駄の男が出入りした時間の映像を消去した。

その後真壁は、東京を離れ、地方勤務へ写った。以来、真壁は二度と下駄の男と会う事はなかった。なにも変わりのない生活を送り始めた真壁であったが、一つだけ、変わった事がある。

それは、ビニール傘を使うようになったことだ。

「武井はいるか。江戸川南署の後藤だ」

後藤と鳴門刑事は白鷺組の事務所の前にいた。

「お待ちください。すぐにお呼びします」

先ほどとは、明らかに対応が違う。それだけじゃなく、なにか様子がおかしい。

「どう思う？」

「なんか、あったみたいですね。どうも様子がおかしい気がします」

事務所の前には数台の車が止まっている。どうもあわただしい感じがする。やがて武井が現れた。

「後藤さん、どうも、実はちょっと、問題が起きておりまして……あー、ちょうどよかった、警察にご連絡しようかと思っていたところです」

「どういうことだ？なにがあった？」

「失礼」

武井は胸のポケットからタバコを取り出し、火をつけた。眉間に寄せた皺は厳しく、吐いた煙を疎ましく睨んでいた。

「組長が死にました」

「なに？」

「組長が死にました。自殺です。どうしましょう？」

「自殺？自殺だと！どういうことだ！」

武井が言うには、こういうことらしい。後藤の要請で武井が組長に電話したあと、20分位してから、組長は事務所にもどり、何本かの電話のあと、人払いをして、5分もしないうちに、銃声がし、中に飛び込むと組長の頭は吹っ飛んでいたということらしい。

「おい、その何本かの電話って、誰からだかわかるのか？」

「どうでしょう？事務所の通話記録で調べてください。まあ、それで足がつくような連絡で、こういうことになったとは、わたしには思えませんが」

「お前、予測していたのか？」

「まさか、後藤さん、いくらわたしでも、ここまで事態が急に進むとは……」

「早すぎた、とうだけで、概ね予測できたということか？」

「ヤクザもの言うことを真に受けちゃいけませんよ、後藤さん。ワシらは毎日タマの取り合いやってんですよ。カタギの連中とは違う。常にこうなる覚悟はしてるってだけです」

後藤は武井の言っていることは理解できるし、実際そうだと思う。しかし、どうも、何か隠し

ているような気がしてならなかった。だが、あまりにもそれが漠然としすぎていて、どうにも攻め手がなかった。

「まあ、いい、とにかく、現場を……いや、すまんが警察に連絡してくれるか？そのほうが動きやすい、それから……」

「ええ、今日、あなたがたがここに来たことは、必要がない限り、しゃべりません。そういうことでよろしいですか？」

「あー、片付けたいものがいろいろあるなら、いまのうちやっておけ。そんなに時間はないと思うがな。で、武井、お前はこれからどうする？」

「まあ、どうするもこうするも、上次第ですが、多分白鷺組は解散。シマは、他の組に統合されるでしょう。おそらくは……」

「榊原のところか」

「えー、おそらく」

「榊原か……結局、一番得をしたのはやつか」

「まあ、あちらも3人も立て続けに不慮の事故で人材を失ってますからね」

「榊原の下につくか？」

「さあ、私と奴の間には、少々因縁がありましてねえ……私は、そういうことを、簡単に割り切れる男ではありませんから、では、やらなきゃならないことが山積みなのでこれで失礼します。今回の件、感謝はしてませんが、一応礼だけは、言っておきます。世話になりました」

鳴門刑事は黙ってことの成り行きを見守っていた。こういうとき、自分はどうしていいのかわからない。いや、じっくり考えれば、いいアイデアが出るかもしれない。後藤は判断が早い。しかも、こういうときの後藤の判断が間違っていたことはなかった。

「行くぞ、取り急ぎ署に戻って、体制を立て直す。お前は先に戻って、署長に報告しろ。途中で俺を見失ったと」

「ご、後藤さん！」

「心配するな。ちょっくら行って、アリバイを作ってくる。なあに。この街には俺に借りがある連中なんざ、五万といる……いや、正確には5人か」

「知りませんよ。どうなっても……じゃ、キヨのママの店で見失ったってことで良いですか？」

「あー、それでいい。あとは俺のほうで絵を描いておくから」

鳴門刑事は署に戻った。後藤は駅の繁華街にある「キヨ」という店に行き、口裏を合わせるように頼み込んだ。昼間は喫茶店、夜はカラオケバーをやっている店で、このあたりではかなりの古株だ。ちょっとした情報屋でもある。

「ママ、いつもすまないなあ。ところで、サラマンダーって昔あった暴走族が復活したって話、

あれは本当か？」

見た目は40歳くらいだが、実際にはもっと歳をとっている。後藤が始めてこの店を訪れたときから、ほとんど見た目が変わっていない。噂では、若い恋人をとっかえひっかえにしているらしいが、その噂が本人から出ているもので、他からは聞こえてこない。これはきっとガセだろうと、後藤は思っている。

「その話は聞いた事があるけど、以前のサラマンダーとは、どうも違うみたいね。表立ってはほとんど動いていないって話よ。だから、噂だけで、本当の所はわからないわね。前は、うちみたいな店にも、勘違いした連中が来たりしていたものだけど……」

「そうか……何かわかったら、連絡を、じゃ、あとはお願いします」

「えー、たまには飲みに来てね」

店を後にする。後藤の携帯に連絡が入る。署からだった。

「わかりました。現場に急行します」

翌日の新聞に小さな記事が載る。

『笠井町の暴力団幹部、拳銃で自殺』

当然に銃刀法違反で捜査が入り、事実上白鷺組は消滅した。様々な捜査が行われたが、それ以上、何ひとつ事件の証拠になるようなものは出てこなかった。『謎の死』ではあるが、自殺ということは疑いようもなかった。

「後藤さん、これはやはり、あの事件に関係が……」

「わからん」

「だって、二人の証言によれば」

「二人？だれだそれ」

「あの、ハッカージジイと真壁ですよ」

「存在しないもの、関わりのない者の話が、なんでここに出てくるんだ？」

「そ、そんなあ」

笠井町の南、繁華街からはだいぶ離れたところの工業地帯。廃工場になったところに2台のバイクと二人の男の血痕が発見されたのは、あの日から1週間たってからのことである。二人が現場に訪れたのは、そのバイクの持ち主が、どうやらサラマンダーと関係があるのではないかと、キヨのママの情報からであった。

「二人を襲うように命令されたが、途中でそれが変更になった。だが、その情報が届くよりも、先に二人を襲い、その後、始末のために二人はバラされ、命令をした組長が自殺」

「鳴門、それには少し無理があるな」

「なんでです？」

「二人をバラすまでにはいいが、なんで組長が自殺をしなきゃならん？」

「そ、そうですね。だとすると他に黒幕がいてとか、そういうことなんですか？」

「ふん！こんな街に黒幕とか、影の支配者とか、いると思うか？」

「それは、そうですけど、じゃあなんで」

「わからん、だからわからんと言っている。もっとわからんのは、ドラゴンスケールだ」

「メンバーらしき人物と接触して、リーダーらしき人物が、最近行方がわからないっていう……」

「しかも、その親の反応、あれは絶対になにか隠しているに違いない」

この現場に来る前に、後藤と鳴門刑事は解散したはずのドラゴンスケールが最近復活したという情報を調べていた。確かに、そういうことはあったようなのだが、これとって活動をしているわけでもなく、それでもメンバーのうち頭をとっていたという『橘 裕二』という男を探り当てた。笠井町で花屋を営む両親の話では、もう何日も連絡がないという。捜査願いを出すかと聞くと、かたくなに拒んだ。いつものことで、まわりに迷惑をかけているので、申し訳ないというのだ。それはわかる。しかし……

「脅されているのか……」

後藤は、この事件の闇が、想像以上に深いことを思い知らされた。だが、後藤が動けるようなことは何一つなかった。おかしいからといって、なんでも捜査できるものではない。警察の領分

ではあるが、それがすべて後藤の領分というわけでもない。

後藤と鳴門刑事が帰った後……

「あなた、本当にこれで、良かったのかしら？」

「仕方がないさ、裕二の命がかかっているんだ」

「でも、本当にあの子は無事にいるんですか？」

「でも、信じるしか、信じるしかないだろう、あんなものを見せられては……」

橘裕二の母親は、堪えられなくなり、部屋の奥へ飛び込んだ。嗚咽が漏れる。父親は必死で耐えていた。息子はもう、死んでいるかもしれない。だが……

5日ほど前、店を開けようとシャッターを開けると、そこに小包が置いてあった。宛名のない小包には、宅配便の「なまもの」のシールが貼られていた。橘裕二の父親がその小包を開ける。包装紙、新聞紙、そして小さな箱。中には小さなビニール袋になにかが入っている。良く見るとそれは切断された人間の指であり、その指には見覚えのある指輪が……間違いなく、それは息子、裕二の指だった。

箱の中には一枚のメモ書きがはいついて、こう書かれていた。

『息子の命が惜しければ、他言無用、さもなくば今度は息子の首が家の前にさらされることになる』

カラン、コロン、カラン、コロン……

夜の街に下駄の音が響く。その音はあるビルの中に消えていく。

「お待ちしておりました。どうぞこちらに」

美しい、若い男がひとり、下駄の男を部屋の奥へ案内する。

「失礼致します。お客様を御連れしました」

小さなノックの後に、美しい、若い男は静かにドアを開ける。なんともいえない圧迫感が、部屋の中からあふれ出る。

「終わったぞい」

部屋に入るなり、下駄の男が声を上げる。その越えは老いてなお闊達であり、部屋の淀んだ空気を一瞬振り払った。

「すまない。こちらで手違いが合ったようで、すこし迷惑をかけたようじゃな」

「いやいや、ちょっとした運動になった。かすり傷一つ負っておらんわい」

「それは良かった。で、首尾はどうじゃ」

「フン、それよりも2～3、聴きたい事があるんじゃがな」

「聞きたいこと？さて、どんなことかのお、わしの、すぐに答えられることならいいんじゃがな」

しわがれた声の主は、下駄の男とは正反対の声の質をしていた。しわがれた声の主の放つ波動は、話す相手を圧倒するような威圧感、それになんとも言えないいやらしい視線にさらされる。普通の人間であれば、吐き気を催すようなプレッシャーだ。

「依頼のとおり、事件は解決じゃ。ことの真相を知りたいか？」

「いや、その必要はない。お主が解決したというのなら、そうなのじゃろう。なにか、証拠の品でもあれば、それでいい」

「ふん、どうせそう言うと思っての。ほれ、これじゃい！」

下駄の男はレジ袋から何かを取り出した。それは怪獣の人形のようなだった。

「ほう、それは？」

「触れてみるか」

「おー、触れてみるかのお」

下駄の男はゆっくりとしわがれた声の主に歩み寄り、手に持ったもの——ソフトビニールの人形を手渡した。

「ほー、ほー、なるほど、これはなんとも禍々しい。タイラントというのか、これは」

人形の足の裏には怪獣の名前が記述してある。普通の怪獣の人形とは明らかに違う雰囲気をもつそれは、まるで生きた怪獣のようであり、それは怪獣というよりは、悪魔のようであった。

「これはなかなか面白いものを見せたもらった。で、もう片方の手に持っている傘には何か意味があるのか？」

「ふん、あざといのお。そうじゃ、あの三人は、この傘を盗んでのお、バチがあたり、その有様よ」

「おぬしの仕業か」

「まあ、そういうことになる」

「ちがうな」

「あー、ちがう」

「で、どうなのだ」

「だから、おわったと、言っておる」

恐ろしいほどの静寂。何一つ動かない、いや動けないような空気の中で、美しい、若い男は思わず窒息しそうになった。

「まあ、よい、で、聞きたいことというのは？」

「ワシを襲ったあの二人組み、どうした？」

「始末した。その監督責任者にも、しっかりと責任をとってもらった」

「惨いのお」

「ああ、惨いが、これがワシのやり方じゃ」

「で、これで終わりか？」

「あー、終わりだ」

「後藤の件も」

「あー、後藤か、後藤な……それはわからん」

「わからんか？」

「あー、まだ、わからん。あのもの次第じゃ」

「そういうことか」

「そういうことじゃ」

「頼みがある」

「なんだ、珍しいな」

「それをくれてやる代わりに、後藤の件、わしに預けてくれんか？」

「ほれたか？」

「ふん！馬鹿なことを！」

「まあ、いい、主が見込んだのであれば、それならば、よい。じゃが……」

「わかっておる。ルールはルールじゃ」

「そういうことじゃ」

「用事はそれだけじゃ」

下駄の男は、しわがれた声の主にくるりと背を向け、出口に向かって歩き出す。ドアのそばまで来ると振り向かずに呟いた。

「闇の力は増してきておる。本来、ここまでのことにはならん。人の世が乱れるのは勝手じゃ。ワシには興味のないことじゃ。じゃが、そんなものを増幅しようなどと、そういうことには、加担する気はない。今も、これからもじゃ」

「塔はまもなく完成する」

しわがれた声の主は、静かに答えた。

「誰にも止められんし、誰にも邪魔はさせん。たとえそれが……」

「失礼するよ」

下駄の男はドアを開けて出て行った。その後姿に向かってしわがれた声の主は小さな、小さな声で言った。

「かつての同士であろうともな」

闇の塔

下駄の男が去った後、入れ替わるようにひとりの男がしわがれた声の主を訪ねた。

「お呼びでしょうか？」

「7代目、すべて終わったよ」

「は？」

「7代目の抱えていた問題はすべてあの下駄の男が解決してくれた」

「そのことと、関係があるかどうかはわかりませんが、白鷺組の……」

「お前が引き継げ」

「は？わたしが、ですか？」

「回りくどいのは好かん。わかっておるだろうが、ワシの意に沿わんことはくれぐれもしないことだな」

「はい、肝に銘じて」

榊原はずっと気になっていた。しわがれた声の主が手に持っているもの。子供の頃に見た記憶がある。もしかしたら持っていたか？怪獣の人形。ソフトビニール製のそれは、しかし、とても作り物とは思えないほどに生々しく、しかも禍々しい。「それはなんですか？」と一瞬間こうとしたとき、しわがれた声の主が先に口を開いた。

「後藤からは眼を離すな」

「はい、すでにひとりつけております」

「ふん、手回しのいい」

「ただし、手は出すなよ。白鷺組も加賀組もワシにとっては取るに足らん。白鷺組のようになりたくなければ、今から言う3つのことを守るのじゃ」

「3つ」

「逆らうな、謀るな、侮るな」

しわがれた声の主は合図をして榊原に帰るように促した。不思議な感じがした。あの人形、以前どこかで見たか、或いは……不思議と知っているような感覚、懐かしい知り合いに出会って、でも、名前も誰なのかも思い出せないようなもどかしさを感じていた。

なぜだ？

余計なことを聞くことは、命に関わる。榊原が諦めて部屋を出ようとしたとき、不意に呼び止められた。

「あと、ひとつ。塔には関わるな。いいな」

榊原はしわがれた声の主に深々とお辞儀をして部屋を出た。帰りの車の中、窓の外は闇だが、空に突き刺さる鉄の塔が眼に入った。

なぜだ？

「なあ、東京スカイツリーは、いつ完成だ？」

「たしか、来年の12月とかだったと」

「そうか、来年か？」

「そういえば、最近あのあたりに妙な噂があるのご存知ですか？」

「妙な噂だと？」

「ええ、なんでも、あの塔の周りで最近妙なことが起きているようで——」

運転手の話に耳を傾けながら、榊原は塔を見ながら呟いた。

「逆らうな、謀るな、侮るな……そして、塔には関わるな、か」

下駄の男は、荒川の土手にいた。そこから東京スカイツリーは実に良く見える。闇に突き刺さる鋼鉄の塔は、いつになく禍々しくその姿をさらしている。

「このまま、何事もなく、というわけにはいかんじゃろうな。猫が一匹、下駄の男の足元で甘える。白と黒の模様が見事に左右に分かれた変わった猫である。

「団十郎、どうじゃ？今日も変わらないかのお」

団十郎と呼ばれた猫は、ゴロゴロと喉を鳴らしながら、額を下駄の男の足にこすり付けてくる。

「そうか、そうか。おぬしが見てくれるおかげで、ワシも安心して仕事ができる。今のところは大きな動きはないようじゃな。しかし、ワシのシキガミでは近づけないほど、禍々しい気を発しておる。どうにも、困ったことじゃ」

カラン、コロン、カラン、コロン……

誰もいない荒川の土手を、下駄の音が鳴り響く。

カラン、コロン、カラン、コロン……

そして、闇の中に消えてゆく。

終わり

あとがき

この作品は僕が書いたのではない。僕が生み出したキャラクターたちが勝手に動き出したのだ。

もとは『傘がない』という、短編ホラー、ちょっとした奇談だった。

ベースとなるお話は、私自身が雨の日にDVDを返却に行ってももの10秒で傘を盗まれた毛経験があること。そして、同じような経験を、とあるブロガーさんが中華料理店で経験したこと。さらにその方が体が大きい方で、大き目の傘を盗まれたこと、たかだかラーメン一杯を食べにきただけで、その大事な『自分の傘』を盗まれたことに、ひどく憤慨していたことが、きっかけになっています。

そして最初のプロットは、傘を盗まれた客がレンタルDVD店に立てこもり、店内の人質と、映画の内容などを折り混ぜながら暴れまくるというものでした。これは80年代のアメリカ映画「フォーリンダウン」であったり、日本のオムニバス映画『バカヤロー! 私、怒ってます』のようなものをイメージしていました。

ところが書き始めるうちに、不意に下駄の音が鳴り響いたのです。

下駄の男はどこからともなく僕の前に現れて、「フン！」と吐き捨てながら、前を通り過ぎていきました。僕は思わずその後姿を眼で追い、そして見てしまったのです！

妄想の暴走。プロットなどぶっ飛ばして、僕は『傘がない』を仕上げたのです。

がしかし……

彼は言いました。「本当に事故が起きたとして、しかもそれが、素行の悪い人間ばかりだとしてじゃ……そりゃあ、警察も黙ってないし、その筋の人たちも何かおかしい事が起きてると思うはずじゃ。それよりも何よりワシが黙っておれんわい！」

こうして下駄の男は、僕に無理やりにその後の世界を描かせたのです。いや、しかし、現実的なきっかけは、もっと現実的で、しかも不純なものでした。

僕の知り合いのプログラマーの方と飲んでいるときに、あるダジャレを言ったのです。それがあまりにもおかしかったので、ふと、下駄の男のキャラクターの肉付けに使えないかと考えたのです。

拝み屋＝陰陽師にとって名前とはとても大事なもので、自分の素性がバレることは、何がしらの呪詛にかけられるリスクがある。そのリスクを回避するために、普段からまともに名を名乗らないという設定は、むしろ当然あるべきだと。

そして、きっと下駄の男は人を喰ったような名乗りをするのではないかと。

お気づきの方も多いかもしれませんが、僕は夢枕獏先生の作品に大きな影響を受けています。下駄の男は、『どこからともなく』ではなく『夢枕ワールド』から飛び出してきたに違いありません。どことなく真壁雲斎の影があります。しかし、僕の中ではもう少し違って、下駄の男はもともとは凄腕の技術者で、そこから「こっちの世界」に足を踏み入れた人物ではないかと……陰陽師がPCを活用するのではなく、ハッカーが陰陽道を使いこなすイメージでしょうか？

警察組織や暴力団と呼ばれる組織について、僕はほとんど知識がなく、そこを描くことについては恐ろしいほどのプレッシャーがありました。しかし、運がいい事に、ある日僕が拠点としている事務所に警察の方々が出てきました。なんでも近くの建物を監視したいので、場所を貸してくれないかと……残念ながらその要望には諸般の事情で答えられませんでした。本物を間近で見られたことは、とても大きかったと思います。

これも、下駄の男がなせる業なのか？

はたまた僕が風邪を引いて病院に言ったときのこと、待合室で偶然、少し怖い感じの方々そばに座られて、その方々の会話が耳に入ったことも大いに刺激になりました。

これも、きっと……

いずれにしても、僕は書こうと思ってこの続編を書いたのではなく、何者かの巧みな操作によって書かされたということは疑いようがありません。僕が一生懸命になって考えたのは最後のオチ。ウルトラ怪獣の下りだけです。

そして、この作品を概ね書き終えたとき、下駄の男が活躍する次のステージが頭によぎりました。僕はいま、待っています。彼らが再び囁きだすのを……その囁きはまだまだ、小さなものですが、僕はその声に耳を傾けます。『闇の塔』に繋がる物語。今度はかなりホラー色が濃く、おどろおどろしいものになるような予感。そして下駄の男の拝み屋としての様々な能力が明かされ、大活躍してもらおうと思っています。

最後に、ここまで読んでいただいた方にお詫び申し上げます。投稿時点で本書は校正がほとんどできておらず、不備が多々ございました。平成23年6月27日までの改定で一部キャラクタ

一や組織について、呼称の変更がありました。その他、服装やセリフなど修正をさせていただきました。

今回の作品を最後まで読んでいただいた方には、予めお詫び申し上げます。そして、あわせて、深く、深く、御礼申し上げます。感謝。感謝。

平成23年6月27日 闇の塔が見える地にて

めけめけ

あとがき

この作品は僕が書いたのではない。僕が生み出したキャラクターたちが勝手に動き出したのだ。

もとは『傘がない』という、短編ホラー、ちょっとした奇談だった。

ベースとなるお話は、私自身が雨の日にDVDを返却に行ってももの10秒で傘を盗まれた毛経験があること。そして、同じような経験を、とあるブロガーさんが中華料理店で経験したこと。さらにその方が体が大きい方で、大き目の傘を盗まれたこと、たかだかラーメン一杯を食べにきただけで、その大事な『自分の傘』を盗まれたことに、ひどく憤慨していたことが、きっかけになっています。

そして最初のプロットは、傘を盗まれた客がレンタルDVD店に立てこもり、店内の人質と、映画の内容などを折り混ぜながら暴れまくるというものでした。これは80年代のアメリカ映画「フォーリンダウン」であったり、日本のオムニバス映画『バカヤロー! 私、怒ってます』のようなものをイメージしていました。

ところが書き始めるうちに、不意に下駄の音が鳴り響いたのです。

下駄の男はどこからともなく僕の前に現れて、「フン！」と吐き捨てながら、前を通り過ぎていきました。僕は思わずその後姿を眼で追い、そして見てしまったのです！

妄想の暴走。プロットなどぶっ飛ばして、僕は『傘がない』を仕上げたのです。

がしかし……

彼は言いました。「本当に事故が起きたとして、しかもそれが、素行の悪い人間ばかりだとしてじゃ……そりゃあ、警察も黙ってないし、その筋の人たちも何かおかしい事が起きてると思うはずじゃ。それよりも何よりワシが黙っておれんわい！」

こうして下駄の男は、僕に無理やりにその後の世界を描かせたのです。いや、しかし、現実的なきっかけは、もっと現実的で、しかも不純なものでした。

僕の知り合いのプログラマーの方と飲んでいるときに、あるダジャレを言ったのです。それがあまりにもおかしかったので、ふと、下駄の男のキャラクターの肉付けに使えないかと考えたのです。

拝み屋＝陰陽師にとって名前とはとても大事なもので、自分の素性がバレることは、何がしらの呪詛にかけられるリスクがある。そのリスクを回避するために、普段からまともに名を名乗らないという設定は、むしろ当然あるべきだと。

そして、きっと下駄の男は人を喰ったような名乗りをするのではないかと。

お気づきの方も多いかもしれませんが、僕は夢枕獏先生の作品に大きな影響を受けています。下駄の男は、『どこからともなく』ではなく『夢枕ワールド』から飛び出してきたに違いありません。どことなく真壁雲斎の影があります。しかし、僕の中ではもう少し違って、下駄の男はもともとは凄腕の技術者で、そこから「こっちの世界」に足を踏み入れた人物ではないかと……陰陽師がPCを活用するのではなく、ハッカーが陰陽道を使いこなすイメージでしょうか？

警察組織や暴力団と呼ばれる組織について、僕はほとんど知識がなく、そこを描くことについては恐ろしいほどのプレッシャーがありました。しかし、運がいい事に、ある日僕が拠点としている事務所に警察の方々がやってきました。なんでも近くの建物を監視したいので、場所を貸してくれないかと……残念ながらその要望には諸般の事情で答えられませんでした。本物を間近で見られたことは、とても大きかったと思います。

これも、下駄の男がなせる業なのか？

はたまた僕が風邪を引いて病院に言ったときのこと、待合室で偶然、少し怖い感じの方々がそばに座られて、その方々の会話が耳に入ったことも大いに刺激になりました。

これも、きっと……

いずれにしても、僕は書こうと思ってこの続編を書いたのではなく、何者かの巧みな操作によって書かされたということは疑いようがありません。僕が一生懸命になって考えたのは最後のオチ。ウルトラ怪獣の下りだけです。

そして、この作品を概ね書き終えたとき、下駄の男が活躍する次のステージが頭によぎりました。僕はいま、待っています。彼らが再び囁きだすのを……その囁きはまだまだ、小さなものですが、僕はその声に耳を傾けます。『闇の塔』に繋がる物語。今度はかなりホラー色が濃く、おどろおどろしいものになるような予感。そして下駄の男の拝み屋としての様々な能力が明かされ、大活躍してもらおうと思っています。

最後に、ここまで読んでいただいた方にお詫び申し上げます。投稿時点で本書は校正がほとんどできておらず、不備が多々ございました。平成23年6月27日までの改定で一部キャラクタ

一や組織について、呼称の変更がありました。その他、服装やセリフなど修正をさせていただきました。

今回の作品を最後まで読んでいただいた方には、予めお詫び申し上げます。そして、あわせて、深く、深く、御礼申し上げます。感謝。感謝。

平成23年6月27日 闇の塔が見える地にて

めけめけ

続・傘がない～下駄の男

<http://p.booklog.jp/book/12502>

著者：めけめけ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mequemeque/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/12502>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/12502>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.